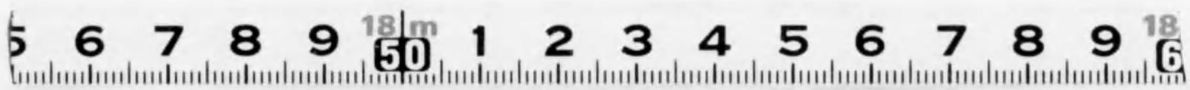
投



667

特 234
476

恩田重信著

續いろは四十八訓 全

科學書院發行

昭和十四年 帝國圖書館藏

序

予・曩きに伊呂波四十八訓を記して修身講話の資料となせしが尚足らざる處あるを思ひ卽ち濁音伊呂波に就て記述せんことを欲し筆を操りて二十題を記述したのが本書である

昭和十三戊寅仲夏・剛堂恩田重信識す。

續伊呂波四十八訓目次

〔が〕學問と學者の話　一頁
〔ぎ〕義理人情の話　八頁
〔ぐ〕軍備と文明の話　十八頁
〔げ〕藝術と生活の話　二十五頁
〔ご〕極樂と獄屋の話　三十五頁
〔ざ〕懺悔と後悔の話　四十四頁
〔じ〕慈悲と忍辱の話　五十二頁
〔ず〕隨機說法の話　六十一頁
〔ぜ〕錢と女の話　六十八頁
〔ぞ〕俗人と君子の話　七十七頁
〔だ〕代議政體と政治の話　八十七頁
〔ぢ〕地獄と地藏樣の話　九十六頁
〔づ〕頭腦と人格の話　百八頁

〔て〕 電氣石と金剛石の話　百十七頁
〔ど〕 讀書と自活の話　百二十三頁
〔ば〕 莫迦と悧巧の話　百三十二頁
〔び〕 貧乏と健康の話　百四十二頁
〔ぶ〕 文明開化と野蠻の話　百五十二頁
〔べ〕 便毒と淋病の話　百六十三頁
〔ぼ〕 煩惱卽菩提の話　百六十七頁

以上

續伊呂波四十八訓

剛堂　恩田重信（七十八歳）著

〔が〕學問と學者の話

世に寶といふ寶は隨分澤山ありませうが學問ほど貴い寶は外にありますまい・金錢も寶には相違ないが・偶然の失敗から三千萬圓の財産を一朝にして失つた人がありました・米藏に山と積み込んだ米も一夜の大火ですつかり炭にして翌日から親戚の救助を受けた例などは私の實見した例であります・それに較（クラベル）と覺え込んだ學問といふものは有難いもので死ぬまで身に就てゐるばかりでなく・學問の德が靈魂に刻（キザ）み込まれて次ぎつぎの生活社會にまで持て行くものであります・こんな貴重な寶は他に決して有りません・そこで明治天皇の御製にも

世の中に・ひとり立つまで・修め得し
わざこそ人の・たからなりけれ

と仰せられたのが拜し得られるのであります・學問ほど貴いものはありません・所で支那の本に

讀也好・耕也好・學好便好（中華諺海）

と申す言葉が載つて居ります・讀むのも惡くはない・耕すのも惡くはない・が學んで實行して善いのが本當に善いといふものである・といふ義であります・實行して善くない事なら學ぶにも及ばず讀むには猶更ら及ばぬと言ふ義でありませう・それから又支那の本に

讀書要講・吃飯要帮

といふ言葉が載つて居ります・飯を食ふても消化しなくては食の用をなさぬ・それと同じく書を讀んでも其の義理を會得しなくては讀書の益がない・といふ意味であります・卽ち書物は只漫然と讀んではいけない・三年間お小僧がお經を讀むような讀方ではいけない其の講釋を善く聽き覺えて其の意義を實行の上に現はして試（タメ）して見なくてはいけない・といふ義であります・所で今の人は義理の深いものを讀むことを好まず・寢てゐて讀み得る樣な浮薄のものや輕薄なものばかりを好んで讀むのであります・書齋に立籠り（科學者ならば實驗室に立籠り）苦心に苦心を重ね・調べに調べを重ね・疑問に疑問を比較研究するといふ樣な態度を頗る好まないのであります・手近な話しだが・昔しの人は詩文を作つても一句はもちろん一字でも疎略には爲（シ）なかつたものである・唐人賈島といふた人は或る時「題李凝幽居」といふ詩題で

閑居少鄰並　草徑入荒園
鳥宿池邊樹　僧敲月下門
過橋分野色　移石動雲根
暫去還來此　幽期不負言

といふ詩を作つたが・僧は敲く月下の門と言ふた方が好いか・僧は推す月下の門と言ふた方が好いかと思案に思案を重ねて・街道を夢遊的に進み・とうとうお大名樣（韓退之）の駕籠にぶつかつたので・其のお大名樣に叱られた後・其のお大名樣に「推す」よりも「敲く」と言ふた方が宜しいと教えていただいたので「僧は敲く」といふことで其の詩が今日に傳はり・そして其れから後詩文を練ることを「推敲する」といふことになつたといふのである・こんな話しは中學生でも知つてゐることだが・さて實際にこんな風に苦心に苦心を重ねる人は今日の所では多く無いらしい・況んや山陽先生が或人から書物の序文を賴まれて草稿を作られたが本箱の側面に張りつけて毎日手を入れられたが三年目に始めて完成されたといふ樣な・左樣な丹誠を籠める人は今日一人も居らぬらしい・世が世知辛くなつたといふのは・こんなことも其の一ッの現象かも知れんが・とにかく今の人は輕薄であります・なんでも手取早く・金（カネ）にさいなれば宜しいと考ひて・勉强もし・研究もするのであるから・土臺學問をする方針が違つてゐるのであるから止むを得ぬことであらうが・然し情（ナサケ）ないことと言ふべきだ・支那の本に

讀書不成・作吏

といふ文句が見えてゐるが・支那ばかりが是れでは無い・日本で今日勉强する人はいづれも官吏とか會社員とか・兎に角月給の取れる處に往くのが目的なのである・言はば食ふための學問なのである

然らば學問は何のためにするのか・と尋ねる人もあるだらうが・そこが一番大事な問題なのである・論語の述而篇には・こんな事が書いてある・文字の數はたつた十二文字だが・實にうまい事が書いてある曰く

志於道・據於德・依於仁・游於藝

（道に志ざし・德に據り・仁に依り・藝に游ぶ）

である・吾々が學問といふのは・初めの九文字のことで・そして藝に游ぶといふ其の藝が今日上・大學から下・小學校に至るまでの總ての學問なのである・といふては・一般の人に理解が困難であるから・吾輩は「道に志し・德に據り・仁に依る」の三ッの學問を一體として是れを「本當の學問」といひ・そして最後の藝に游ぶだけを「實用の學問」と稱してゐるのである・が・蓋し西洋には本當の學問が無くて・いづれも實用の學問ばかりであり・そして其れをサイアンス science とか stientia とか乃至 Wissenschaft などと稱し・一口に科學といふてゐるのである・科學の科は文科・理科・工科・醫科・商科・農科・法科・經濟學科などと稱する所の其の科である・言ひかゆれば大學は蘊奥を窮める科學の學校で吾々の所謂る本當の學問を主として敎ゆる處では無いのである・もちろん文學部には修身學や道德學も課目となつて敎えられてゐるが・其れは植物學や動物學や乃至法律の學問などの如く客觀的に敎えもし學びもするもので其の考究することを自分自ら實行するのでない・法學者は正邪を論議し倫理學者は善惡を論議するが・邪惡な行を爲す法學者もあり・不善不良な倫理學者もあるのである・本當の學者は

「諸惡莫作・衆善奉行」

であるから不正なことや不良なことは絶對に身口意の上に表示せぬのである・若し不正なことや不良なことを身口意の上に表示するもの有つたとすれば・其の人は本當の學問に精通せぬ人なので・本當の學者では無いのである

然らば本當の學問といふものは・どうすれば良いかといふに・聖人孔子は

孝弟はそれ仁をなすの本か

と仰せられたのであるから・目に一丁字を覺えなくとも・先づ其の親兄弟に感謝の誠を以て事へる・其れが本當の學問の根本であるのである

であるから今日世間で學者と言はれるものは・總て科學の研究に熟達した人なのである・聖人孔子が藝に游ぶと仰せられた其の藝術に熟達した人のことである・であるから口や筆では尤もらしい事を言

ふたり書いたりはするが・時々不都合や不品行な事もやらかすのである・本當の學者は・漢詩の作り方も知らず・セメントの作り方も知らずとも・人としては立派な人なのである・支那の本に

讀識王叔和・不如臨症多

といふ文句が見えてゐる・王叔和は晉代の醫者で張・仲景の傷寒論を編次して三十六卷とした人で・其の三十六卷が今日に傳はつてゐる素問靈樞で漢法醫學の法華經ともいふべきものである・讀んで王叔和を識つても臨症の多きには如(シカ)ずといふのは・素問や靈樞を幾ら善く讀んでも病人を多く手に掛けたものでなくては駄目だといふことである・臨牀實驗(クリニック)に熟達した人でなければ・醫書をどんなに精しく調べてゐる醫學士でも・醫學博士でも駄目だといふことである・荻生徂徠は或人に答へて「總じて學問は飛耳長目と荀子も申候」と曰ふたそうだが・サイアンスや Wissenschaft は飛耳長目でなければ蘊奥を窮めることや精微の極に達することは出來ないだらうが・本當の學問には飛耳長目は必要でない・至誠一ッあれば其れで宜しいのである・白川の樂翁公も曾て「凡そ人・一丁字を知らずとも・善き行ひあらば則ち君子と存じ候」と申されたといふことである・格言でありませう

老生は曾て二首の端唄を作つて若いものに覺えさせたことがある其の端唄に曰く

〔一〕知識とるなら書物にたよれ・書物つあ知識の藏ぢやもの

〔二〕書物讀むなら字引にたよれ・字引きや學者の親ぢやもの

獨逸語の Wissenschaft 卽ち科學といふ文字は・知り覺えること・といふ意味である・天地萬有は不滅な書物である・此の書物を對象として道理を發見すべく研究する人が卽ち科學者である・故に知識とるなら書物にたよれと言ふたのである・そして昔しの人が其の研究したことを筆の先に書き貽した・それが今日書籍と言はれて圖書館に納められて存してゐるのである・此の圖書館卽ちライブラリイ Bücher-sammlung は知識の藏であり・そして此の土藏の中の書物を讀むには字引卽ちヂクショナリイ Wörterbuch といふものが無くてはならぬ・字引きや學者の親ぢやものといふたのは是れがためであるからである・然し此の所謂る科學者の努力だけでは決して本當の學者にはなれぬのである・近江聖人の中江藤樹先生は曾て

「學問は心の汚れを清め身の行を善くするを本質となす」

と申されたが・科學だけで聖人の學問・卽ち本當の學問を修めなければ所謂る「物知り」にはなれるかも知れぬが・立派な人にはなれぬのである・聞く所によれば英吉利斯にも佛蘭西にも

Jugend hat keine Tugend.

若いものには道德がない

といふ俚諺があるそうだが・年は若くても立派な心掛の人が決して無いことはない・孔子のお弟子の顏回は三十歳ばかりで死んだが立派な人であつた・然るに今時三十歳位の大學生の品行はどうか・怪しい

ちやないか

Erfahren kommt mit dem Jahren.

經驗は年と共に積る

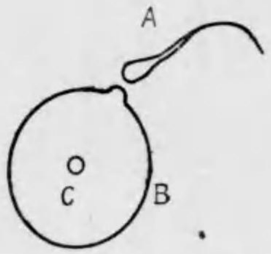
には相違ないが・聖知といふものは必ずしも年齢には關係せぬ・三十歳で十字架に上(ノボ)られたエスキリストを見れば・それは容易に知り得らるるのであると同時に八十歳の愚物が世の中に澤山ゐるのを見ても容易に知り得らるるのである・獨逸の俚諺に

ラインの河を渡るに當りては七十三歳の學者に隨ふよりも寧ろ七歳の漁家の若者に隨はんことを欲する(原文省略)

といふのがある・漁師の子供は其の知識こそ科學者には及ばぬが舟を操(アヤツ)ることは七十三歳の科學者よりも優(スグ)れてゐるのである・であるから科學者程の知識はなくとも人として立派な人が幾らも有る筈である・聖人孔子が「我れ老農に及ばず」と申された其の老農は卽ち所謂る科學の學者であるが本當の學者ではないのである

〔ぎ〕義理人情の話

圖のAは所謂る精蟲 Spermatozoid で一名遊走體ともいふものであります・此の細蟲が活潑に遊走するから遊走體と稱せられたのである・一切の生活物の精液中には必ず存在するもので・此の細蟲の靈魂が或る男性(雄性)の生殖器に寄宿する意力(佛典で所謂業識)其れが生物の生存權といひ人間にありて人權と稱せられてゐるのである・犬でも猫でも其の根本體は皆此の如き遊走體なのである・此の遊走體が母體の生殖器に進入し・そして其處に存在する卵細胞(圖のB)中に進入し其の核(圖のC)に和合する・其の過程が受胎作用(受孕作用)Befruchtung といはるるのであり・そして此の精蟲は卵細胞內に於て段々有機質無機質を吸ひ集め遂に胎兒 Embryo(ἐν-βρύω 卽ち發生するといふ希臘語に依りて作れる言葉である)となり人間なら約十箇月の後・母體を辭して此の娑婆世界に出現し・浮世の空氣を吸つて呱呱の聲を發するのである・大乘起信論の疏には一念托胎・十月滿足・此身卽生とかいてある・一念托胎とは精蟲が子宮內に進入して其處で受孕作用を行ふことである・此の發生 Entwickerung の樣子を知らぬものは所謂る無智者で馬鹿に相異ない



吾々は先づ斯樣な順序で父親(チチヲヤ)母親(ハハヲヤ)の世話や保育により・今日一人前の人となつたのである・所で犬や猫には斯樣な順序や世話や保育によりて・大きくなつたといふことを自覺するだけの知慧が發生せぬが・苟も人間たるもので斯樣な順序と世話と保育とによりて始めて人となつた・といふことを知らぬものはない・但し知慧のない野蠻人や顯微鏡も覗いたことのない低級知識の人は・成

る程左樣かな・と首肯することは出來ないかも知らんが・知識教育の進歩した今日の一人前の人で斯樣な順序や保育によりて成人したといふことを知らぬ人はあるまい

古語に「物あれば則(ノリ)あり」といふのがある・則(ノリ)とは天理とか法式とかいふ意味で例へば圓(マルイ)ものがありとすれば・其の物の角度は必ず三百六十度で三百五十度の圓もなければ三百七十度の圓もなく・又方(シカク)なものがありとすれば其の物は必ず・四邊から成つて居り・そして三邊の方もなければ五邊の方もない筈である・といふことである・砂糖は甘くて唐辛は辛いに定(キ)まつてゐる・甘くない砂糖もなければ辛くない唐辛もない・若し有りとすれば其れは砂糖や唐辛に似たもので眞の砂糖や唐辛ではない・名づけて類似體(バラ體)といふ・腸窒扶斯に能く似たチフスがある・醫者は其れをバラチフスといふてゐる・とにかく甘くない砂糖もなければ辛くない唐辛もないのである

四書の中の大學の中に

人の子としては孝に止まり・人の父としては慈に止まる

とかいてある・此の格言に依れば孝なき二手二足は人の子ではなくて犬か猫の子であらう・又慈のない二手二足は人の父ではなくて犬か猫の父であらう・聖人は人倫五常の道といふものを設定されたのである親義別序信が其れである・詳言すれば父子・親あり・君臣・義あり・夫婦・別あり・長幼・序あり朋友・信ありである・尙ほ詳言すれば親(シタシミ)のない親子は人間の親子でなく義(正しいすぢみち)のない君臣は人間の君臣でなく・甲夫婦と乙夫婦とが區別なく亂れ交る樣なものは人間の夫婦でなく・どちらが兄で・どちらが弟か・其の順序の判らぬ樣な者は人間の兄弟ではなく・そしてお互の間に約束もなく同情もない樣なものは人間の仲間ではないといふことなのである・そして此の五常の法則卽ち道理卽ち關係を堅く心得て踏み損ぜぬ樣にする其の心掛けを義を守るといひ人間の人間たる所以とするのであるが・分けて言へば甲と乙との間の關係が義理であり甲と乙との心持が人情なのである・所で犬や猫の相互の關係には義理もなく情誼もない・であるから義理も知らず情誼も知らぬ樣な二手二足があつたとすれば・其れは本當の人間では無い・但し人間の子でも一歲二歲位な幼兒には知慧といふものが發生せぬ故・親子とか兄弟とかいふ觀念も亦生じ來らぬのであるから・子猫(コネコ)や子犬(コイヌ)などとたいして違ふ所はないが幼稚園から小學校へゆく程になれば知慧が目に見えて發生し來るから・さてそこで教育といふことを爲(シ)始めるのである・卽ち後來社會人として活動するに當り畜類の如き行爲をされては社會が成立せぬことになる・そこで聖人は卽ち人倫五常の道といふことを制定して教育といふことを始められたのである・言ひかゆれば人倫五常の道は人間をして社會的生活を爲さしめんための法規なのであるから・教育の根本は人間に人倫五常の道を敎ゆることに外ならぬのである・尙言ひかゆれば人間に知識ばかり注入して五常の道を敎へ込まぬとせんか・左樣な人間の寄合世帶は決して幸福なものではない・從つて吾々が本當の學問といふのは先づ人倫五常の道を聞き覺え・そして

所謂る親義別序信を踏み損ぜぬ様に終日終夜懸命に努力し力行することなのである・卽ち父としては子供に對し親みが缺けはせぬかと反省し・夫としては自分の妻を忘れて邪淫に陷りはせぬかと反省し・そして友達に對しては信義を缺きはせぬかと反省するのである・蓋し是等が吾々の所謂る本當な學問である・論語には朝に道を聞き夕に死すとも可なりとかいてある・其の所謂る道が卽ち人間たる法理で結局は人倫五常の道のことであり・そして此の道を履行することが・やがて立派な人(ヒト)になる所以で卽ち人生の目的を達する所以なのである・論語に道に志(ココロザ)せとあるのは・五常の道を實踐躬行して立派な人にならばやと堅く心に誓ひつつ實行せよといふことである

抑も借りた金は還へすのが當然ではないか・そして貸した方には取りかへす權利がある・之れを債權 Verpflichtung といひ借りた方には・返へすべき義務がある・之れを債務 Schuld といふ・此の債務を果すべく努力する・左様な人を指して義務心の强い人といひ・然らざる人を指して無責任な人といふのである・他の所有物を承諾なく取り去る・此の行爲を或は掠奪といひ或は窃取といふ・動物界にありては强食弱肉の行爲が行はれてゐるが人類社會に强食弱肉が許されたならば人類社會は地獄となり終には滅亡することになる・獨逸の文士コッッエブウは「同情のない人間程・暴惡な動物は此の世にあらぬ」といふたそうだが若し人間に强食弱肉が許されたならば・本當に此の世は地獄となるに相違ない・蓋し斯様な事の行はれぬ様に仕向くるため・法律といふものが制定されたのである・茲に人ありて他の人の所有に屬する家屋に無償で住居したりとせんか・名づけて横領といふべきである・斯様なことを許したらば社會は又破滅に趣くのである・故に斯様なことも亦法律で禁制されてゐるのである・蓋し借りた金はかへし・かりた家には家賃を拂ふのが當然である・此の當然なことを無視して履行せざる・之れを名づけて亂暴といふのである

思ふに吾々は先づ母親の胎内に於て十箇月間榮養の供給を受けて生れ來りそして後・鞠育の世話を受けて今日に至つたのである・親子の關係ありといふか無いといふか・此の關係が卽ち親子の義理である一種の金鎖で・切つても切れない鎖(クサリ)である・此の金鎖を認識するものが人であり知らぬものが畜生なのである

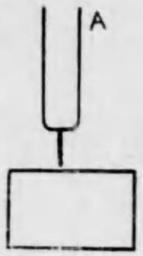
苟も人にして親子の間に此の金鎖の存するあるを知らば其の親は其の子を愛し其の子は其の親を敬するに至るべきであらう・父子・親ありとは・斯様な關係を言ひ表はしたのである・卽ち父が子に對する關係が慈であり子が父に對する關係が孝である・卽ち人の子としては孝に止り人の父としては慈に止ると申された理由なのである・人にして此の理由を知らぬとせんか・其の人は所謂る人面獸心なるもので畜生に近い人なのである

彼の旅人を見よ一夜の宿をかりてさへ其の出發するに當り宿賃を支拂ひ且つ謝辭を述べて・其の旅舍を去るではないか・然るに今茲に人ありて長い間兩親の家に止宿したるにも拘はらず・宿賃も支拂はず

挨拶もせずして立去つたとせんか・此の人は自分と兩親との關係を知らぬ畜類なりと言はれても拒むことは出來ない筈ぢやないか・孝行は此の義理を認識するときの感情より餘義なくされた行爲に外ならぬのである・言ひかゆれば反始報本的行爲なのである

詩人李白の有名な文章に「春夜宴桃李園序」と題したものがある・手近い所では文章軌範に載せられてある・其の序文の書き始めに「夫れ天地は萬物の逆旅・光陰は百代の過客・而して浮生・夢の如し云云」とかいてある・此の娑婆世界は慥かに萬物の旅舍である・吾々は此の旅舍に於て相客と日夜談笑してゐるのである・「袖振れ合ふも他生の縁」といふ俚諺もあるが社會人として此の世に住むとき吾々の同胞に對する關係は兩親や兄弟に對する關係より決して淺しとは言はれぬ・言ひかゆれば吾々は社會人として社會から莫大な恩義を受けてゐるのである・田を作る人が無ければ吾々は米を食ふことが出來ない・布帛を織る人が無ければ吾々は寒暑を凌ぐことが出來ない・其の他一切の生活資料を作る人が無ければ吾々の生活は如何に荒れ果つるであらうぞや・此の事相を回顧するもの・誰れか此の社會に恩義なしといふか?? 此の恩義に報ゆる行爲が則ち社會奉仕である・人間以外の物は・此の大旅舍に住んでゐながら・相互に深き關係あるを知らぬ・人は萬物の靈長であるといふ言葉も此の邊から誘致されたものであらう・然るに若しも人ありて「僕は獨立獨行・一毫も他人の世話になつて居らぬ」と言ふたりとせんか・其の人は恐らくは石地藏か然らざれば犬か猫の類なるべし・況んや同郡同縣同國に住むものにして社會的恩義を知らぬとせんか・愈よ以て牛馬の類と爲さざるべからず・憫然の至りではないか・佛敎では已に四恩を說いてゐる父母の恩・國王の恩・四海同胞の恩・天地萬有の恩が其れである・斯樣な恩義や義理を能く呑み込ませる・其れが敎育の第一義なのである

物理學の音響論の講義の時に用ふる機械に音叉 Stimmgabel といふものがある・鋼鐵で作つた圖の如きものである・其の太さも長さも全く同じで且つ其の振動數の全く同じなもの二箇を取り來り一ッは



机の右端に置き一ッは其の左端に置き・然る後・どちらでもよろしい・一ッの音叉の頭部A點を木製の小さな木椎(サイヅチ)で打つて見玉へ發音するであらう・然るに其の發音に連れて他の音叉も亦發音するのである・此の現象を學者は共鳴 Resonanz といふのである・甲音叉から起つた音波に感じて起るのであるから・一種の感動である・但し音叉の太さや長さ等に相異が有つた場合には決して共鳴現象は見られないのである

人間には感情 Gefühl といふ一種の特性がある・詰まり物に感んじて心の動くことである卽ち一種の共鳴である・此の感情は犬や猫には無い唯人間にのみ見られるものなるが故・是を名けて人情といふのであるが・西洋には感情 Feeling とか Gefühl とか Emotion などといふ言葉はあるが特に吾々が義理人情とつづけて用ゐる樣な・左樣な人情に當嵌めるべき文字は無いらしい・言ひかゆれば西洋人の頭の中には吾々が謂ふ所の義理人情といふ樣な感情は無いらしい・亭主に死なれて女房が泣いてゐる・そ

れを見て吾輩の胸裡に起る感情（名づけて同情 Mitleid ともいふ）は損得を離れた共鳴であるが西洋人の共の場合に起る感情は・すべて打算的の者である・知慧が進んでゐる結果かも知れぬが・義理人情といふ事の教育の足りない結果であらう・明治天皇の御製に

事しあらば水にも火にも入りなむと・思ふがやかて大和魂

といふのがある・西洋の兵士は打算的の人情に支配されてゐるから・どんなに說明して聽かせても・此の御製の心持が理解されないといふことである・是れは吾輩の友人で五十年あまり獨逸の外交官に交際したものの語りきかせた事である・蓋し理性も人間に必要であり良知良能も人間に必要であるには相違ないが・義理人情の篤い心持程人間に必要なものはあるまい・蓋し打算的感情なるものは・其の實際は洵に冷酷なもので同情といふても・小さな河川が大きな河川に合流する樣なもので・少しも溫味といふものが起らぬのである・日本には俠客といふものが有つた・此の俠客の仲間では義（ギ）といふことを異常に重く心得てゐる風義があるので・一たび約束したことは利害得失を離れて維持するものである・義理に迫つたらば水の中へでも火の中へでも飛び込んで其の約束の義務を果すのである・實に涙ぐましい感情なのである・然るに西洋人は利あれば合同し利盡くれば分離するといふ性情を以てゐる故・其の交際や全く冷血的なのである・從つて昨日まで父子として親しみのあつたものでも利害相反する樣になれば今日は已に行路の人となるのである・吾々は左樣ではない・假りに利害相反する樣になつたとしても子たるものは・徹頭徹尾・父母に事へるを以て寧ろ名譽とするのである・聖人孔子は「義を見て爲さざるは勇なきなり」と仰せられた・子として父母に事へるのは當然な義務である・自己の利害損得から打算して・此の當然の義務を無視する・名づけて利己主義の人間といふのである・個樣な場合に自己の我意を抑制して當然の義務を盡すには餘程な强い勇氣が無くてはならぬ「義を見て爲さざるは勇なきなり」と仰せられたのは・ここの消息を申されたのである・フランスの政治家ギゾウ Guizot (1787–1874) は曾て「何の地を問はず孤獨主義大に行はれ人々個々唯々自己の事のみを圖り其の思想・自己の外に及ばず專ら自己の情慾を逞ふする時は其の社會は大小に拘はらず新舊に論なく殆んど成立する能はず」と言ふたといふことであるが・誠に至言とすべきである・荀子といふ本の中には「遠きを致す・必ず近きよりする」とかいてある・吾々の身に最も近きものは父母であり其の次は兄弟である・社會の大恩義に報いんとするものは・先づ先づ手近き所の父母の恩義から報いて進まねばならぬのである・父母の恩義も報へることの出來ぬ樣な人間は結局世界人類のためなどに偉大な貢獻は捧げ得ぬのである・ショオペンハワアといふ哲學者は西洋では仲々名高い哲學者だが所謂る科學の學者で本當の學者でなかつたから母親と大議論の末・親子の恩義を忘れて母を見捨たのである・吾が近江聖人は公職を辭して老母の膝下に歸つて來たではないか・聖人と言はれるのは當然なことである・概して西洋人は畜生に近いのである其の社會は畜類の群棲の如きものである・權利ばかりが盛んに行はれて・親子の恩義や

君臣の恩義なんてものは極めて輕く視られてゐるのである・其の最も甚しいのは猶太人であると言はれてゐる・吾恩師長井長義先生は明治の初年から明治十八年頃まで獨逸に居られた人であるから西洋人の心狀など最も能く承知して居らるる方(カタ)だが此の先生の御話しに依れば猶太人には義理人情といふものは全く無い唯だ有るものは貯金の一途のみである・由て考察して見玉へ日本でも吝嗇親父に殘忍性の多きことと・金持に無慈悲なものの多いことを・明治天皇樣が御製の中で「火にも水にも入りなんと思ふがやがて・大和魂」と仰せられた・左樣な勇氣は猶太人や西洋人などには決して期待し得られざるものなのである・見玉へ我利我利亡者の家庭を・人情もなければ愛情もない・從つて親子で利を爭ひ・兄弟で利を爭ひ・甚しきに至りては義絶して終生相ひ見ざるに至るのである・鞠育の恩をも無視し孝養なんて事は全く行はぬのである・是れが西洋人の思想である

〔ぐ〕軍備と文明の話

大正年間には色々な思想が瀰漫して我が帝國も頗る危險を感じたかの如き狀態であつた・其の色々な思想の中で軍備縮少といふ意見は相當に多くの人の頭腦中に浸み込んだ模樣であつた・當時吾輩等は軍隊と警察とが不完全に陷つたら吾々の生命や財產は絶大な危險狀態に陷つて此の世界は地獄と修羅の混成狀態となつて一分時間たりとも安全を保つことは出來ないから・軍隊と警察とには三度の食事を二度に減じても勢援せねばならぬ「軍事費が增額されて民衆は負擔に堪えない」などと・低級な民衆の御機嫌を取る樣な政談演說は須らく禁止せよ・と絶叫したのである

考いて見玉へ遼東半島の還附は其の原因・どこに在つたのかを考へて見るがいい・當時の帝國の軍隊にして三國の干涉を拒絶し得るだけの實力を維持してゐたらば決して上御一人より我々卑賤のものに至るまで臥薪嘗膽の苦杯は飲まなかつたであらう

而してクロパトキンが西比利亞鐵道をズンズンと延長して遂にハルビンより旅順に大軍を輸送して吾が帝國を脅迫した時・若し帝國の軍隊にして不幸・微弱であつたならば今の頃は帝國もどんなみじめなものになつて仕舞つたかは想像に餘りあることだらう・幸に明治大帝の御稜威と精銳な軍隊とが出來揚つてゐたので驕露も膺懲し得られ・そして國運が隆々と昇り・今や世界の强國と言はれた某々の列强までが嫉視する樣になり・大日本帝國の臣民たる光榮を荷ひ得る樣になつたではないか・蓋し生物世界は一種の競爭場裡であるから・一分時間といへども油斷は許されぬのである・否・否・油斷なく軍備を充實し・いつ・なん時・戰爭が始つても必ず勝利し得らるるだけの自信のつく樣に整頓して置かねばならぬのである・是れがためには吾々同胞は常に戰時に居るつもりで總ての條件に善處せねばならぬのである・但し外人の搾取下に甘んずる樣な腐つた根性の持主ならば此の人は蓋し吾々の同志ではない・自ら進んで印度かジヤワか・スマトラあたりへ移住するがよろしい・日本帝國內に住む所の吾々は國恩報

謝の赤誠を抱き一命を鴻毛の輕きに比し水火を辭せず國難に殉するの覺悟を深く心底に保持してゐるものである

軍備といふことは兵器の精鋭や兵卒の多きをのみ指すのではない本當のことをいへば兵器は少し劣りても・兵卒は少々少くとも・此の兵器や軍隊を操縱する將兵の精神的威力の充實が先決問題である從つて此の精神的威力なるものは下・小學兒童から上・大學學生にまで注入せんければ本當の軍備充實とはならぬのである・のみならず・男子ばかりでなく・女子にも婦人にも注入せんければならぬ・言ひかゆれば軍備の充實といふことは國民全體の思想が完全に一致して教育勅語の御聖意や軍人勅諭の御聖意を奉體しそして造次にも顚沛にも忘れない樣な熱誠を圓熟させることが本當の軍備充實といふことなのである

もちろん文學や美術の進步發達も國家としては大切なことであるには相違ないが・そんなものは多くは文弱に流れるの弊を伴ふてゐるのである・羅馬帝國の滅亡したのは則ち其の殷鑒であるのである・蓋し從來の教育は歐米の模倣教育で精神氣魄を拔きにした教育であつたのである言ひかゆれば科學知識萬能の教育であつたのである理學博士とか工學博士とか乃至醫學博士藥學博士などと言はれる人は如何にも立派な學者先生であるかの如く考へられたのである識者は是れまでの教育を知識偏重の教育と稱して非難してゐる蓋し我々の身に取りて大切なものは德育である德育の伴はない教育は虎に角をつける樣なもので人間を猛惡な動物化する所以に外ならぬのである杉浦重剛先生は・既に「德育は人を成す所以の基礎にして・凡百の人事は必ずや源を茲に汲まざるを得ざるなり（格言全集）と申しておかれた・而して其の所謂る德育なるものは教育勅語の御聖意や軍人勅諭の御聖意を奉戴して・それに隨順する樣に奮勵努力することであるのである

軍備なるものは戰爭のときばかり必要なものではない・泰平無事なときでも寧ろ大いに必要なものであることを銘記して居らねばならぬ獨逸帝國の英雄・鐵血宰相と言はれたオット・フォン・ビスマルク Otto von Bismarck は千八百八十七年の一月の十二日の帝國議會で

軍隊がないならば國家も秩序も考へられない

Ohne die Armee ist das Reich, ist die Ordnung nicht denkbar.

と演べられたのであり・そして鐵血宰相の無二の同僚たる陸軍大將ヘルムート・フォン・モルトケ Helmuth von Moltke は千八百八十六年の帝國議會に於て

我々の最善な安全は吾々の軍隊の優越なる處に存する

Unsere beste Sicherung beruht in der Vorzüglichkeit unserer Armee.

と斷言されたのであり・そして獨逸皇帝ウィルヘルム第一世陛下は

最近の戰爭に於て忠誠と犧牲との偉大な證明を與へたが如き精神に於て軍隊が維持されてゐる

間は祖國は危險に沈むことなかるべし(原文省略)

と仰せられたのである・以て軍隊の如何に大切なるかを思ふべきである

こと二十年程以前から軍備の競爭で漸く國帑の疲弊を告ぐるに至るや英米がお先棒になつて軍備縮少といふことを言ひだしたので我が日本でも其れがため軍艦を減(へ)らし師團を幾つか廢することになつて・軍人の古物が澤山出來たこともあつたが・其の魂膽は日本の段々强くなる兵力を減殺して自分達の現狀維持を策したのである・實に横着な言ひ分なのである・所で四五年前・日本が滿洲國の建設を援助したので世界の各國が躍起となつて・揉み消さんとし國際聯盟會議で日本を無茶苦茶にいぢめたのであるが日本は見る所あり斷然聯盟を脱退して其の束縛を避けたのである・が・吾々は列强が聯合して日本に攻めて來たらば大變な事になると窃かに心配してゐたが・列强も手を出しかねて・オヂャンになつたが蓋し日本に武力の强き軍備が儼存してゐたから・手も出さなかつたのであるが・若しも强力な軍備がなかつたならば必ずひどいめに逢つたに相違ない・こんな事から考へて見ても國威の宣揚は强力の軍備に基礎を置かねばならぬことが明瞭に合點し得らるるのである然し最近(昭和十三年一月)に至り英國でも米國でも露西亞でも盛んに軍備擴張を行ふことになり同時に秘密主義に復歸し隙(スキ)をねらつて日本を屈伏させべく・たくらんでゐるのである・五萬幾千噸といふ樣な巨大な戰鬪艦を造り附屬の艦船も是れに準じて增大し以て世界の一等軍國たるべく努力してゐるのである・油斷すると・ひどい目に逢ふことになるかも知れん・と・今や吾々も心配の渦中に卷き込まれる樣な狀態になつてゐるのである・恐らくは其の筋に於ても格外に憂慮されて居らるるであらう

油斷はもとより惡るい事だが然し五萬幾千噸の軍艦を主力艦として・堂々の陣を張つて攻め來れりとするも・蓋しそれは餘り恐るるには及ぶまいと思ふ日本には優秀な飛行士や勇敢な海軍將兵が澤山居らるるから・九分九厘・間違ひは無いと吾輩は信じてゐるのである・固とより亞米利加や英吉利へ日本が攻めて行くといふことは出來ない相談に相違ないが・然し攻めて來たのを防ぐといふ段になれば・向ふ脛をかつぱらう位なことは・朝飯前の仕事であらうと思ふのは・今度の上海事件や北支の攻擊に於て明かに吾々の認識した所なのである・からである

昔しの物譚りに斯樣なことがある曰く・谷風梶之助や小野川喜三郎の樣な天下第一位の大力士でも五六疋の熊蜂に攻められ地に伏して泣いたといふ話しが其れである・五萬幾千噸の巨艦でも五六隻の潛水艇に攻められ八九臺の飛行機に見まわれたらば海底の藻屑とならざるを得ぬだらうぢやないか・心配するには及ばぬことぢや・然し是れも御稜威を脊中に脊負つて行くときのことである・亞米利加あたりの傭兵には期待の出來ぬことである

昭和十三年一月十五日のブラッセル發同盟の電報に由れば國際勞働組合聯盟と第二インターナショナルとの合同會議では英國勞働組合會議から廻付された日貨排斥案を討議し其の結果・原則的に日貨を

排斥することに決定したといふことである・今や世界の各國は日本帝國を目の敵に見てゐるのである・吾々は祖國のため三度の飯を二度に減しても萬善の道を講ぜねばならぬのである

所で商人根性といふものは・いつの世にも出しやばつて・國歩を危殆に導かんとするものである・ビスマルクの宰相たりし頃にも・軍事費は不生産的のものだから・成るべく減額しようではないかとの建議が議會に提出されたのである・これに對しビスマルクもモルトケも相ひ携へて熱辯を振ひ説明を與へたのである・ヨハン・ジアック・エンゲルといふ議員は斯樣な商人根性を譴責して

高貴な勇敢な人の血液と生命とを黄金で權(ハカ)り・そして軍隊維持費に對する小額な割當金を計上するなんてことは軍人に對して捧ぐべき尊敬を拒否することである・斯樣な人の精神は小商人の精神であつて輕蔑すべきものである

と論じたのである尤もな議論である帝國が他國の蹂躙する所となつても・かまはぬといふなら・それは別だが苟も帝國臣民として・こんな無責任な言は・吐き得られぬ筈ではないか・吾輩等の口からは・こんな無責任な言はどうしても出ないのである・蓋し平和の最も確實なる道は戰備を整ふるにあり

The surest way to peace is a constant preparation for war.

とは昔しから言ひ傳へられてゐることである・天下の泰平を望むものは何を差し置いても軍備は整へなければならぬのである・かくて文明開化も期待されるのである

〔げ〕藝術と生活の話

美を實際にあらはす手段が藝術である・例へば象牙を刻(キザ)み・そして大黒樣を作つたとして其の大黒樣が「圓滿な相貌を示めし・見るものに所謂る美感を惹起する樣であれば其の大黒樣は一種の藝術的作品と言はるべきものであり其の作者の技倆は立派な藝術的技倆と言はるべきものなのである」これと同じく墨筆を以て色紙に「梅の枝に止れる寒雀」を書いたとして其れが見るものに美感を惹起する樣であれば其の繪は一種の藝術的作品と言はるべきものであり其の筆者は立派な藝術家と言はるべき人なのである・蓋し梅の枝ぶりや雀の姿勢などが時節の寒氣などと能く調和され統一されてゐるから美感が吾々の心裡に誘發されたのである

或る神殿に參拜し・そして神官が祭式を執行される際・笙(シヤウ)篳篥(ヒチリキ)の幽遠な神々しき音樂を拜聽すれば愚物でない限り誰れでも襟を正して崇高尊貴の感を覺ゆるであらう・此の雅樂師は立派な藝術家であり其の音樂は立派な美術品なのである・但し大神樂の笛や大鼓の合奏を聽いたのでは決して崇高尊貴な美感は起り來らぬ・のみならず寧ろ滑稽とか諧謔とか不自然的感覺が引起されるであらう・是れは蓋し小僧でも大僧でも・教えられさへすれば誰れでも爲し得る手藝であり手仕事であるからである

上手な手品師例へば天勝の手藝などを見てゐると・心は其の手品に引き寄せられて餘念は全く消滅し・唯其の奇妙と不思議とに魅惑されるのみである・此の如き手藝は・職人的手藝には相違ないが一種獨得の藝術で・日本で

藝人に二代なし

と言はれ・獨逸で

Kunt erbet nicht（藝術は遺傳せぬ）

と言はれた樣な藝術で其の巧妙な處から吾々は是れを立派な美術であると言ふのである

劍術でも柔術でも乃至馬術でも其の技術が遊佐中佐の馬術の如く巧妙にして人々の感賞を博する樣な場合には其の技術を吾々は總て立派な美術と言ひ傳ひて賞讃するのである・が然し此の如き藝術の達成は・誰れに命じても出來るといふものではない・言ひかゆれば藝術の達成は其人・固有の天賦の才能に由るもので此の才能を碩學韓圖は「天才」Genie と稱したのである

膝栗毛といふ小說は十返舍一九（下野花輪の人糸井鳳助）の作で奇想天外より來り・人をして抱腹絕倒せしむべき名文である・蓋し此の如き名文も亦一種の天才に由つて成れるもので眞似て出來べきものではない・藝術論にも

Daher sagt man von Dingen, die jedermann kann: Das ist keine Kunst.

（誰れにでも爲し得る樣なものは藝術ではない）

とかいてある・下駄や傘は誰れにでも作られ得るから・そんな仕事は藝術的仕事でもなく・又そんな品物は藝術品でもないことは當然である・文學者となつても藝術品と言はれる樣な作品を作り出さねば文學者の價値は無いのである・のみならず・誰れにでも出來る樣な駄文は幾ら書いても・紙屑同樣・なんの役にもならぬのである・今の世にも文士とか閨秀とか言はれてゐる人間が澤山ゐるが・そんなものは春禽秋蟲同樣・時・過ぐれば跡なく消えて無くなるものである・勿體ない次第である・折角骨折つて作文でもするなら・膝栗毛ほどのものでなくとも・せめて死んで後二三十年間は世間から忘れられない樣な文章を作るべく努力するがよい・中學校の生徒でも知つてゐる名句に

藝術は長く・人生は短し

Art is long, but life is short. (engl.)

Die Kunst ist long/Das Leben kurz. (deutsch)

といふものがある・本式に言へば文章は經國の大業で不朽の盛事である典論には

文章　經國之大業　wên chang/ching kno chih ta yeh

不朽之盛事　/fu hsiu chih ch'eng shih

年壽　有時　而盡　nien shou/you shih ér tsin

榮樂　止乎其身　yung yüè/chih wu ch'i shên
二者　必至之常期　êr cheh/pi chih chih ch'ang ch'i
未若　文章之無窮　vei jo/wên chang chih wu ch'ung.

と書いてある・乃木將軍や東郷大將の偉勳は絶大なもので眞似ることも出來ず・眞似樣としても及ぶものでないが・然し賴山陽の日本外史ぐらいなものは・十二三歳頃から其の氣になつて五十年(山陽は五十三歳で死んだ)も努力したら必ず及ぶことが出來ると思ふ・人間・此の世に生れ出て・犬や猫の如く子供拵いて・得々として死んで消ゆるのは全く無意味ぢやないか・たとへそれが生前・從四位勳三等(僕の友人)であつても從六位勳五等(僕自身)であつても・死んで後四五年過ぎたら娘や孫でも殆んど欠噫(オクビ)にも出さぬ樣になるであらう・人の噂さも七十五日といふが・線香も七十五日過ぎたら供へてくれないだらう・考へて見れば詰らん事ぢやないか?? 土藏や物置・貸屋や長屋・幾ら作つて威張つて見ても「榮樂は其の身に止まる」だけで道元禪師の言ひ草ぢやないが「息き一つ引取つたら最後・あとは空々寂々」であると思ふが本當ぢや・畫聖の雪舟と言はれた畫工は八十七で死んだから壽命は長かつた・名の殘るのは無理もないが四十で死んだ左甚五郎はどうぢや今日五十六十の彫刻家も澤山ゐる樣だが左甚五郎と肩を並べる男は幾人あるか?? 繪をかくなら雪舟程になるつもりで勉强せんければ嘘だ・彫刻をやるなら左甚五郎か少くも運慶ぐらいになるつもりで勉强せんければ嘘だ・所で今時の彫刻家や畫工はどうぢや・文豪レッシングは

皇子よ・藝術は麵麭の方へ行きます
Prinz, die Kunst geht nach Brot. G. E. Lessing.

と言ふて嘆息したが・吾輩も今時の文藝家や藝術家に向つて此の嘆息を提供せんければならぬのを嘆(ナゲ)くのである・文士なるものが色々な雜誌や新聞に色々な事を書くが其れは總て麵麭のために書くので・天才發揮ぢやない・文豪ゲルレルトは

汝の理解を所持してゐる藝術ならば尙大きなものであらう・然し其の藝術が世の中に益する所がないならば・それは可笑(ヲカシ)な存在ならん(原文省略)

と言ふたそうだが吾輩は世の中に益のある藝術といふものを知らない・老子や莊子・論語や孟子なんてものは人生に頗る有益なものであるけれど・それが直に文藝品だとは思はれない・アリストファーネスは

藝術が麵麭へ向いたら其の藝術は沈澱する
Denn wo die Kunst nach Brote geht, da sinkt die Kunst. Aristophanes. Uebers. v. Minckwitz.

といふたそうだ・マルチン・ルウテルも或る食卓談話で

麵麭のために進まねばならぬ程藝術が安價になつた

So wohlfeil ist die Kunst, dass sie schier muss nach Brod gehen. Dr. Martin Luther

(1566)

といふたそうだ・實際「美術學校」で教えてゐる樣な事で飯を食ふてゆかんとする・其の料簡が抑も間違つてゐる・園藝にせよ農藝にせよ乃至遊藝にせよ・苟も藝術と名のつくものは・天才的事件で教育的事件ではない・理髮とか裁縫とかいふ職業ならば教えて出來るが藝術なんてものは教えて出來るものでない・文豪エマアソンも

美術は模倣でなく・創作が其の目的である

といふた・古人の書いた繪畫や古人の作つた佛像などを手本として・それを眞似て書いたり作つたり・してゐては本當の美術家にはなれない・蓋し和歌や俳句の如きものでも模倣では駄目だ・從つて藝術には「二代續くものがない」と言はれてゐる・藝術の貴い處は此處にある・御祭禮の時・町內に建並べた角行燈の繪を見玉へ・綺麗に書いてはあるが・美術品とは言はれない・近頃の畫工の書く掛物などは角行燈の範疇を出で得ない蓋し獨り畫工ばかりぢやない・美術學校卒業者の作品は皆此の類である・生活のために作つたり書いたりするのであるから「氣品」といふものが完全に拔けてゐる・著者の知人に神木鷗津といふ畫伯(本郷駒込林町在)がある此の仁は富豪であるから麵麭のために筆を執る樣な畫家では

ない・從つて其の作品を文展などへ決して出されないのみならず潤筆料などを出すからと言へば尙更ら怒つて筆を執らぬ人である・畫斷と題した立派な畫論雜誌を時々出版して吾々にも贈與されるが・其の畫は昔しの雪舟の畫の如く垢拔けしたもので・氣品が格外に高尙なのである・上に揭げたものは・昭和十三年一月・戊寅歲繪葉書と題して贈與された其の一枚の繪葉書の複寫である・前段所論の「梅の枝の寒雀」の部を參照したら 畫意筆力風韻も能く理解することが出來るであらう

錦花翁隆志といふ人は寶曆初年に物故した人だといふが・此の人の句に「藝が身を・助くる程の・不仕合」といふのがあるそうだ・コック(料理人)でもチユウズ(厨子)でも技術を持てゐれば・其れで一生涯・生活してもゆかれ・看病の仕方を覺えただけで看護婦は

一生涯其れで生活してゆくことが出來る・藝が身を助けるとは・能く言ふたものだ・此の故に・疊職でも左官職でも乃至理髮職でも・手に何か一藝を持てゐるものは・食ひはぐれがない・小さい話しだが・裁縫だけで後家(未亡人)が三人の子供を育てて・立派な人にした例もある・藝の有がたい事は・確實だが・藝で飯を食ふ樣な藝は職藝と稱するもので・左樣な藝人は世人に媚び諂へ・そして世人の嗜好に投じなければ・食ふてゆかれぬことになる・そこで其の藝は自然に俗化せざるを得ぬのである・古人の句に「藝が身を助けぬ籠の・鶉かな」といふのがある・藝があるために鶉は籠に入れられて・自由を失ふのである・今時の畫工は大概籠の中の鶉の類である・藝で衣食してゐるから・遂に自由を失ふて束縛されるのである・こんな人間には「天馬奔空」の活躍は見られるものでない・昔し備後の菅・茶山(クワン・サザン)賴山陽を福山侯に薦めんと思ひ・山陽に書を寄せしとき山陽は其れに對し

御厚意は有難いが・俸祿を受けて大名などに仕へるのは言はば自由を束縛することであり奴隷になることだから御免蒙むる・僕は衣食に窮してはゐるが・岩の上の松の樣なもので天から滋養分を受けてゐるから枯れる氣づかいはない・であるから御厚意だけ感謝しておく

といふ樣な意味の返書を書いて送つたのである・なんと氣高い見識ではないか・斯樣な見識で活動されたから・偉人の列に這入られたのであり・其の文藝品が殘らず權威のあるものとなつたのである・要する所・藝で衣食する樣な文士の作品なんか・其の生命は蜉蝣以下である

獨逸文學書の中に

役に立つ藝術は麵麭と恩惠とを與へる

Nützbare Kunst/Giebt Brod und Gunst.

といふ文句が見えてゐたが・本當の意味は判らん・字面通りで言へば「手に職のあるものは・衣食に困らぬ」といふことであらう・是れは「人並」の談義で平々凡々・妻子を順當に養ふ人々の身の上の話しである・山陽先生の樣な偉人の身の上には當嵌まらぬことである・平々凡々で暮すつもりならば吾輩何ぞ喋々藝術論を說んやである・今時の人々は一も生活二も生活・明けても暮れても生活問題で持ちきつてゐる・のみならず政府までが生活の安定を目指して色々な施設を工夫してゐるのである・昨今・山陽先生の樣な傑物の出現せぬのも無理はない

又獨逸文學書の中に

藝術は老人の食料である

Kunst ist des Alters Zehrpfennig.

といふ文句が見えてゐる・是れも本當の意味は判らんが多分・著者の親父が和歌を作つて老後に其の和歌を得意に來客に吹聽してゐた・其の樣な・つまらん作歌仕事のことを評したものであらう・然らざれば退官した高官の謠ひお稽古の如きものを評した文句であらう・蓋し眞の偉人は・こんな呑氣な光陰は

送つてゐられるものでない・血を吐て死んだ山陽先生の如く・息を引取るまで其の藝術に精力を打込まなくては駄目なのである

さはさりながら藝で妻子を養ふ場合には・一藝に身を入れなくては駄目だ・例へば碁も打ち將棋も指しそして謠ひも謠ひ・日曜には魚釣りにも出かける・といふが如く・色々な事に手を出してはいけない・獨逸の俚諺に

一藝の技師は女房と七人の子供とを養ふが・七つにも餘る諸藝の技師は自分自身をも養ひかねる

Der Meister einer Kunst nährt Weib und sieben Kinder; ein Meister aller sieben Künste nährt sich selber nicht.

といふのがある・どこの國の人間でも・あれやこれやと・色々な事に手を出しては・結局徒勞に終るのである・是れは藝術の上の話しばかりではない・商賣の道でも工業の道でも・なんでも色々と・あちらこちらに手を出したら・其の一つでもが・成就せぬのである・藥劑師で齒科醫に轉じたものや藥學士で法學士になつたもので立派な成績を擧げたものは一人もない・矢張り餅屋は餅屋で進み酒屋は酒屋で進まなくてはいけないのだ

〔ご〕極樂と獄屋の話

音樂の樂は音が五角の切でガクなれど喜樂の樂は音が盧各の切でラクなり孝經に

移風移俗・無善于樂(風を移し俗を移すは樂より善きはなし)

とかいてある・其の樂は音樂の樂であり・易の繫辭に

樂天知命(天を樂み命を知る)

とかいてあり孟子に

與民同樂(民と樂みを同ふする)

とかいてある・其の樂は喜樂の樂で喜び好む意味である・蓋し喜悅の絕頂が極樂で其の極端が天國であり・憂鬱の絕頂が獄屋で其の極端が地獄である・故に此の婆娑世界は地獄と極樂との中間なりと考ふべきであり・從つて娑婆には苦もあれば樂もありそして苦樂半々ぐらいで浮世を渡れば上等の生活といふべきである・所で苦の原因は惡であり樂の原因は善であるから・此の娑婆世界には善人もあれば惡人もある・其の惡人を善人に振向ける事業が勸善懲惡であり教誨であり教育である・教誨の一手段として設定された哲學が宗教で地獄極樂の談義は其の宗教の道具なのである

文學士の前田慧雲氏が日本百科大辭典に執筆した極樂の解說に曰く極樂淨土は阿彌陀如來の果報で娑

婆世界より西方十萬億の佛土を過ぎた所に在り梵語にて須摩提(シュマダイ) Sukhāvati (スクハーヴチー) といひ妙樂(極樂)と譯す又安樂・安養・蓮華藏世界・無量光明土・無量清淨土等ともいふ・阿彌陀經(全文の旨意は恩田重信著既成宗教撲滅論中に在り就て見るべし)に

その時・佛(ホトケ)長老舍利弗(シャリホツ)に告げ玉はく是れより西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり名づけて極樂といふ・其の土に佛あり阿彌陀(詳しくいへば阿彌陀由須・アミターユス・Amitayus・または阿彌陀婆・アミタープハ・Amitābha)と號す今・現在說法す・舍利弗(佛の十大弟子の一人・シャーリプトラ・Sāriputra)彼の土・何の故に名づけて極樂といふや・其の國の衆生には哀苦あるなく但だ諸樂を享受するのみなり・故に極樂と名づく

と見えたり・按ずるに天親菩薩(別名世親菩薩・梵には婆藪盤豆ヴスヴンドフ Vasuvandhu・北天竺健陀羅國・ガンドハラ Gandhara 卽ち西印度・パンジャブ國 Panjab の北部にありし佛敎の中心地の人・往生淨土論・俱舍論・辨中邊論・唯識論等々の著者)の淨土論に・極樂を勝過三界道と云へり・これに由りて觀れば十萬億土の西に在りと云へるは蓋し凡夫迷妄境界に超絕したる佛陀所證の境界あることを示したるものなるべし(以上前田文學士の解說)云云

これによれば極樂淨土なんてものは人の心の中には在れど・世間には存在せぬことが明かである・死んで極樂へ往くなんて・馬鹿氣た考へは今尙愚夫愚婦や老人老婆の頭の中に往々存在してゐる樣だが斯個な考へは除却する樣に努めねばならぬ・然し「死んで空々寂々となる」といふ樣な考いは不合理な考いであるから・こんな斷見外道的な考へも亦除却する樣に努めねばならぬ(義理人情の話の條下を參照して靈魂の不滅と轉生輪廻の模樣を考察すべし)

本書の筆者が曾て眞宗の碩學・廣島國泰寺の老和尙藤井玄珠師から敎へて・頂いた地獄極樂の談義は・眞に適切な談義であるから・本編に既に說いたことだが・重ねて今一度左に話して聽かせませう

筆者問ふて曰く・地獄極樂・本當に有りや否や

老師答て曰く・有る

筆者問ふて曰く・どこに有りや

老師答て曰く・そこに有る

筆者問ふて曰く・そことは・どこなりや

老師答て曰く・そこの泉水(池)だ

筆者問ふて曰く・泉水の中に地獄と極樂とが有るのか

老師答へて曰く・そうだ

筆者問ふて曰く・いかにしてか

老師答て曰く・鷄(ニハトリ)が這入れば地獄で・鶩(アヒル)が這入れば極樂ぢやないか

此の問答で筆者は始めて地獄極樂の意味を悟り・そして眞の悟道に這入つたから・篤く篤く拜謝して退下したのである

抑も苦の全く無いのが極樂であるが・此の苦といふものが・然らば・如何にして生起するかといふに・それは生れて此の世に出て來たから・因果の應報で餘義なき次第といへば・言ふものの・去ればとて頸を縊つて・死んで仕舞ふたのでは一も二も無いことになる・のみならず・靈魂不滅の理窟から見れば・一度死んでも又々・此の世に生れて來ることになるのである・今日・日本でも一分間に六十三人づつ・人間が生れてゐる・此の人間は種(タネ)なくて出來たものぢやない・幾年前かは判らぬが・兎に角前世に此の世にゐた人の靈魂が緣あつて父の生殖器より母の生殖器に移り・そこで肉體を構成し・十箇月の後・此の世に出て來たものに相違ない・既に肉體を造つて出て來た以上は・火氣や風氣や土氣や水氣の刺戟を受けざるを得ぬのである・のみならず・甘きものが口に入れば再びこれを得んと欲し・美麗な色彩が目に入れば再びこれを見んと欲す・是れが見聞知覺の欲で・人間・生ある間此の欲・除くべからず・而し此の欲・滿足すれば喜び・滿足せざれば憂ひ且つ苦しむ・苦の人間から離れざるは是れがためである・佛敎學者は此の憂苦を一口に煩惱(ボンナウ)と稱してゐるが・區別すれば根本的のものと隨伴的のものとの二つになるが詳細のことは除夜の鐘の數程あつて話がむつかしくなるから省筆する蓋し此の煩惱の惑ひが身口意(是をシンクイと讀むのが坊さん等の常識である)の上に作用して・或は毆打もし或は惡言も吐き或は嫉妬の念や憤怨の情をも持つ樣になつて・相ひ互に苦境に沈淪するのである・まことに氣の毒ではあるが・他人が其の苦を代理してやるわけにはならぬのである・自分が此の世に自分で生れて來て・自分で苦しむのであるから・結局は自業自得と言ふべきである

然らば娑婆の苦は・自業自得でどうしても除き去ることは出來ないものであるかといふに・それは必ずしも除き去ることの出來ないものではない・お釋迦樣の御說敎は「拔苦與樂」で・衆生の苦るしみを御覽になり・氣の毒ぢやと思し召されて・其の苦を除き去る法をお說きなされたのである・但し其の法方は人間の病氣によりて治療法や藥方の異なる如く・種々雜多で一口には八萬四千あると言はれてゐるが・要約すれば「無我」である・言ひかゆれば漢法醫學の書物(例へば恩田重信の著述・漢法醫藥全書三頁)に

虛無恬澹・精神內守・百病不生

とかいてある如く・心の垢を洗ひ流して・全く純白にし・金剛經にかいてある通り

應無所住・而生其心

(オームショヂユー・ニショーゴシン)

の境地に悟入するより・他に名案は無いのである・是れを禪學の坊さんは

諸佛は一切萬境に對して心を生ずと雖も・萬境に執著することなく・淸淨心を以て之れに對す

とかいて說明してゐる・卽ち執著といふものを除き去れば「無我」の境地に住することが出來て・同時に

其の人の心に極樂の相が現出し來るのである・鳥の啼くのを聞いても天樂(テンガク)の如く聽え・雀の羽の色を見ても雪舟や探幽の繪の如く見ゆるのである・のみならず鳥囀讒謗を浴せかけられても遠寺の晩鐘の如く聞ゆるのである・蓋し此の如き心境に住するには・自分といふことを忘れ・そして食ふことでも・飲むことでも・往くことでも・歸ることでも・行住坐臥・すべて人の爲めの仕事と心得て・感謝しつつ働くより外に名案はないのである・西洋の金言に

Arbeit ist Gebet.

作事は祈禱である

といふのがある・儲けるためや・月給取るために働くのでは神に捧げる祈禱にはならん・欲の爲めの仕事だと言はれても一言はない筈だ・欲を離れ報恩行と心得て働けば・どんなに苦勞な事でも・苦を感ぜず作(ナ)すことが出來る・卽ち苦の無い世界が展開し來るのである・卽ち我が身は極樂の人となるのである

西洋にも極樂といふ樣な處が言ひ傳へられてある・其の極樂淨土はパラダイスと呼ばれてゐる・ペルシヤ語の公園 Park といふ意味の文字 pardesから誘導された文字だといふ・西洋の歷史で人間の始祖アダムとイブとの夫婦が住んでゐたエデンの花園といふ處がパラダイスと言はれてゐるが其の場處はどこだか明瞭してゐない高天原の樣なものかも知れん・F Deltzsch といふ人は「パラダイスはどこにあるか」と題した本を千八百八十一年にライプチヒ市で刊行したといふことであるが其の本でも實は餘り判然としては居らぬらしい・が然し西洋人の大部分は愚夫愚婦と見へて・聖書の教訓を守らず勝手な事を勝手に爲せば・死んで後地獄に行くが極樂のパラダイスへはゆかれないと信じてゐるらしい

獨逸に Johann Scheffer といふ人があつた・アンゲルス・ジレリウスといふ名で有名である一六二四年ブレスラウで生れ一六七七年同地で永眠した人で神秘を信仰してゐた人で宗教的の詩人であつたのである・此の神秘信者も亦・心さへ清淨にし純潔にすれば・そこに直ちに極樂が示現すると信じてゐたらしい・彼れジレリウスは

汝・パラダイスを搜し・そして其處に到らんことを希求すべし・そこでは汝はすべての惱みと不安とから・離れるだらう・汝は汝の心を滿足させ・そして純白ならしむれば・パラダイスは汝と共に其處にある(原文省略)

といふたのである・又獨逸のフリイドリヒ・ボーデンステットといふ詩人は

唯一のパラダイスはない・然しパラダイスは澤山ある

と言ふたが・是れは西方十萬億の佛土の其の又先きの唯一のパラダイスといふものは無いが人々の心の中にパラダイスは存するから・造れば幾らも出來るといふ意味である・一休和尙が

極樂は・ミナミ(皆身)にあるを・皆人が

西へ西へと・往くぞおかしき

と歌ふた・其の歌と同じ意味であらう・それから又此の詩人ボーデンステット Friedrich von Bodenstedt は

Das Paradies der Erde/Liegt auf dem Rücken der Pferde,/In den Gesundheit des Leibes/
Und am Herzen des Weibes.

地上のパラダイスは馬の脊の上に在り・健全な肉體の中にあり・そしてワイフの心の中に在りとも歌ふたのである・流行的服裝に身を堅め・怜悧にして我が意を理解した調子の善い馬に乘り無風青天の白日下に遠乘でも爲(シ)て見玉へ・エデンのパラダイスも是れに勝るまいと思ふであらう・之れに反し・病氣に罹り・入院して高熱に苦しめられつつ・入院料の催促でも受けて見玉へ地獄の底も斯の如くであらうと思ふだらう・蓋し欲を離れた心の平安が最上のパラダイスなるべし

地獄の相は俱舍論に詳しく記述されてあり・又西洋人の所謂る地獄なるものの相は日本百科大辭典に文學博士の姉崎正治といふ人が詳細に記述しておかれたから茲に重ねて述ぶることはやめるが我々の最も嫌忌する所の地獄は獄屋に過きたものは無かるべし獄屋といふものは惡人を入れる所で玉篇によれば禹王湯王の頃から設けられたもので殷では羑里といひ周では囹圄といひ又牢(牢屋)ともいはれ・說文によれば二疋の番犬がゐて監守する處であるから「獄」の字を用ゐて獄屋と呼ぶことになつたといふことである・そして其の獄屋に入れられた人は四角な箱の中に入れられて外出が出來ぬから左樣な人を囚(シウ)といひ・其の囚人にさせる仕事を囚役と稱するのである・全く自由を束縛されるから樊籠中の鳥の如きものである・苦痛・之れに過ぎたるは無かるべし・其の刑の重きものは獄中にゐて更に手枷(テカセ)足枷(アシカセ)乃至頸枷(クビカセ)の如き鎖(クサリ)つきの刑具で手足や頸の自由までも束縛されるのである・そして更に處刑の强き場合には笞杖で打擲(チャウチャク)されて肉の裂けることにもなるのである斯樣な事を拷問(コウモン)(ガウモン)といふ其の苦痛はとても忍び難いのである・明治五年監獄則といふものが發布されるまでは此の記述の如くであつたが・其の獄則が出て以來・牢屋の取締りも著しく改良されて今日では・獄內の生活は貧民窟の生活よりも遙に遙に上等で或は娑婆で衣食に窮するよりも囚人となつて暮すのが寧ろ幸福だと言ひ傳へる人さいも有る樣になつた・監獄の事は法律大辭典に詳細に記述されてあるから其れに就て檢討するがよからう・それにしても監獄に送らるる人は必ず何か惡事を働いたか・或は其の嫌疑のある人であるから・假令出獄しても其の人は決して極樂往生は出來ぬから・そんないやな處へ近寄らぬ樣に心掛けねばならぬ・聖人孔子は「君子は危きに近よらず」と仰せられ・昔の賢人は

瓜田不納履・李下不整冠(古行・君子行)

とまで言ふて警戒を與へてくれたのである

〔さ〕 懺悔と後悔の話

自分は七十八歳の今日まで・後悔する樣なことも懺悔する樣な事も・爲し得なかつた・卽ち邪淫したこともなく・泥棒したこともなく・兩舌を使つたこともないが・唯一つ毎日毎夜・後悔してゐることがある・それは自分の叔父に對し・醉つた際「此のお叔父は馬鹿です」と放言したことである・叔父は「馬鹿野郎!! 出放題なことをぬかし居るな」と腹で思つてゐたであらう・立腹もせず笑つてゐたのである・醉が醒めて後・脊中から冷汗を流して・日露戰爭に出かけたが・其の叔父は・出征中に歿して・彼(ア)の世の人となつたので・失言を謝する機會を失つたので・其れが氣になり唯今に後悔してゐるが・是れ以外に耻づる言行は一つもない・從つて懺悔することも一つも無いのである・明治十八年軍籍に身を投じて以來・同僚は急忙的(ズンズン)昇進するのに自分は少尉を八年間も勤めて不面目を呈したが・其れも一向に氣にかけなくて・或る時は鎭臺所在地から片田舍の聯隊所在地に轉任し或る時は菅原の道眞公が京都より筑紫の配所に降られたように殘酷にも・奥羽の片端から四國の山の中へ赴任したのであるが然し其れが官費觀光旅行の樣な氣持で苦にもせず・東坡先生が牛に乘つて今の開封から海南島へ赴任された樣な氣持で旅行したのであるから・少しも不滿な心持が生じなかつたのみならず・或る時は上官に官等を下げて頂くべく出願もしたのである・所で上官が「其れも良いが・如何なる理由で・そんなことを言ふのか」と尋ねられたから自分は「一級でも下だと・それだけ責任が輕くなつて心配が少くなりますから」と申し上げたら上官が「馬鹿言ふな・成りたけ重い責任を脊負ひ込む樣に勤めなくてはいけない」と忠告して下された程の欲氣のない人間であるため・四十五十になつた頃・親戚のものや朋友などで本當に困つて賴みに來た場合・若し遊金が有れば・借用證書と一緒に金錢を持せてやり・吳れたものと諦(アキラ)めて仕舞ふ故・そんな事に就ても・後(アト)で馬鹿を見たなんて愚痴を零(コボ)したことが無い・故に自分には後悔することもなく又懺悔することもないのである從つて懺悔と後悔の此の一篇は自己の實驗でなくて・古書から拾ひ集めた机上の空論なのである・西洋人の所謂る机上哲學Tafelphilosophie の類かも知れん・其のつもりで讀んで見玉へ

漢字の字引に依ると・罪過を除くの意思が懺(ザン)で己の不善を知つて而して自ら恨むのが悔(ゲ・クワイ)である・佛敎の書物に依れば懺悔は五悔の一つであり・そして懺は梵語 Ksama 懺摩の略である故に懺悔は梵語懺摩と漢字の悔改とを寄せ集めた文字で過(アヤマチ)を改めることである・蓋し過(アヤマチ)を改めることは誠に善いことで聖人孔子も「過を改むるに憚ること勿れ」と仰せられた程である。「改過」は本當に善いことであるが・それが又仲々むづかしい事なのである・昔しの小學讀本に「酒と煙草は養生に害あり」とかいてあり・明治八年頃自分も個樣な讀本で敎へられたのであるが・成人して後・其の文句は寸時も腦味噌から離れないにも拘はらず・煙草は「お先き煙草」ぐらいで・多くは用ゐ

なかつたが・酒は隨分澤山飲んで或る時は本郷の牛肉店「いちかつ」の梯子段の中程からころび落ちた事もあり或る時は日本橋白木屋の横町で醉臥し・面識の無い大學生に本郷の春木町の下宿屋まで運搬されたこともあり又或る時は馬に乘りお城の蓮堀の緣(ヘリ)を逍遙する際・居睡りして堀の中へころげ込んだこともある・然し手綱だけは持てゐたのであるから馬がたまげて・自分の土手の上へ登るのを見てゐたが・どうも酒だけは止(ヤ)められなかつた・今から考へれば是れも一つの後悔かも知れんが・然し自分は飲酒醉倒を惡事とは思つてゐなかつたから・只今に後悔する料簡にはなれない・否・こんな・だらしの無い事を爲(シ)なかつたら或は少將や中將位まで進んだだらう・と思ひめぐらして見れば・殘念の樣にも思はれるが・天性を遺憾なく發揮したと考へる時には寧ろ愉快の感じが起り來るのである

西洋の俚諺に

Reu' und Rath/Nach der That,/Kommt zu spät.

事を爲した後の後悔や相談は・餘りおそすぎる

といふのがあり又

Reue ist ein Verstand, der zu spät kommt.

後悔は悟道は悟道だが・遲過ぎた悟道である

といふのがある・自分の樣に醉倒を惡事と思はぬものには後悔したとしても晩いこともなければ早いこともない

此の故に惡事と思はぬ樣な事に就ては後悔だの懺悔だのといふことは有り得べからざることであると斷言し得るのである・然るに近頃では轉向といふことが流行してゐる・卽ち「今まで善いと思ひ込んでゐたことを惡るかつた」と思ひかへすことが轉向といふのである・言ひかゆれば・謝罪することである・

西洋の俚諺に

今後にせぬのが最良の謝罪である

Nicht mehr thun ist die beste Abbitte.

といふのがある・學生が巫山戲(フザケ)てガラス窓のガラスを叩き破(コワ)して・生徒監に叱責された時只「スミマセンデシタ」と言ふて頭を下げたのでは本當の謝罪ではない・其れ以後・絕對に同じ事を繰かへさぬのが本當の謝罪であり・そして巫山戲た事が惡事と知れば・そこに必ず懺悔と後悔との感情が起り來る筈であり・そして若しも最初から巫山戲ることが惡事であると知つてゐれば・其の學生は決して巫山戲はせぬ筈である・卽ち學生の巫山戲てガラスを破(コハ)したのは最初から巫山戲ることの惡事たることを知らなかつたためである・此の故に人たるものは一擧手一投足でも乃至一言一句でも確信の上で實行せんければならぬ・そして確信して實行した以上は其の行爲言動に對し如何なる苦痛を受け・如何なる處分を受くるとも決して屈服する樣な振まひは有るべからざるものとす・例へばガ

リレイが毒杯を飲み文天祥が毅然として斷頭場に登つた樣な態度で進まなくては嘘だ・卽ち正しき事と確信した事柄ならば縱ひ囹圄の人となるとも決して轉向など爲(シ)てはいけない・然も其の轉向するのは・其の最初の決意に不純な所があり・不正な所があつたからである・此の故に輕々に決意してはいけない・後悔だの懺悔だの・といふことは其れ以前の意志に不純なところ及び不正なところが在つた結果に外ならぬのである・此の故に人は道理を能く能く汲分けて・然る後・其れを言動に表示せんければならぬ・若し疑はしきものあらば廣く天下の善知識に就て開導を乞ふべきである・一部の人の言を聞き一部の書籍の記錄を讀んで直ちに其れに心醉してはいけない・言ひかゆれば熟慮が必要であり斷行といふことが必要なのである・卽ち熟慮斷行の人には懺悔も後悔も在り得ないのである

アイスレル氏哲學辭典 Eisler's Handwörterbuch der Philosophie と題した本がある・此の辭典には懺悔又は後悔 Reue (μετάνοια, poenitentia) といふものは・過去の過(アヤマチ)や不善なことに對する不愉快な感情と不安な感情との混合したものである云云とかいてあり・ショウペンハワアの說によれば懺悔や後悔は意志の變動から起るものでなくて知識の變動から起るものである・といふことであり又トリエント Trient に開催された宗務長老會議 Tridentinum (XIX) の定義に依れば懺悔及後悔は精神の痛苦であり且つ過去に於て爲したる罪惡を再び繰りかへさぬ樣に決意しての罪惡の嫌忌であるといふことである・いづれにしても前非を後悔することは・其の人が元來愚物で事物の道理に明瞭に通曉して居らなかつた結果といふべきである・支那の兵士は其の死刑に處せらるる時に當つてや・いづれもみじめな態度で多くは「アイヤア」なる悲痛の聲を發するといふことである・戰爭に出かける以上は・死のあることは當然である・蓋し此の當然な理窟を知らずして・敵に向ふ・其れが知識の錯誤なのである・人は道理に從つて言動せんければならぬものである・道理の正しきに從つて言動する以上は・千萬人といへども吾れゆかん・の勇氣を以て進まんければならぬ・事の成敗は喜ぶにも當らず又悲むにも及ばぬことである・生・來るも喜ばず・死・來るも悲しまず・儼乎として獨立し而して決して後悔などすべきものでない

スピノザの說によれば後悔は道德でもなければ又理性から發するものでもない・肉慾の不滿と精神の不安との二重の苦痛を受くることである・といふことである

あんな女に手を出さなかつたら・よかつたのに

と後悔する・是れが肉慾より由來せる後悔である・そして

あんな學說に惚れ込んだのが惡るかつた

と後悔する・是れが精神より由來せる後悔である

シュルツェ G. E. Schulze の說によれば(一)目的不相應な行爲や(二)目的に有害な行爲のために自身に受けたる不安心が後悔であるといふことである

（一）此の方法なら目的を達成し得ると思つて爲(シ)た行爲が目的達成を見なかつたり或は
（二）此の方法で行けば目的を達し得ると思つて爲(シ)た行爲が目的に達せず・却て其の行爲が
目的達成の障害となつた

左樣な場合には普通の俗人は皆後悔したり懺悔したり・するのであるが偉人には此の如き醜態は見られない

此の故に人間は後悔する樣な言動は決して爲すべからざるものである・言ひかゆれば輕舉妄動は後悔の原因となるものであるから・輕舉妄動は謹慎せんければならぬ・と同時に・一旦言動した以上は死すとも悔い改むる樣な醜態を演じてはいけない・龍の口で殺されんとしても悔い改めず佐渡ヶ島に流されても悔い改めず毅然として其の初志を固守する・是れが眞の英雄なのである「後悔・先に立たず・提灯持後(アト)に立たず」などと愚圖るのは婦女子の身の上の事である

懺悔には五逆十惡も消滅する

なんて・都合の良い御說敎に瞞着されぬ樣に心掛け・言動行爲に深重な注意を拂ひ・決して後悔や懺悔をせぬ樣に心掛けねば嘘だ・然も若しも

嗚呼・やりそくなつた

と思ふ樣な場合に遭遇したら・總べて是れ因緣生なりと諦(アキラ)めて其の境地に安全端坐し・そして「動かざること山の如し」の姿勢で時勢の變化を靜觀して居らねばならぬ・そして

嗚呼・天にまします吾等の父よ・助け給へ・導き給へ

などと・めめしきことを言ふてはならぬ・西洋の俚諺に

Reu/Des Herzens Arznei.

後悔は心の藥である

といふのがあり又

Reu' ist ein' bittre Arznei.

後悔は苦き藥である

といふのがあるが・こんな藥は死んでも呑んではいけない・所で西洋人には愚夫愚婦が多いと見え・色々な學者や宗敎家が懺悔や悔い改める事を大變に善い事の樣に宣傳してゐる・一例を言へば・アンゼルムスは曾て

懺悔に由て除かれない樣な重罪は一つもない

Keine Sünde ist so schwer, dass sie nicht durch Reue getilget werden könnte. Anselmus (um 1033–1100) Uebersetzt v. Gran.)

といふたのである・申しわけありません・赦して下さいと懺悔してそれで其の惡事が消ゆるなら・誠に

心・安い次第であるではないか

〔じ〕慈悲と忍辱の話

左傳には「父は慈に子は孝に」とかいてあり大日經といふ御經の中には「佛心とは大慈悲これなり」とかいてあり・大學には「慈は衆を使ふ所以なり」とかいてあり・それから智度論といふ佛教の大部な經論中には

衆生に樂を與ふるを慈といひ
衆生の苦を拔くを悲といふ

とかいてある・卽ち「拔苦與樂」は政治の根本原理であり・一切の教化施設の最高理想であらねばならぬ

雀や烏(カラス)の其の仔を愛育する有樣を見玉へ・雌雄の親が互に提携して・其の仔に飼を與ふる樣子を見れば其の慈愛の如何に親切なるかが知り得らるるのである・吾々は馬鹿であつたがため・父母の鞠育の恩を久しく知り覺えざりしが・段々成人して・子供を儲けたとき・始めて目の醒めたのに氣づいたので・申し譯ない樣に感じ古人が

子を持て知れ親の恩

といふた言葉を見て心底から感銘したのであるが・父母去つて今や已に三四十年今日身は已に七十八歳・誠に申し譯なく思ふてゐるのである

抑も此の世は・生存競爭・殺伐不安から滿されてゐるが・此の不安を取り除く樣にする・其れが一面は政治であり一面は利用厚生である・所で政治法律も利用厚生も・其の根本は慈悲に基礎を置かねばならぬのである・如何なる政治を行ふても其の基礎に慈悲が存在してゐなかつたら・其の政治は決して永續するものでない・是れと同じく一家庭の內といへども慈悲のない父母が有つたら其の家は決して平安に永續するものでない・のみならず多數の從業員を包擁する商店でも會社でも乃至製造場でも若し其の店主や社長にして・慈悲の心を缺いてゐたらば其の商店乃至會社は決して永續するものでない・言ひかゆれば人類社會は徹頭徹尾・慈悲に由て成立するものと言ふべきである・蓋し孔子の仁も・キリストの愛も・釋尊の拔苦與樂・皆同じものであつて「イックシミ・アハレムの心」から出たものである

初雪や・彼れも人の子・樽ひろい

といふ有名な俳句がある・芭蕉の作か・其角の作か乃至嵐雪の作かは知らぬが・とにかく此の俳句の中には無限な慈愛心が潛在してゐるのである・酒屋の小僧が・雪の朝・得意先のお屋敷へ酒の空樽を集めに廻りゆく・それを見て・氣の毒に思ふての一句が・此の句である・吟誦して見玉へ・可愛想だといふ人情が能く見ゆるではないか・蓋し同情心といふものは・詩人ハイネの言ふた通り・愛と同じ程の美しい人情で此の情操が無ければ其の人は人ではない・犬や猫の互の間には同情といふものが現はれてゐな

い・親が老ひて衰弱してゐても・兄弟が病んで寢てゐても・其れに對し決して決して同情せぬのである・故に曰く同情なきものは人にあらずと・蓋し父母の其の子に對する同情心といふものは實に深厚なもので子供の艱難苦勞に對しては五體を八つ裂に裂いても取つて以て代らんとする程に深厚なのである子たるものは此の親の慈悲心・慈愛心・同情心の如何に有がたいものであるかを・何を置いても先づ第一に知悉せんければならぬのである・蓋し親の慈悲心を能く理解せずして社會に飛び出たものは決して決して成功は收め得られないものである

或人は曰く西洋人は個人主義で父母の慈悲とか恩愛なんてものに餘り重きを置いてゐないにも拘はらず成功する人の多くあるのは如何に說明するか云云・其れは一應尤もの樣だが實は立派な理窟が存してゐるのである・西洋人の頭の中には神(ゴット)といふものが先天的に潛在してゐるのである・彼等は天地萬物・すべてが・ゴットの作品で父母を作つたのもゴットであり我々兄弟姉妹を作つたのもゴットであるから「我れ人」共にゴットに對しては完全に服從し我々の肉身ばかりでなく・我々の運不運・幸不幸などまでが・すべてゴットの意圖に因るものであるから・どこまでも神慮を尊重し神慮に背反せぬ樣にせんければならぬ・と・斯樣な思想を抱いて仕事に從事してゐる・此の心持を西洋の言葉ではピイテエト Pietät といひ・敬神と譯してあるが筆者の著書「他國辭書大全」に於ては孝順と譯されてゐる・西洋人は總て此の孝順の心持で活動してゐるから・つまり「作つてくれたゴットのために働く」といふことになつてゐるのである・所で實際に我々を鞠育して下された人は父母であるから・我々は報恩事行と心得・骨身(ホネミ)を碎いて父母の慈愛に報ゆべく努力せんければならぬ・斯樣な心持を東洋では「孝行」といふのである・西洋の孝順に似た心持なれど・孝順は理想的觀念であり孝行は現實的觀念である・人の子たるものは・是非とも孝行を實踐躬行せんければならぬ・と同時に此の際・人たるものは自己の肉慾や精神慾のために・孝行を無視したり蹂躙したり・せぬ樣に心掛けねばならぬ

東坡先生の言葉に

孝は妻子より衰ふ

といふのがある・女房を貰ふまでは朝夕父母の側にゐて父母の意を迎へて働らき・たまたま・家を離れて遠き他縣の中學校や高等學校などに學ぶに於ても・女房を持たぬ間は・少くも夏・冬・の休みには家にかへりて父母の意を迎へ勤め勵むのであるが・專門學校を卒業し或は實業大學を卒業し・就職の途(ミチ)に有り就き・俸給を受ける樣になるや・其の幾分を郵送して惠を父母に頒ち父母を喜ばせることもあるが・二三箇月乃至一年を經過し或る人の世話で女房を迎ひ納(イル)るや家庭の入費が增加したりとはいへ・忽ち父母に對する孝養の心が減衰するに至るは・普通一般の事情である・のみならず子供でも儲ける樣になれば親を思ふ心は增々減衰するのである・此の事態を指して東坡先生は「孝は妻子より衰ふ」と仰せられたのであるが・實は女房や子供の慈愛肉慾に牽引せられて・父母に對する引力(愛力)

が減弱したのである・力學 Dynamik 的に論ずれば無理も無いことだが・そこが物質的と精神的との異なる所なのである・女房や子供の愛力に支配されて・大切な親を疎略にする・斯樣な生活を物質的生活といふのであり・そして精神力を以て肉慾を制裁し尙益々努力して老ひ往く兩親に對し・報恩行に勤むる・斯樣な生活を精神的生活といふのである・人たるものは犬や猫の如く物質的生活で終つてはいけない・精神的生活で活動する・そこに美しい文明が現成するのである・勤めよや讀者諸君・至囑至囑

馬太傳第五章第七節には

Selig sind die Barmherzigen, denn sie werden Barmherzigkeit erlangen. Ev. Matth.

矜恤(アハレミ)あるものは福(サイハヒ)なり其の人は矜恤を得べければ也

とかいてある・人に惠(メグミ)を頒てば人又我に惠を頒つのである・孟子梁惠王下篇に

曾子曰戒之戒之出乎爾者反乎爾者也

(曾子曰く之に戒めよ之を戒めよ・爾(ナンヂ)より出づるものは爾にかへるものなり)

とかいてある・馬太傳にかいてあることと同じ意味である・人に施さずして自分一人施を受くるといふ理窟はない・近頃流行の言葉に「得んと欲せば與へよ」といふのがある・物理學の中にニウトンの運動の法則として「動あれば反動あり」といふのがかいてある「汝より出づるものは汝にかへるものなり」と同じ理窟である・自分一人で儲けようとしても・そうはゆかぬものだ・自分が父母に孝行せずして・子供にのみ孝行せよと敎へても・其の希望は達し得ぬのである・人に惠みを與へずして自分に惠みの來らんことを願ふとも・是れ亦叶ふものでない・要するに

慈悲の上で罪をつくれば其の人に無慈悲が報ひられる

Wer auf Barmherzigkeit sündigt, dem wird mit Unbarmherzigkeit gelohnt.

といふ格言に歸着するのである・卽ち無慈悲な政治を行へば其の政治家は又無慈悲な處置に置かれるのである

聖書哥林多前書十三章一節に

たとへ我・諸々の人の言葉及び天使の言葉を語るとも若し慈悲(愛)なくば鳴銅(ナルカネ)や響く鐃鈸の如し

といふ文句が見えてゐる・愛を以て語(カタ)りきかせなくては效能はないといふ意味である・筆者の此の訓示も或は響く鐃鈸たらんことを怕るるのである・讀む人・よく自ら研究して自覺し玉へ・聖クリソストムは

有らゆる神の訓(ヨシヘ)は慈善に歸す

と說いてゐる・文豪ラスキンは

慈善は正義の基礎の上に立つ殿堂である基礎のなき頂上は有り得ない

と說いてゐる・ヴエニスの商人にも

慈悲は神御自身の固有性であり・地上の權力も慈悲が正義に加味される時に神權に似つかふも

のぢや

とかいてあるそうだ・慈悲ばかりぢやない・何事でも正義に立脚しなくては成立つものでない・子供に對する慈悲でも・若しも育てて後・利用する心から出たものならば其の慈悲は無慈悲によりて報ひられるものなのである・報酬を求めずして行ふ慈悲でなくては・本當の慈悲にもならず又功德にもならぬのである

忍辱の忍はニンと讀み辱はジョクと讀むが・通音はニンニクである・はづかしめられても・立腹もせず・怒りもせず耐へ忍ふことである・聖書に

汝・右の頰を打たれたら・左の頰を又打たしめよ

といふ意味がかいてある・忍辱の心得を說かれたのであるが・佛敎では・この忍辱行を最も大切に說いてゐるのである・抑も佛者や僧侶の行ふべき行は・萬行といふて色々あるが其の重要なものは六波羅蜜と稱して其の數・六つある曰く

(一)布施 Dānapāramitā

(二)持戒 Sila Pāramitā

(三)忍辱 K'sānti Pāramitā

(四)精進 Virya Pāramitā

(五)禪定(靜慮) Dhyāna Pāramitā

(六)智慧 Prejña Pāramitā

(筆者は梵語に心得がないから責任をもたぬ)

卽ち佛敎を信じ・其の敎に從ひ・身を鍛へて・立派な佛に成るには此の六箇條の淨行を完全に實行せねばならぬといふのである

(一)は自分の所持品は精神的からも物質的からも・殘りなく施さねばならぬ・言ひかゆれば一切の私慾を拋擲せねばならぬのである・是れを布施といふ

(二)は佛の敎へられた戒法(制裁)を守り・女の肌に觸れず・酒を飲まず・人の物を盜まず・二枚舌を使はず・生物を殺さず等々の戒を守りて身心を淸淨にする・是れを持戒といふ

(三)は忍辱で他から罵詈讒謗されても立腹せず・迫害毆打などされても一切無抵抗に受け流すのである是れが忍辱である

(四)は其の修道に熱心に向ひ進むことで俗の勉强と同じ意味である・精進は精進料理の精進ではない

(五)心を他に振り向けぬことである・これが禪定である

(六)天地の道理を徹底的に研究して・どんなことでも・直ぐ洞見することの出來る樣にすることで・言はば智慧を磨くことである是れを知慧行といふのである

此の六行はいづれも大切であるが吾々の俗世間に於て最も必要なものは忍辱(ニンニク)であらう・支那の俗諺に

(一)辱(ハヅカシメ)を忍んで重きを負へば驕敵も必ず敗る」といふ俗に棒・振りといふことが是れである・敵の振る方向に振れば敵は遂に疲れて閉口するのである

(二)一時の(怒)氣を忍び得れば百日の災ひを免かれ得るといふ・一時の忿怒のため・其の身を誤ることが幾らもある

(三)忍之一字・衆妙之門・これは宋朝の呂・好問といふた立派な人の子で呂・本中・字は居仁・東萊・先生と呼ばれた人の坐右銘中の語である・全文は「忍之一字・衆妙之門・當官處事・尤是先務」である忍の一字は能く萬事を成功せしむるものである・といふ意味である・つまらぬ事に不平を起し・そして愚痴るものに成功した例(タメシ)はない・取りついたら・どこまでも辛抱し腹を立てたり不平を起してはいけないのである・佛者は吾々に「忍辱の鎧を着て世の中に進め」と常に敎へてゐる

〔ず〕隨機說法の話

日本には「人(ニン)を見て法を說け」といふ俚諺がある・此の俚諺がどうして獨逸に傳はつたか判らんが・とにかく此の俚諺が獨逸語に譯されて獨逸の書物に收載されてゐる曰く

Richte deine Predigt nach dem Zuhörer ein!

聽衆に從つて汝の說敎を矯正せよ

凡そ人に物(モノ)を言ふて聽かせるときには・先づ其の人の性格や氣分をよく呑込んで然る上で・話して聽かせなくちや・折角親切に話して聽かせることも・或は有效になることもあるが又全く無效に終つて

仲人は・あつたら口に・風をひき
アッタラ口に風ひかすな

といつた具合に・馬鹿を見ることとなる・こともある

といふ俚諺は此の間の消息を諷刺したものである・所で聽く人の性格や氣分を呑込むといふことは極めてむづかしいことで餘程な悧巧な人でなくては期待し難いことである・上官と言ひ爭つたり姑(シウトメ)と言ひ爭つたり乃至嫁と姑との間の具合の惡るくなる・なんてことは・上官の性格や氣分を呑込

まずに・意見を提出したり或は舅姑の性格や氣分を呑込まずに・ベラベラと多辯を弄するからである・言はば馬鹿だから・折角の親切も忠言も「ゼロ」に終らしめるのである

論語衞靈公篇にも

子曰・可與言・而不與之言失人・不可與言・而與之言失言・知者不失人・亦不失言

（子曰く與（トモ）に言ふべくして而して之れと言はざれば・人を失ふ・與（トモ）に言ふべからず而して之れと言へば・言を失ふ・知者は人を失はず亦言を失はず）

とかいてある・聖人孔子も「あつたら口に風をひく」ものは馬鹿だぞと仰せられたのである・要するに戯言や冗談も言ふべきときに言へば悧巧と言はれ・言ふべからざるときに言へば・馬鹿だと呼ばれ或は失言取消の要求を受けて面目を汚すに至ることもある

此の故に說敎を人に與へるときには・聽衆の種類・氣風等を能く察して其の聽衆の耳に「成る程・甘いこと」を言ふナ」といふ樣な感じを起させる樣に考慮せんければならぬ・隨機說法とは此の處の要領を敎へた格言なのである

所で人間の心持といふものは萬人が萬人・一つも同じなものはゐない・芝居は人を泣かせるものだが・共れを見て泣く人もあれば泣かぬ人もある・喜劇は人を笑はせるものだが・其れを見て笑ふ人もあれば笑はぬ人もある・之れを「人の特異性」Idiosynkrasie といふのである・獨逸語で說明すれば

Eigentümlichkeit gewisser Individuen, auf bestimmte, an und für sich geringfügige Reize ungewöhnlich (meist abnorm stark) zu reagieren.

となるが・要するに漆（ウルシ）に感（カブ）れるの類が共れである・アンチフエブリンといふ洋藥は熱氣（ネッケ）のある病人に一般に用ゐられるものだが・人によりては共れがため・急に皮膚に發疹を現はすのである・日本には無い樣だが獨逸あたりでは苺（イチゴ）Erdbeeren を食ふて蕁麻疹（カザフルシ）Urticaria を起すものがあるといふことである・此の人間の特異性といふものは・未だ曾て學者の說明に登つた事の無いもので・科學界の不思議の一つである・人間の特異性には色々ある・（一）針の先きの樣に尖（トガ）つたものを見て寒氣（サムケ）を感じ面の蒼（アヲ）くなるものがある（二）毛蟲を見て寒氣を感じ面の蒼くなるものがある（三）四五間離れた處に蛇の居るのを感知して面の蒼くなつて顫（フル）えるものがある（四）搜がして見ても見えぬ樣な處の・樹の葉の蔭（カゲ）にゐる小さな靑蛙（アマガエル）のゐるのを感知し・面を蒼くして逃げ返るものもある（五）德川家康公も蛙（カヘル）が嫌ひで蛙のゐる處へは近寄らなかつたので大久保彥左衞門は家康公の鎧の手甲の上に「靑蛙」を刺繡せしめ・以て公の特異性を矯正したといふ（これは人の話であるから保證しない）

こんな具合で人の性といふものは萬人同一とは言はれないのみならず孟子（滕文公上篇）にも

物之不齊・物之情也（物の齊しからざるは物の情なり）

とかいてある通り・萬有は同じ様に見えても細微な部分を比較研究して見れば・必ず違ふてゐるのである・自分の知つてゐる植物の大家が或る時・路傍の田の中へ入り込み・そこに植ゑてあつた慈姑（クワキ）を二十個程・引拔き・そして其の根の數と長さとを比較して見てゐられたから・先生!!　結果はどうです・と問ひ尋ねたら其の先生

面白い・根の數も大概不同であり・そして其の根の數の同じなものでも其の根の長さが殘らず同じだといふものは一つもない・要するに完全に同じだといふ慈姑は一つも無いといふことが判つた

と答へられたが・是れは萬有・總て不同だといふ孟子の言を證明した一例であるが・去つて或る梅林に行き・其の梅の樹振りを檢討して見玉へ一本でも同じものは無いことを發見するだらう・人の心の同じからざるは其の面の如しと昔しから言はれてゐる通りである・馬なども騎兵隊に澤山ゐるが・騎士は同じ様な馬を能く鑑別してゐる・同じからざる所があるから鑑別も出來るのである

外見が全く同じ様に見えて性質の差（チガ）つてゐるものが世間に幾らもある・水素瓦斯と酸素瓦斯と窒素瓦斯とは瓶に入れて見たところ・少しも相異してゐない・然し其の性情は違つてゐる又洋藥に沃度加里といふものと臭素加里といふものとがある・肉眼で見ても蟲眼鏡で見ても・全く同じに見えて區別が出來ない・又鹽酸キニイネといふものと鹽酸シンコニイネといふものとがある・是れも肉眼や眼鏡で見たのでは全く同じに見えて區別が出來ない・所で其の道の分析法によれば立派に鑑別が出來る・是れ等も孟子の言をかりて「物の齊しからざるは物の情なり」と放言すれば何等の面倒もないが・同じ様に見えて其の性の相異する所以の說明に至つては今日までの學者・一人も明瞭に答へて居らん・それから又罵詈讒謗を或る時は或る人に加へ又或る時は或る他の人に加へて見玉へ・其の暴言に由て或る人は立腹するかも知れんが又或る人は馬耳東風に聞き流してゐるであらう同じ様な罵詈を加へて一つは立腹し一つは平然たりしといへば・其の反應の同じからざる理如何といふに・一は小膽で他は寬容であるからだと答へる人も有るだらうが・小膽と寬容との差異の生ずる理如何と問へば恐らくは答ふる人なかるべし然し吾輩は是れに對し肉身の素質に差異が有つたからだと答ゆるであらう

要するに人はいづれも人間で同じ様に見ゆるが・之れに談話を持掛けたときの反應 Reaction は上下左右濃淡種々様々で・一人でも完全に同じだといふものは無いと斷言し得るのである

茲に動物園があつて・其の内に牛も馬も山羊も羊も虎も狼も熊も象も居るとして・是れに牛肉か馬肉を投與して見玉へ虎や狼は喜んで食ふであらうが牛や馬は振り向いて見もせぬであらう・是れに反し青草の刈たてのものを投與して見玉へ馬や牛は喜んで食ふが虎や狼は振り向いて見もせぬであらう・言ひかゆれば動物の種類によりて好む食もあり好まぬ食もあるといふことになるのである

衆人を集めたる演說會場で萬人向きの演說をなすといふことは頗る困難である・のみならず・一人一人

に面談するときでも・相手の人間の替る毎に・其れ相應の談話や理窟を持掛ける樣に心掛けねばならぬ況んや老若男女の相異あるに於てをやである・人(ニン)を見て法を說けといふことも隨機說法といふことも蓋し此の邊の消息のことである・卽ち子供には子供に合點の出來る樣に演說し・老人には老人に合點の出來る樣に演說し・法律屋には法律屋に合點の出來る樣に演說し・科學家には科學家に合點の出來る樣に演說し・そしてクリスチャンにはクリスチャンに合點の出來る樣に演說し・そして又頑固屋や屁理窟屋には頑固屋や屁理窟屋に合點の出來る樣に演說する・それが隨機說法であり・そしてそれの出來るのを能辯家といふのである・苟も學理や敎法を人に說いて聽かせるには此の如き辯才を持て居らねばならぬのである

然らざれば折角の演說も折角の御說敎も聖人孔子の申された通り「あつたら口に風をひく」ことになつて・折角の努力も・折角の暇潰(ヒマツブシ)も水泡に歸するばかりでなく・西洋人が

(一)餘り長たらしい說敎は肉身(聽衆の)を倦怠させる

と言ふた樣なことになり・

(二)餘り長たらしい說敎は(聽衆をして)頭痛せしむ

と言ふた樣なことになり・或は

(三)餘り長たらしい說敎は聽衆を逐ひ出す

Wer zuviel predigt, verjagt die Zuhörer.

と言ふた樣なことになるのである・蓋し此の如き結果になるのは演說者・其の人の愚鈍に原因するのであるから・苟も演說でも仕樣とするものは・自分の學力や才智を反省して檢討せんければならぬ

所で世の多くの說敎師や・坊さんや・お寺さんなんてものは・多くは無學であるばかりでなく・誠に有がたい善い法談を聽かせて下さるが・御自分では其の善い御說敎を少しも實踐躬行されないから・言はば蓄音機から發聲させると同じ結果で人格的感化なんてものは少しも現はれないのである・例へば酒を飲むのは宜しくないといひながら自分では般若湯と稱して遠慮なく酒を飲んでゐるの類が其れである斯樣な牧師や宣敎師も亦西洋に幾らも居るらしい・西洋の俚諺に

(一)說敎者は多くあるが・其れ自らは聽き入れない

Viel Prediger sind, die selbst nicht hören.

(口では善いことを言ふが身の品行は惡い・といふ意)

(二)說敎者は說敎のための俸給は取るが行爲のための俸給は取らぬ

Prediger haben Gehalt für Predigen, nicht fürs Thün.

といふのがある・道德の講釋をする先生が・惡るい事をする樣な話しである蓋し世の中の話しは大概こんなものであらう・言行一致はむづかしいものと見える

〔せ〕錢と女の話

世の中には有つて善いものもあり無くて善いものもあるが然し又どうしても無くてならぬものなれどそれが有るために・色々の事故の原因となつて困るものがある・錢と女とが卽ち其れである・今日の世界ではいづれの代(ヨ)いづれの世界でも錢が無くては生存が出來ぬのである・それと同じく女といふものが無ければ人類は絶滅して天地が暗闇みとなるから・どうしても女は又無くちやならぬものだが此の女の有るがため又色々な事故が起つて頗る迷惑するのである日本には無かつた樣だが西洋には女房掠奪戰 Weiberkrieg なんていふ戰爭さへも起つたのである人間には意志の强いのがあつて・刻苦勵精・涙ぐましい美德を現はす事もあるが思ひ込んだ女のために世界無二の大帝國の王位をも蔽履を棄つるが如く棄てた人さへもある・農學士の有島武郎といふ人は波多野なにがしといふ有夫の女を姦し・それが良心呵責の因となり兩人相携ひて輕井澤の別莊に赴き・そこで兩人相並びて首を縊り・ぶらさがつたのが誰れにも知れず・其のまま十日間程經過し・折りしも夏の炎天の頃であつたため・兩人の死體は殘らず腐れ骨ばかりになつて・ぶらさがつてゐたといふこともある・戀愛至上主義の結果だとかいはれてゐたが(事件は大正六七年頃のことである)是れも蓋し女が有つての上のことで女さへなければこんな凄慘な事件には至らなかつたであらう是等は皆最近の現實のことだが少し眼光を轉じて古今東

西の歷史を開いて見て見玉へ・女故ゑに起つた悲慘事や葛籐は無量無數である・如何にも女といふ奴は惡事の張本人で惡むべきものなれど・然し「女ならでは夜の明けぬ國」で一日たりとも女がゐなくては・此の世は治まるものでない小さい話だが鰥(ヲトコヤモメ)に蛆(ウジ)がわくとまで言はれてゐる通り女が家庭に居らねば家庭は全く暗闇である・此の意味から言ふても女は又無くてならぬものである・が此の女が荒(アバ)れだしたり阿婆擦れ出したり・したならば・是れ又恐るべき弊害や惡事を惹起するのである・明治初年の評判たりし高橋お傳の事件を見ても理解し得られ最近の「お定」事件に見ても理解し得られるのである女の惡るがしこい奴や世路をへてあつかましくなつたものなどは此の世の害物といふよりも寧ろ危險といふべきものである聖人孔子さへも「女子と小人は養ひがたし」と仰せられたのである・男の愚圖にも閉口するが・女のズーズーしい奴にも參ゐらせらるるのである・いづれにしても・厄介なものである

次に又無くて困るものは錢である・此の錢といふものは・誰れが發明したものか判らぬが今日となつては是れが又一大厄介ものとなつてゐるのである・物々交換の不便は言ふまでもないが・錢を持たぬものから見れば・決して有難いものぢやない・雨や雪の降る樣に貴人非人の區別なく一樣に與へられるものなら・錢程便利なものはなからう特に硬貨でなく拾圓札とか百圓札とか・手頃な價券で與へて下さるならば・それにこした有難いことはない・重い炭俵を山から背負ひ出して・町へ出かけて・其れを米味噌に

引替ゆるよりも拾圓札一枚袂(タモト)に入れ・それで米味噌に交換することが出來れば・こんな便利は外にはあるまい明治二十七八年戰役の際・我輩の部隊は人夫八十人程の小部隊であつたが・それでも其の人夫に支給する給料のため時々兵站部の主計からメキシコドルで千圓程づつ受取ることがあつたが其の千圓が莫大な重量で運搬に手こずつたのである・三四年前支那奥地の遊覽を企圖したとき我輩は正金銀行へ三千圓預け其の信用狀を胴卷に入れて出かけたが・郵便葉書一枚程の目方もないので一向に苦もなく三千圓を携帶して飛び廻つたのである・紙幣といふものの便利を初めて知つたのであるが・これとても三千圓といふ錢が手に持つてゐた結果の上の話しで・三千圓が手に無かつたら・紙幣が如何に輕便であらうとも・其の恩惠は受けられぬのである・所で其の三千圓は雨や雪の降る樣に降つて來たのではない・永い間儉約を積み・苦勞に苦勞を重ねて溜めたのである・人の知らぬ難儀を澤山やつて・やつとのことで溜め得たのである・錢といふものが無くて此の世が渡れるものならば・こんな難儀はしないで濟むのにと・幾度び溜め息を衝いたか・數知れぬのであつた・誰れが・錢なんて・こんな詰らんものを發明したのかと・其の發明者を呪ふたのである・支那の本に

錢財入手非容易　用盡方知求處難

(錢財を手に入れるは容易にあらず用ゐ盡して方(マサ)に知る求る處の難きを)といふのがある・親の溜めた財産を・湯水の如く費消し「錢は是れ英雄・膽は是れ衣裳」と稱し空威張りに威張つてゐた男が・一朝「金壺渇水」となつた其の翌日を見玉へ家を喪ふた犬よりも一層哀れな姿になるのである・其の揚句・窃盗も働らき・追剝きもし・甚しきときは白晝・立派な邸宅に進み主人に面會し・そして其の主人を其の場で刺し殺すといふ樣な罪惡を犯すことにも立到るのである金錢なんてものが無くて・水草を追ふて生活してゐらるる元始時代には決して窃盗だ强盗だ・乃至人殺しなんてことは絶無で所謂「無爲泰平」であつたのである・成る程

金錢は世界(浮世)を支配する
Geld regiert die Welt.

には相違なく又

浮世は金錢で試驗される
Mit Geld Probiert man die Welt.

には相違ないが・金・金と金に夢中になつてゐる亡者にも實は吾輩困つてゐるのである・此の亡者連は・いづれも

金あればマスターたり親方たるものだ
Geld ist Meister.

と心得てゐるのである・成程・金程偉いものは無いと考へてゐる亡者連は・金の澤山あるものを指して

「マスター」と呼び親方ともいふて其の頤使に服從するかも知れぬが・ギリシャの哲人・歴山大帝を目尻にかけた「ヂオゲネス」の様な偉人の目には鰹節一本の價ひにも當らぬのである・西洋の俚諺に

金錢は惡徒を作る

Geld macht Schälke.

といふのがある・金・金と・金の事ばかり言ふてゐる亡者の群れは概して惡徒である・市會は惡徒の寄合ひだといふた人もあつたが或はさうかも知れん・市會肅正の烽火が揚ると同時に市會議員が珠數つなぎに檢擧されたことが有つたぢやないか

地獄の沙汰も金次第

といふものがある獨逸にも是れと同じ意味の俚諺がある

Geld ist die Losung.

といふのが其れである浮世には眞の道理といふものがない・熱い火鉢が時として冷（ツメ）たく感じ冷たい氷が時として熱（アツ）く感ずるのである・裁判官といふものは本當に正しいものかといふに・どうもさうではないらしい・そこで一審二審三審と裁判を重ねて初めて鉈形（ナタナリ）に決定するのである・裁判が本當に正しいものなら一審で事は足る筈である西洋に又

無口の錢が曲つたものを眞直ぐにする

Geld, das stumm ist,/Macht recht was krumm ist.

といふ俚諺がある・錢のためで曲事も眞直ぐな事となるといふ意味である西洋には無い事の様だが日本には「人間の通る路は山でもなく谷でもなく・袖の下の道だ」といふ俚諺がある・學校を設立せんと欲し制規の手續きをふんでも其の許可とか認可とかいふものが仲々早速には降下せぬものださうだが袖の下の道といふ不思議な道から進めば容易に許可がさがるといふことである・我輩の知人が煙草賣下げの看板を出願してゐたが三年も經過して尙許可にならなかつたので浮世の事に通じた人に話して其の所謂る袖の下の路を進んだら二箇月で立派な看板が降（サガ）つたといふことである

坊さんや神主さんなんてものは道德堅固な・無慾清淨な人かと思つてゐたら・仲々・色氣も多ければ錢氣も亦人並以上だといふことである・人情は洋の東西南北・いづれも同じことらしい西洋にも

坊さんが死んでも釣鐘は「おぜぜはこちらへ・こちらへ」と鳴り響く

Geld her, Geld her, klingen die Glocken, wenn gleich der Pfaff todt ist.

といふ皮肉な俚諺も見えてゐる・おぜぜ欲しさに善光寺の如來さんを擔ぎ廻はる坊さんもあり四國四十八箇所の札所の觀音さんを横濱近くの一箇所に集め・僅か一日で全部の札所の觀音さんに參詣が出來るといふ様な喜劇をたくらんだものもあり・其の御利益に預からんと欲し・教育界の鏘々たるお婆阿さん連が・杖つきながら一巡したといふことである・こんなことで壽命が延びたり・嫁の不料簡が改良

されるなら・お釋迦様は五十年の御苦勞はなさらなかつた筈だ・思へば馬鹿が多いことよな

又獨逸に

Die Mutter ein Hur,/Der Vater ein Dieb,/Hast du Geld,/So bist du lieb.

母が女郎でも・父が泥棒でも・お前が金を持てゐれば・お前は可愛くある

といふ一層辛辣な皮肉俚諺がある・昔し遞信大臣を勤めた人で妻君を亡くし・後妻を迎へんとしたことがある・其の頃は星亭とか原敬なんていふ辣腕の政治家のゐた時で金が物を言ふ時代であつたので・後妻を迎へ様とした政治家もお金が欲しかつたと見え・金持の質屋から拾萬圓の持參金附の娘を貰ひ受けたのである・隨分哀れな話ぢやないか?? 是れに對比して見ると昔しの張翰は見上げたものぢや・大臣の椅子を棄て・陝西省の西安(シイアン)(昔しの長安)から・三千里外の今の上海附近の松江の片田舍へ「サンマ」の走(ハシリ)りを食ひたいと言ふて草鞋(ワラジ)ばきで戻つて歸つたのである・精神の清濁に雲泥の相違があるぢやないか??

世間には往々

おかねが有つたら・どんなに氣が晴ればれするだらう

といふて零(コボ)す人がある樣だが・是れは愚痴の泣言といふべきである・僕の家は貧乏恩田と言はれた程の貧困家であつた・實際我輩の小學校へ通つた頃は座敷は十疊で槍持・草履取などの差し控ゆべき表玄關もあつたが・それがいづれも雨漏(モ)りで疊の腐つた部屋ばかりで・雨降りの日には我輩などは姉や妹と一處に唐紙の無い押入の棚の下に寢てゐたものだ・然も親父は床の間の片隅に寄りかかつて松城懐古の詩や松代八景の歌の作製に詩思を凝らしてゐたのである・母の里の金持に引替へ僕の家の貧乏は子供ながら怨めしく思つたのである・所で不思議なことは・苦樂の關係である金のある叔父は一合の酒も飲まず晝夜苦勞してゐるのに僕の親父は綽々餘裕ありで朝から晩まで來客さへあれば酒を飲みつつ天下國家を談論してゐたのである「ベンジャミン・フランクリン」は

錢金(ゼニカネ)は人間を未だ曾て幸福にしたことがない・將來も亦左樣であらう・其の性質の中には幸福を生む何物もない・而して人は金を蓄積するにつれて愈々之を欲しがる

と言ふたさうだが・我輩の經驗から論じて見ても・フランクリンの此の斷言は眞實に相違ないと考定するのである・否・寧ろ金が溜れば溜るにつれて・心配や苦勞が多くなるのである・のみならず

金錢や財産の多くある處には喧嘩や論爭が多く發生する

Wo viel Geld und Gut ist,/Da wächst viel Zank und Hader daraus.

と言はれてゐる通り・必ず喧嘩や論爭が起るものである「アナクレオン」といふ人は耶蘇紀元前六世紀頃の人だといふから隨分古い昔の人である・金錢のため・親子の間が惡くなつたり兄弟の喧嘩などの起つた事も已に此の頃から現はれてゐたものと見え・此の「アナクレオン」の言ふた言葉の中に

金錢は兄弟の間の不和を誘引し兩親に對する不敬を惹起したのみならず親を殺害するといふ樣な重罪の原因となつたのである

とかいてあるさうだ金錢はあらゆる惡事の原因となることを知るがよい・けれども金がなかつたら・どんな立派な道德家でも・どんな立派な門閥家でも・人から尊敬せられる樣なことは絕對にない・耶蘇紀元前三十年頃に死んだ「ホラチウス」といふ人は

錢が無かつたら道德でも門閥でも・海の中の藻屑の如く輕視される

と言ふたのである・況んや博士や學士に於てをや・思ふべきことぢやないか？

封建時代には乞食坊主といふものが有つて・觀音經一卷諳記すれば乞食して世を渡ることも出來たが今日となつては・そんなことも出來ないから・苟も世を渡らんとするには・先づ第一に酒色の慾を完全に排除し・そして嚼(カヂ)り就いた仕事に・忠實に力を入れ・使つて呉れる人のために・利益となる樣に心掛けて働らくより外に名案はないと我輩は考へてゐるのである・給金が安いの・高いのと言ひ・勤務の時間が長いの短いのと言ひ・そして雨が降るから休む・風が吹くから早くかへる・頭痛がするから朝寢する・用事が無いから手を休めて煙草を吸ふ・こんな調子では持合せの金も無くなり・鼻の下も乾燥するに定(キ)まつてゐる女や子供なら仕方もないが堂々たる體格の持主が愚圖ら愚圖らとして一日を爲すこともなく暮らし・さうして錢が無いから子供の勞力に依賴し或は兄貴の脛をかぢつて其の日を送る・こんな人間は寄生植物よりも遙かに有害なもので人間としては實に恥づべきの至りである・吾輩は・こんな恥づべき境遇に陷つたら前の上海事變の時の空閑中佐の最後の如き覺悟で自決する位な意氣で進まねばならぬのであると思ふてゐる・人間は壽命の長いのが決して名譽ではない・世に生存する限り自活するはもちろんだが・なにか世間のための御用を勤めなければならぬ筈である・然も唯金を溜めることばかりに腐心して貴い日光を消費するのは誠に申譯けのないことであると我輩は考へてゐるが・世の中には馬鹿ものが多くて困る・西洋の俚諺にも

吝嗇なものと肥えた豚とは死んだ後に始めて世の有用なものとなる

Den Geizhals und ein fettes Schwein/Sieht man im Tod erst nützlich sein.

といふのがある或は此の通りかも知れん然も其の溜めた金は馬鹿息子の放蕩資金となるばかりでなく・アナクレオンの言ふた通り兄弟喧嘩や親類不和の原因になるに過ぎぬのである・西洋人の通り言葉に「タイム・イズ・モネー」といふのがある・是れが抑も日本人を墮落させた一大原因であつたのである・是れからは・萬事が犧牲的精神で進まなくちや嘘だ・錢や女のために「クヨクヨ」しちや男の名折れになる

〔ぞ〕 俗人と君子の話

俗人とか俗吏とか・いふ言葉を耳にすると・なんとなく人間離れしてゐる樣に思はれるが實は人間の仲

間でも最も平凡な人間である・そして俗人の俗の字は谷の中の人といふ意味であるから山奥の人・田舎の人・是れが俗人なのである・字書によれば「イヤシイヒト」「ヒナビタヒト」其れが俗人なのであり・そして學問もあり・禮儀作法も知り・立派な人徳を具へた人が君子であり・紳士であり・そして Gentleman (ゼントルマン)であり Vornehmer Mann であるのである

是れが一般の解説であるが・都會の人にも學問のない禮儀作法も知らないものが澤山ゐる・のみならず山奥の人や田舎の人は・どこともなく垢染(アカジミ)てはゐるが・質朴で正直な性質を澤山に持つてゐる・都會の俗人と來たら猫と狐と虎とを搗合せた様な性質を具へてゐて・油斷も隙(スキ)もならぬものなのである

紳士とか紳商などといふ言葉がある・其の紳は大帶(オホオビ)と譯されるもので高貴の人が衣冠束帶を整ひた時に用ゐられる帶で・聖人の貽された金言などを・其れに書して身を修むるの資料ともなるのである・故に紳士と言はれる人は學德禮法の修養があつて氣高(ケダカ)い人なのである・其の紳士が野に下りて商賣をなすとき・それが紳商なのである

所で學問といひ修養といふことは決してセメントを造ることや・橋を掛けることや・病氣を癒(ナヲ)すことや・人の論爭を和解せしむることなどの手段や理窟や道具を知り覺ゆることが主(シュ)ではない「道」といふものを知り覺ゆるのが本當の學問であり・其の覺えたことを實踐躬行する・其れが本當の修養といふものである・が・其の「道」といふものが誠に知り難いもので古今の學者・いづれも一生涯を賭して研究して居るのである・であるから君子と俗人との見境(ミサカイ)も明確には指摘し難いのである・由て今は東洋の聖書とも言はれてゐるものの中から君子と小人卽ち俗人との關係を說き示された部分を摘錄し其れに解說を加へ參考に供するであらう

(一)中庸に「君子は中庸・小人は中庸に反す」とある・中庸とは適度といふことである・鹽が利(キ)き過ぎても不味(マズ)いし・砂糖が多過ぎても亦不味(マズ)い・其の味の程(ホド)の良い處が中庸である・蓋し此中庸が頗るむづかしいもので敎へられて濟むものでない・そこが修養の必要な所なのである

(イ)他(ヒト)の談話の邪魔になる様な大きな聲で饒舌(シャベ)る人がある・之れに反し終始沈默を守つて談話の仲間に加はらぬ人もある・是れはいづれも俗人なのである・中庸を失ふてゐるからである

(ロ)酒は飲むべきものでない・のみならず・佛敎の十戒にも「モーセ」の十戒にも飲酒が禁じられてゐるから我輩は酒を飲まぬ・と稱し杯を伏せて酒を飲まぬ人がある・之れに反し「ヘベレケ」になるまで酒を飲んで他(ヒト)に厄介を掛ける人もあり或は醉つて他(ヒト)に喧嘩を吹き掛ける人もある・いづれも中庸を失ふてゐる人である聖人孔子は唯酒だけは分量が定(キ)められ

ぬ・亂心せぬ樣に飲めと申されたのである・卽ち中庸を守ることである

(八)男女の交りもお釋迦樣や迦葉尊者の悟られた後の樣に全く遮斷されては人類の種(タネ)が絶滅して此の世界は闇黑となるから・男女は相ひ許して交はらねばならぬが去ればとて・其の度が過ぐれば腎虛症に陷り自分でも苦しみ他(ヒト)にも迷惑させるから中庸を守るが君子であり・中庸を守らぬ人が俗人であり小人なのである

(二)論語に「君子は德を懷(オモ)ひ小人は土を懷ふ」とかいてある・德とは道德の德で忠と孝とは重要な德である・土とは土壤の土であり「土地田畑」の土である・卽ち土地を買ひ入れるための金錢を儲けることにのみ沒頭して働く人が小人であり・斯樣な行爲は道德律に牴觸しはせぬかと・常に用心して行動する・其の人が君子なのである・所で今日の人は概して金を儲け・そして立派な店舗や邸宅でも造つて・そして心持善く暮すことの出來る樣にと・其れのみに働らいてゐるのであるから・今日の社會は小人の集團に過ぎぬのである

(三)論語に「君子は義に喩(サト)り小人は利に喩る」とある小人卽ち俗人といふものは「是れでは損になる」とか「是れでは儲からぬ」とか乃至「給金が多い」とか「給金が安い」とか「いつまでも月給をあげてくれない」とか「印稅(著書の)を今少しあげてくれ」とか・なんとか・寄ると觸(サハ)ると金錢の話しを持出す是れが利に喩るといふものである然るに君子といふものは金錢上の談話などは一向に試みず何事に遭遇しても「それが正しいか正しくないか」を考慮し「それが道理や法律に適合してゐるか・どうか」と考慮するのである・言ひかゆれば君子は・何事に由らず・すべて聖賢の敎訓に隨ふべく努力するものなれど俗人といふものは・すべて我欲から打算して言行するものなのである

(四)論語に「君子は刑を懷ひ小人は惠を懷ふ」とかいてある・君子といふものは「斯樣な事を爲したら刑法に觸れはせんか」と考慮するのであるが小人は「斯樣な事を爲したら恩惠に浴するかどうか」と考慮するのである近い話しであるが贈賄・收賄は法律で立派に禁じられてあるのを忘却して賄賂を贈つたり或は收めたりする・斯樣な行爲をなすものは位階勳等を持てゐる立派な人であつても・其の人は君子でもなければ紳士でもない賭博も亦法律で立派に禁じられてゐる事であるのに・發覺しないのを幸ひとして・花牌や洋牌を弄び遂には金品を賭(カ)ける樣な事をするに至ることがある・斯樣な人も亦小人であり俗人である・君子たるものは刑を恐れて決して斯樣な事をなさぬのである麻雀(マアジャン)といふ娛樂道具は近頃支那から渡來したもので支那では此の麻雀で賭博することを許してるため・日本人の中にも・差し支へない樣に輕視して・之れを賭博の具に使用するものある樣だが・檢擧されると・されないとに拘はらず・君子たるものは斯樣な遊戯には手を觸れないのである碁や將棋は日本の娛樂機關の公許具であるが・是れとても往々賭碁(カケゴ)賭將

棋に陷り易いから・心ある人は履(クツ)を瓜田に入れるの疑ひを怕れて決して手に觸れないのである・寧ろ君子なるものは曾に刑を怕れるばかりでなく・疑ひをも格外に怕れるものである・此の故に君子は株式取引所の樣な所にさへも足を入れず又男子の居らぬ婦人獨居の室に決して足を入れないのである・然るに今時の學生は男でも女でも此の如き嫌疑の罹(カカ)ることを少しも顧慮せぬのである・是れを學生の墮落と稱するのである・君子には決して斯樣な疑ひはないのである

御下附になつた教育勅語を捧讀する場合には必ず手に清淨な手套を掛けるのは・肉身を勅語に直接するの不敬となることを避ける爲めである・女子が男子に物品を直接に授受するときは・握手の疑ひなきにしもあらずである・給仕女はもちろん・夫のある妻君でも昔は給仕盆といふものを用ゐて・物品の授受をなしたのである・蓋し邪淫の嫌疑を避くるためなのである・君子たる男女の態度も昔しは緻密であつたのである

(五)論語に「君子は周(アマネ)くして而して比(カタヨ)らず小人は比(カタヨ)りて而して周(アマネ)からず」とかいてある・君子といふものは依怙贔屓せぬといふことである・蓋し小人といふものは自分の意を迎へて御機嫌を取るものを愛し・意を迎へず理窟でも言ふものを憎む癖のあるもので・馬鹿な大名や・聰明でない長官や社長に斯樣な癖があるのである・多勢の人の上に立つ人に斯樣な癖があると・其の集團の平和は決して保たれるものでない・日月の山河の區別なく照すが如く公平に徳を施す人・其れが君子である・但し自分では公平に徳を施すつもりでも心が行き屆かなければ依怙贔屓に陷り易いものであるから・平生に注意して居らねばならぬ・概して餘り氣の利(キ)く人間には影と日向のあるもので・實は警戒せねばならぬものなれど・氣の利(キ)かない樣な人間は多くは愚直であると同時に癇癪を起し易い性癖を以てゐるのであるから・人を取扱ふ場合には・能く人の性癖や才能等を看破して置かねばならぬ・が・大事件を處理するのでなく普通一般の雜事を處理する場合には・餘り氣の利(キ)き過ぎたものよりも愚直で骨を惜まぬものが・有益である・去りとて賞與などの場合には・有益なりとの理由で厚く賞與したらば・他の者が依怙贔屓だと稱して・不平を釀(カモ)すことがあるから・此の邊の事情も洞見するだけの智慧を磨いておかねばならぬ

(六)論語に「君子はこれを己に求め・小人はこれを人に求む」とかいてある・人間といふ奴は・とにかく不思議な存在である・其の中でも負(マケ)ることを嫌ふ性質の多いことは最も不思議である・そして此の性質あるにより・人間世界を文化せしめたことも亦實際不思議な現象であるのである・生物には競爭心は存してゐるが勝負を爭ふといふことはない・然るに人間には勝負を爭ふ性質があつて・然も負けることを嫌ふのである・相撲だなんてものは・直接的の勝負であり・競走とか・ボートレースなんてものは間接的の勝負である觀じ來れば人間萬事・悉く勝負である・昨今の支那事變から影響して米國が五萬噸級の軍艦を造るとか・英米が聯盟を結ぶとか・言ひ傳へられてゐる

事も結局は負けることを好まぬ結果である・此の性質から負けたものを輕蔑し・そして自分が自慢し鼻を高くするのである・其れがため・時には血の雨を降(フラ)す樣なことにもなり・惻隱の情に富めるものをして酸鼻・堪へざらしむるに至るのである・聖人は此の事態を防止するため「君子は爭ふ所なし」(論語)と言ふて人の勝負心を緩和すべく訓ひ・老子も亦「我れは爭はざるを以て爭ふ」なんてことを言ふて・勝負の惡弊を矯正せんとしたのである・日清日露の戰爭なども固より勝負の心から始まつたものなれど・勝利したため・日本の驍名が高くなり・吾々までがおかげ樣で白人や紅毛の前へ出て威張れる樣になつたのである蓋し斯樣な心持が所謂る自惚(ウヌボレ)といふものであり・同時に他を輕蔑し侮る樣にもなるのである

先頃皇軍が支那山東省を攻めた際・守將韓・復渠は居城を放棄して徐州方面に逃げたので國民政府の主席蔣介石は直ちに韓復渠を捕へ「勝手に退却したのは不都合である」との理由で卽日銃殺の刑に處したのである・所で日本の或る新聞の短評に「勝手に居城を棄たといふ理由で韓を銃殺するならば・勝手に南京から飛行機で南昌あたりへ逃げて行つた蔣をも銃殺したらどうだ」といふたのである・蔣介石の仕打は「己れに求めずして人に求めた」といふものである自分の身に反省して・人の身の上を思ひやる・左樣な人が君子であり・自分の行爲を棚にあげて・他(ヒト)の行爲にのみ目をつけて・とやかく言ふのは小人の仕打といふものである

(七)論語に「君子は和して而して同ぜず小人は同して而して和せず」とある君子といふものは義を尙ぶものであるから・道理に依ては人と和するが・滅茶苦茶には雷同しない・之に反し小人といふものは利を專一とするものだから自分に有利だと見れば・直ぐに雷同するが・利が無くなれば直ぐに離れるのである・世間にストライキといふ忌はしい爭議が現はれることがある・此の爭議の指導者といふものは・有利(ウマ)い事を言ふて他を勸誘するのである・例へば「給金を增して貰ふ樣にする」とか「勞働時間を減(ヘラ)して貰ふ樣にする」とか・色々な都合の良いことを言ふて勸誘するのである・小人や俗人は此の如き甘言に乘ぜられて忽ち雷同するが・君子といはれる樣な人は其のストライキなることが自分の利益を離れて考へて見て正義であるか否かを檢討し・そして若し正義でないと見た場合には・どんな迫害を受けても雷同せぬのである・言ひかゆれば君子は義で去就を定め小人は利で去就を定むるものと言ふべきである

(八)論語に「君子に三畏あり・天命を畏れ・大人を畏れ・聖人の言を畏る・小人は天命を知らず而しで畏れず大人に狎れ・聖人の言を侮る」とかいてある・三畏の畏は恐れることであり・敬承することであり又用心し心配することであり或は有難いと思ひ感謝することである卽ち君子といふものは第一には天命を畏るるのである天命の天は「神」といふ意味の場合もあり眞理・正義・自然の道などといふ意味の場合もあり或は運命といふ樣な意味の場合もある・ここでは運命と見て解釋するがよか

らう例へば(一)同僚が昇進するのに自分は拔擢せられないといふ樣な場合に不平を起して愚圖る樣な人間は俗人であり小人であるが・君子は運を天に任せてゐるから・不平も言はず去ればとて馬鹿に喜びもせぬのである・是れを天命を敬承するといふのである・尙今一つ例をいへば楠正成公や宋の文天祥の最後の如き場合に於て・毅然として此の世を去るは運命を敬承するだけの度量を持てゐるものでなければ出來ないことである・所で小人といふものは運命を敬承するだけの度量を持て居らぬから他の榮進を見て羨望の念を起し或は最後の土壇場に至りて默(モダ)い苦(クル)しみ・騷ぐ樣な醜態を演ずるのである・彼の抽籤によりて徵兵に定められたものや召集の命に接したものが・逃げ隱くれる樣な卑怯の振舞をなすが如きは・たしかに天命を畏れざるの一例である(二)それから君子といふものは・大人や高官や長上を尊敬し・聖人の言や金言格言などを尊重して違反せぬ樣に心掛けるものであるが俗人や小人といふものは・大人や高官や長上や先生などを侮りて其の言を敬承せぬのである・少し金でも溜めて懷中が暖くなれば忽ち得意となり・先生でも長上でも・同輩以下に見下げて驕慢な態度を見せるのである・昔し一人の藥學博士があつた・其の博士・榮進して從三位となり勅任官に陞つたのである・此の博士・其の先生と席を同うした際・其の先生を呼ぶに「君」を以てしたのである・我輩・其の傍らにゐて「無禮な野郎だ」と思つたが忍んで默してゐたが此の博士の如きが所謂る俗人であり小人なのである・大人に狎れ大人を侮るといふものが是れである

〔だ〕 代議政體と政治の話

repräsentieren (レプレゼンチーレン)といふ文字がある・譯すれば「代理する」となる・甲の村と乙の村との間に相談して取きめべき事件の起つた時・村民が兩方から大擧して出かけ・そして相談したのでは口數(クチカズ)が多くて纏りのつきにくいのが普通であるから・そこで甲の村からも乙の村からも・お互に代表者を出して相談することにしたら・どうかと話しが纏まり・そこで代表者を一人づつ出す・其の代表者が卽ち Repräsentant といふものである

天皇陛下から降された大命を拜受し奉りて內閣を組織した其の人は卽ち總理大臣であり・其の總理大臣の奏請に由り・大臣の恩命を拜し奉つた人々が卽ち閣僚である・此の閣僚は共同一致して　天皇陛下の御政治を可及的完全に運び進む樣に心掛ける・其れが大臣たる人の誠忠と申すものである・菅原道眞公を祠れる社殿の扁額に「誠忠貫日月」とかいてあつたのを・どこかで見たが菅公の誠忠は御政治を翼賛し奉る人々の龜鑑である

所で閣僚の相談だけでは不十分であるので　明治大帝は我々臣民のため特別な御思召しにより憲法と申し奉るものを降し賜つたのである・其の憲法御發布以來・帝國議會に出席する人々が選擧に依て定

められることになり・今日まで幾度も改選になつたが・其の選擧に當選した(衆議院の)代議員は卽ち衆議院議員といふもので・非常に名譽なことであるのである

內閣閣僚の相談に依りて作られた法律案といふものは・先づ貴衆兩院の可決を經て後　陛下に奏上し御裁可を經て始めて公布せられ我々の遵守せねばならぬ所の法律となるのである・卽ち出來あがつた法律に對しては國民は一言も不平など申しては相ひ濟まぬものであるから・我々が適法に選擧して送り出す所の衆議院議員は我々の意志を立派に代表する人でなくてはならぬから・愼重に考慮して選擧せんければならぬのである

但し衆議院議員を選擧する場合には選擧される人も誠忠無私に立脚して居らねばならず・選擧する人も亦誠忠無私に立脚して居らねばならぬのである・自分の利己心を基礎にして・兎や角・考慮してはならぬ・言ひかゆれば自分を忘れて同胞の幸福となる事のみを念願として投票もし人をも・選擇せんければならぬ・卽ち選ばれた代議士も亦此の心持を能く體得して議場に出席せねばならぬのである

所で政黨政治の理想を實現せんと欲し自分と意見の類似した人を狩り集め黨員と稱し其の黨員の力を利用して自分の意見を遮二無二貫徹せしめんと謀るが如きは甚だ宜しくないことである自分の意志を代表せしめんとする場合には・自分の觀察だけで代表者を選擇せんければならぬ・そこで政治に關してのみは決して同志を糾合してはならぬのである・從つて投票には被選擧者の姓名と選擧者の姓名とを並記するのが正當である・例へば○○○○は何某君を選擧致しましたと明瞭に答ひ得る樣にせんければならず又何某君は不肖○○○○を選擧して下されたのであると判然する樣にせんければならぬ

所で今日まで行はれて來た選擧投票は無記名であるから○○○○を選擧した人々の名前が明瞭せぬのである是れは西洋の習慣を應用したもので實は不良な選擧法なのである

それから・共同生活は人類文化の發達上最も緊要なことであるから・人類は共存共榮の精神を養成するに勤めねばならぬ蓋し共存共榮の精神なきものは動物的存在で名づけて我利我利主義のものといふのである斯樣な人は人類を賊する人であるから・須らく遠ざくべきである・從つて斯樣な人をば・すべての場合に於て人類の代表者に選擧してはいけない

村落は村落の人々の中から代表者をお互に選擧して其の人々に其の村落の政治的總ての仕事を委任する樣にする是れを村落代議員となすのである市町も亦此の如くして市代議員・町代議員をお互に選擧して其の市町の總ての仕事を委任する樣にする・郡縣も亦此の如くして郡代議員縣代議員をお互に選擧して其の郡縣の仕事を委任する樣にする・斯くて道府縣から帝國國會の代議員をお互に選擧して國政の相談に預からしむる樣にする・斯樣な政治組織を代議政體 Reprisentative Gouvernement と稱するのである我帝國には欽定の憲法があり・そして代議政體になつてゐるから・是れを立憲代議政體の國と稱するのである・最も善美な政體である

凡そ人の精神思想なるものは・是れを身口意の三つの行爲に現はすに於て始めて他人に知らしめることが出來るのであり・そして若しも身口意の三つの行爲に於て之れを發現せしめざらんか其の人の精神思想は決して之れを察知し得ぬのである眠つてゐる獅子はどんな料簡を持つてゐるか・判らん樣なのと同じことである此の故に人間は默してゐてはいけない・自分の精神思想は自由に發表せねばならぬ・我憲法が我々に言論の自由を立派に附與してゐるのは是れがためであり・そして其れがため讀み書きの知識が授けられてゐるのである・のみならず人たるものには・其の精神思想を適法に社會に發表するの義務が負はされてゐるのである・人類はお互に其の精神思想を適法に發表し以て自分に抱懷してゐる精神思想を同胞に知らせねばならぬ言ひかゆれば精神思想の發表をなさぬ人は公明正大な人とは言ひ得られぬのである・言はば陰險な人といはれても止むを得ぬ人なのである・斯樣な人は同胞の代議員たるべき權利を放棄してゐる人なのである・卽ち代議員たらんと欲する人は平生に於て其の精神思想を身口意の三つの行爲に於て世間に發表せんければならぬ・是れが卽ち今日の所謂る政見發表である・選擧期間に於て急速に政見發表をなすが如きは恰も擊劍道具を飾りつけた雛人形の如きものである・蓋し社會的生活をなすものは常に其の社會の改善進歩を圖るの希望を抱懷して居らねばならぬ是れが社會人としての一つの義務である

抑も權利と義務とは互に並行すべきものであるが故・權利を主張する前には必ず先づ義務を實行しておかねばならぬ言ひかゆれば義務を盡さねば權利は生じないのである・卽ち耕耘の勞作を爲すによりて秋收の幸福は得らるるのである・代表的人物として選擧せらるるのは人生の大なる名譽である・此の大なる名譽を收穫するには平素に於て耕耘の勞作に絶大の努力を致さねばならぬ卽ち正しき道に於て社會のあらゆる方面に向つて人類の幸福となるべき事に盡力せねばならぬのである・自己の利益のみを目的として活動することは實際から言へば一種の罪惡とも言ふべきである・昭和十三年の今日から約四十年前に我輩が鄕里に中學校を設くべき意見を發表したとき・其の當時の資產ある或る人は「僕には子供がないから中學校の必要を持たぬ」と放言して我輩の意見を抹殺したのである・此の資產家の如きが卽ち我利我利主義の人といふのである・自分に子供がないから中學校は必要でないといふ我利々々と言はずして何んと言ふべきか・自分に子供がなくても他人には子供が澤山ある・其の子供等に對しては中學校が必要ぢやないか・人の子供のために中學校の必要を知らぬのは自分だけを知つて他(ヒト)を顧慮せぬ我利々々野郎と評するより外に評し樣は無からうぢやないか・我輩の鄕里には斯樣な資產家がゐたので・とうとう現在の如き廢墟狀態を呈出したのである・見玉へ中學校が屋代に出來て松代の子供は其の屋代の中學校へ現在通學してゐるのである・若し彼れ資產家にして勅語の「公益をひろめ」の御聖意を奉體してゐて・我輩が中學校設立を勸めたとき・此の建議を容れ自ら率先して中學設立に盡力したりしならば・末代人の幸福は・餘程增進してゐただらうと思ひ・今日に至りても尙遺憾に思

つてゐるのである・想ふに世の所謂る政治家なるもの・多くは自己の利害關係に意見の基礎を置いて議論を進めて居るのではなからうか・昨今帝國議會の大問題となつてゐる「電力」論戰の如きも或は資本家の自己の益利問題から出發してゐる論戰では無いか知らんと我輩は觀察してゐる・電力の如き重要な動力は鐵道汽車を國有にした如く國營にするのが國家の爲めであり又同時に公衆の幸福となるものであると思ふのである・何事でも我利々々主義から出發するものには善良なものは無いと斷言して宜しい

抑も統御とか統治とか統帥とか乃至統監とか統轄なんてことは牛馬の如き動物に對しても頗る難澁なことで餘程「めはし」の利(キ)く悧巧な人でなければ成し得ぬことである・羊牧者は悧巧な犬を利用して羊群を統制するが・知慧のすぐれた人間を統御することは極めて至難のことであらうと思ふ・筆者は若い頃・乘馬の稽古を爲(シ)て見たが・仲々難(ムヅカ)しいものであることを知つた・どの馬でも・どの馬でも必ず頭の先きから尻の先きまでに一本の鐵の棒が行き渡つてゐる樣な感じを與へるもので其の棒が仲々思ふ樣に振り向かぬばかりでなく然も其の棒に又重いものと輕いものとが有り更に其の棒が鉛の棒の如く曲るものもあつて騎士の思ふ樣には仲々動かぬのである・が・段々稽古の進むに從ひ・馬も亦段々騎士の意圖を理會する樣になり・遂には馬の方で馴れて手綱(タヅナ)など引つ張らなくとも騎士の心で思ふ通りに驅けたり走つたりするのである・斯樣な場合を「人馬一體」といふのである・此の場合には人と馬との間に「無理」といふものが全く無い樣になるから馬も疲れず人も疲れないのである

筆者は多數の人を統御した經驗を持つて居らぬから從つて政治のことを話す資格は無いが思ふに馬を馭する樣なものだと想像してゐるが・馬に乘ると同樣に・時としては馬の背から振り墜される樣なことのあることを豫め覺悟して居らねばならぬと思ふてゐる・獨逸のカイゼルは振り墜されてオランダへ逃げ込み露西亞の皇帝は振り墜されて地下室で銃殺されたことは二十年程以前の話しである國家を治むるものは愼重に注意して國民の安寧や幸福を圖らねばならぬのである大學(本の名)の始の所に「其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊(トトナ)ふ其の家を齊(トトノ)へんと欲する者は先づ其の身を修む・とかいてある・一軒の家には戶主とか家長とかいふものが必ずある・此の家長は其の家の盛衰榮枯に對し全責任を背負てゐると同時に其の家の主權者である・であるから家長は家族の手本になる樣に其の身を修めなければならぬ

家長が其の一家を治めてゆくこと卽ち支配することを獨逸語では Häusliche Verwaltung といひ譯して家政といふ・卽ち家を維持し保存することであり・其の手段方法が一家の經濟 Ökonomie である・ギリシヤ語の「オイコス(家)といふ文字から誘導された言葉である・所で經濟といへば金錢の出入だけの樣に心得る人もあるが其れは短見である・然し文明社會にありては一家を治むるにも一國を治むるにも・一番先きに立つものは金錢の收支であるから・不經濟といへば無益な支出をなすことを意味する樣

になつたのである・帝國議會で提案される議案の一番重要なものは豫算案であるのを見ても國家を統治する上に金錢の收支の如何に重要であるかが・察知されるのである・此の故に一家を治むる人も一國を治むる人も・總て金錢の收支に絶大の注意を拂はねばならぬ

所で大學の治國平天下の章には「德は本なり・財は末なり」とかいてある・是れは・もちろん本當のことであらうが・普通の場合は家長が少々「拔け作」でも金錢が多く這入れば其の家庭は維持されてゆくが・大學者でも經濟思想のない場合には・其の家庭は必ず悲慘な狀態となるのである・故に一家でも一國でも・是を治むるものは先づ收入を多くし・そして支出を可及的縮小することに努めねばならぬ・平易に言へば月々の收入を成るべく多くし・そして月々の支出を成るべく少くし・そして月々の貯金を成るべく多くする樣に心掛けるのである・禮記の王制篇には「入るを量つて以て出づるを爲す」とかいてあり歐陽・修の食貨志論にも「其の入るを量つて而して之を出す」とかいてあるが・然し「多く這入るからとて・其れを殘らず支出した」のでは必ず頸の廻らぬ樣になることのあることを銘記して居らねばならぬ

卽ち國でも家でも貯金といふことを忘れたら國・家は必ず滅亡するに定(キマ)つてゐる

然らば・どうしたら貯金が出來るかといふに・其れには・夫れ相應の方法が有る・大學の治國平天下の章に「財を生ずるに大道あり・之を生ずる者が衆(オホ)く・之を食ふ者が寡(スクナ)く・之を爲す者が疾く之を用ふる者が舒なれば則ち財は恒に足る矣」とかいてある・平易にいへば「稼(カセ)ぐ者が多くて食ふ者が少く・そして快手(テバヤ)に製造して・徐々に使用すれば・貯金が出來る」といふことである・が・然しこんな簡單な說明では決して金は殘るものではない・先づ我々の經驗から論じて見ても・貯金は極めて困難なもので・千百人中金を溜めるといふ人は恐らくは一人か一人半位なもので其の他は・取るだけ遣つてゐる人であり・且つ中(ナカ)には人の儲けまで食ひ込むものもある・此の故に世の中の金は海の水が千萬年に亘つて增減せぬ樣に增減しないで我々が偶ま貯金の出來た樣に思ふのは・海面の浪の高くなつた襟なもので時間が經過すれば高くなつた浪は段々低くなり・遂には凹(アナ)が生ずるものと思ふのが正しい見解であるのである

但し金錢は收と支とを均等に保持するが眞理であるとしても・人間世界には病氣もあれば火災もあり泥棒もあれば・借り取りもある・之れがため我々の經濟には收＝支の公式を保持し得ざる事情が濃厚に存するのである・此の缺陷を如何に補塡すべきや・といふに・其れは長い月日(ツキ・ヒ)を待つて補塡するより外に方法は無いと諦(アキラ)めねばならぬ言ひかゆれば金は溜めても永久に溜つてゐるものでなく・借金しても其の借金は又永久に借金となつて存するものでない・我々の經驗では少くも五十年過ぐれば貸借は殘らず凹字と凸字とを組合せた如く完全なものとなるのである

然し斯樣に悟つて・人の溜めた金で一生を送るとしたらば其の結果は其の人自身が必ず苦責を感ずる事になる・是れは間違ひのない話しである・それゆゑ我々は成るべく金を溜め・そして止むを得ない困

窮や災難を救助すれば・それで人間の義務は濟むのである・が・多くの人は此の理窟を「ツマラヌ理窟だ」と言ふかも知れぬが・此の理窟に終始する人は必ず無病長壽の幸福を享受するのである・古人は之れを「無妄之福」と稱したのである・吾輩の實父は八十六の長壽を保ち一生涯一回も病氣せずに火の消えし如く入滅したのである・斯樣な幸福が眞の幸福といふのである

蓋し一家の政治も一國の政治も道理は同じことである泥棒の忍び込まぬ樣に防壁を作るのは要塞や萬里の長城と同じ道理であり・拍子木を打ち鳴らして夜を警めるのはサイレンを鳴らして敵の飛行機の襲來を知らせるのと同じ道理であり(易經の繫辭には重門擊柝・以て暴客を待つ・とかいてある)其の他子供を學校に送るのは國民の知識向上を計る所以と同じ道理であり・子供や學生に勉强を促がすのは失業者を救濟すると同じ道理であるのである

〔ぢ〕地獄と地藏樣の話

藥の名に Lapis infernalis (ラテン名) Höllenstein (ドイツ名) といふものがある譯して地獄石といふ成分は硝酸銀で皮膚に接觸すれば皮膚を腐蝕する劇藥であるから・地獄石と呼ばれたのである・此の地獄といふ言葉は極樂淨土・バラダイスと對語になつて用ゐられ・陰府・冥府・冥土・黃泉・あの世・などと呼ばれ・聖書哥林多前書第五章あたりや詩篇百三十九篇八節あたりにも見えてゐる文字である・從つて元始時代から人間界に用ゐられた言葉であり地下に在る一種の牢屋で根本地獄・近邊地獄・孤獨地獄などの種別があつて其の數百三十六に達して居り・是れに赤鬼・青鬼などの獄卒がゐて囚人を呵責し・命令や指揮に從順ならざるものは・之れを或は劍(ツルギ)の山に逐ひやり或は火焰の中に投入し・以て其の囚人を劇しく苦るしめるといふことである・此地獄の相(スガタ)の詳しいことは阿毘達磨俱舍論などに出てゐるが・現實に見た人は未だ曾て一人もない・希臘語の Hades・Tartarus なんて言葉も地獄と譯されてゐるから・どこかに存在するものに相違なからうと思ふ・俗語に那洛迦(ナラク)の底に蹴墮されるといふのがある・其の那洛迦が卽ち地獄のことである婆沙論と題した書物の中には

　贍部洲の下五百踰繕那(ユゼンナ)を過ぎて乃ちそこに地獄がある

とかいてある・と云ふことである・踰繕那は又由旬ともいふ西域記の記載によれば一由旬は聖王一日の行程で印度の俗間では三十里と稱してゐたといふことであるが或る他の記錄によれば

　大きな牛の鳴く聲の聽ゆる距離が一拘盧舍(コロシャ)で其の八倍が一由旬である

と云はれてゐるから・頗る漠然たるものだが・牛の聲の聽ゆる距離を假りに十丁とすれば五百由旬は八十丁の五百倍卽ち大約一千里に相當すべし然るときは地獄は地下一千里の處に在りと考ひてよろしかるべし・所で石炭坑でも一千里なんて深いものは無いから地獄に人間は行つたことが無いと斷言して可なる・のみならず地獄なんてものは架空的說話に過ぎぬものと言ふて然るべきであらう・然らば何故

に地獄極樂なんて架空の說話を揑造したのであるやといふに・其れには蓋し相當の理由が有るのである

希臘の昔し或賢人が「人間に若しも同情が無かつたら・是れ程猛惡な動物は他にない」と言ふたそうだが・或は左樣かも知らん・聖人賢人なんて人々は人間の此の猛惡性を矯制するために色々な手段を講じて其の結果・倫理道德なんてものを制定し或は神だの佛だのといふものを創造し更に人間の病苦貧苦不幸などに惱むのを利用し善因善果・惡因惡果なんて甘い理窟を說いて聽かせ・以て衆生を善導せんとした・其れが所謂る宗敎なのである・天國だ地獄だなんてものは此の宗敎の產物で現見的のものではないが・往時人知の進步せざりし頃には・聖人や賢人や高僧などを信仰する結果・其の說明に現はるる地獄極樂の相を信じ其の淨土に往生せんことを欲し・敎えられるまゝに淨行を修め惡業を爲(セ)ぬ樣に進んだが近世に至り科學が進步し實利實見に沒頭し・苟も實利實見の證明なきものは總て是れを空想とし架空として受け入れぬ樣になつたため・既成の宗敎は・人の之れを信するもの・段々に少なくなり・甚しきは共產主義の露西亞の如く「宗敎は阿片なり」などと唱ひて敎會までも破棄して工場となす樣な事になつたのである・源信僧都の書かれた地獄の變相の屏風といふものが近江の國滋賀郡・阪本村の來迎寺といふ御寺に今尙所藏されてゐるそうだが・此の屏風なども知識階級の人々には唯珍らしいものだとして見られるだけで・そんなものが地下に在るなどとは信じられないのである・であるから極樂が西方十萬億土を經た先方にありとか・死んで後には罪の裁判(サバキ)を受けるなんてことを說いても知識階級の人には決して信じられないのである

然らば地獄極樂は架空的のものかといふに蓋し其れは決して架空的のものでなく・儼然として存在する實有のものであるのである今は茲に其れを說明して聽かせませう

凡そ生物は必ず生れ出て一定期間此の世に生存し・而して一定期間の後には必ず死んで空にかへるものである其の生から死までの期間は卽ち壽命で其の壽命の長短は蜉蝣の如く短きもあり又鶴龜(ツルカメ)の如く長きもあるが人間は槪して百年の壽を保つものは稀れで大多數は六七十歲で死去するのである・そして此の生存間に於て人間は種々無量の變化を感受するのである・此の變化を人間の運命と稱し浮沈と唱ふるのである

蓋し此の壽命の長短や運命の良否は千人萬人・悉皆不同で實に想像の及ぶ處でないが・然し其の然る所以の理由は必ず存在してゐると考定せねばならぬのである・請ふ縷說を許せ

彼の砲彈を見玉へ・火藥の力で飛びゆくものであり・そして其の射距離は火藥の分量と砲身の仰角と・空氣の抵抗と・水氣の多少等種々の要因に因るものであることは何人でも理會し得らるることである・それから又彼の野球戲のボオルを見て見玉へ・銃砲玉の如く與へられた拋物線を描いて進むのもあるが・又或る球はインカアブを描き或る球はインドロップなどを成すではないか・其の彈道の色々に變化

する所以は蓋し球に與へられた動力の如何に由るのである

人間(でも他の動植物)でも此の世に出て來るのは火藥の力に因つて飛び出た砲彈に能く似てゐるのである・其の此の世に出て來る原因が佛敎で說いて聽かせる所の所謂る業識(ゴウシキ)であり・又無明(ムミョウ)と言はれたものである・蓋し其の業識とか無明とか・言はれる所の原因の性質數量等は前世の品行・行爲の善惡等に由るものであり・從つて人間の利巧馬鹿・運不運・貧富・貴賤等の差別も亦前世の原因と此の世に生れ出てからの種々の感動に由るものなのである・見玉へ同じ馬でも陛下乘御のおんまは・言はば富貴な人にも似て榮燿榮華な生活をなすに反し貧乏百姓の厩に繫(ツナガ)れてゐる馬は食ひ物も粗末であり・重荷を負されて嶮(ケハシ)い山・坂をも昇降し・そして汗臭いまゝで馬草の上に寢て其の勞を醫し・そして又翌日早朝から前日の如き難儀な仕事をさせられて一生を送るではないか??實際を言へば人間の生活も此の馬の生活に相違せぬのである或は汗臭き粗服に身を包み・膝を纔かに容れ得るばかりの陋屋に起臥し・そして夜が明ければ難儀な仕事に從事し少しばかりの給金で妻子を養ふものもあれば二頭立の馬車で會社や官衙に通勤し綺麗な部屋の内で汗も出さずに仕事する人もあるのである蓋し此の如き差別は決して偶然のものでないことは能く能く合點し理解せんければならぬのである

抑も因果の理 die Kausalität といふことは・いつの代でも・いかなる世界でも必ず同一なもので氣溫が降れば寒く感じ氣溫が昇れば暑く感ずる此の關係は場處や時刻や人に由て決して變はるものでない・佛敎で敎ゆる所の「善因善果・惡因惡果」は古今東西を通じて變化なき提言であり・そして此の關係は自分に知ると知らざるとに關せず必ず顯現するものなのであり・そして此の關係を或は疑ひ或は無視するものありとすれば其の人は白癡である・病人や白癡は學者の對象たるべき資格のないものである卽ち共に論爭すべき人ではない

吾々が人生の運命を論ずる其の尺度は蓋し因果律 Gesetz der Kausalität に在て存するのである・從つて「親の因果が子に報ふ」といふが如き俚諺は決して採らぬ所であると同時に遺傳 die Heredität なんてものをも採用せぬのである・その然るゆゑんは

「生物の體系は總て自業自得のものなり」

との原則に立脚してゐるからである・見玉へ自作の米は自分の米にあらずや・從つて馬鹿な子供が生れたりとするも・其の馬鹿は決して其の罪を兩親に轉嫁すべきものでは無い蓋し

兩親は旅舍の如きもので・吾々は母の胎内に寄生したに過ぎぬ

のである・其の子供の利巧馬鹿は其の子供の前世の業因に成れる結果に外ならぬのである

所で印度の哲學では「人間」の此の娑婆に於ける活動の狀態を六種に區別し・それを六道又は六趣と稱してゐる卽ち

(一)地獄道・種々無量の苦るしみを受けてゐるもののゐる處である
(二)畜生道・互に呑噬し爭ひ合ふてゐるもののゐる處である
(三)餓鬼道・飲食に事を缺(カ)き・其の上鞭打をも受けて無量の苦痛に惱むもののゐる處である
(四)修羅道・常に鬪爭し恐怖すべき狀態を演出するもののゐる處である
(五)人道・或は苦るしみ或は樂しみ・交錯的に苦樂を感ずるもののゐる處である
(六)天道・快樂の比較的多い有情の住む處である

今例を取つて人間生活を此の六道に配合して說明して見せませう

(一)お金も相當に多くあり家族がいづれも悧巧で達者で愉快に暮してゐる華族さんや成金屋さんなどが天道の人でありませう・但し華族さんでも成金屋さんでも死の苦だけはまぬがれぬのである
(二)普通の人間は時に或は病苦も感受するであらうし又遊散保養・花見芝居などの愉快も感受し娛樂に心を慰めることも有るであらうし又或は癩に障(サハ)る樣な場合にも遭遇することが有るであらうし又或は信賴した妻に死なれたり愛する夫に死なれたりして・悲痛に責められることもあるであらう・斯樣な生活は之れを人道的生活といふのである・死苦はもとより伴ふてゐる
(三)喧嘩して斬つたり・擊(ハッ)たり・殺伐亂暴・常なく危險戰慄すべき狀態を演出する人間界を修羅道といふのである

(四)餓鬼道の人間は先づ乞食の類と思へば間違ひなかるべし其の他・惡性な主人の下に働らく丁稚小僧の輩(トモガラ)も餓鬼道の人たるべく又胃癌や舌癌や喉頭結核で飲食の不自由な人も餓鬼道の人なるべし
(五)犬や猫の如く兄弟で淫を交へ或は親子で淫を交へ・そして同情の心もなく恥羞の念もなく行住坐臥飲食交歡・すべて規律もなく・禮儀もなく牛馬の如き生活を營む人類は畜生道の人といふべし
(六)ニコライフスキーで露西亞人に虐殺された我同胞やイカテルンブルグの土窖で銃殺され給ひし露帝や顯官貴族の如きは哀はれ至極のことでは有つたが・其れは正に地獄の沙汰といふべきである・鰌(ドゼウ)を鍋に入れ蓋(フタ)して其の蓋と鍋との隙間(スキマ)から酒を注入して見玉へ鰌は大騷ぎに騷ぎ苦るしむであらう此の鍋は鰌にとりては正に地獄であらう・大正十二年九月一日の關東の大震火災の時・本所の被服廠跡へ逃げ込んだ人々は此の鰌と同じ樣な苦るしみを受けたことと想像して御氣の毒に耐えぬのである

然らば如何にして地獄に墮(ダ)するか・如何にして天上に生れ出づるかといふに蓋し其れは原因結果の道理で說明するより外に說明の道はないのである・卽ち善行があれば其の善行の程度に由つて・其れ相應な愉樂な境遇に生れ惡行があれば其の惡行の程度に由つて其れ相應な苦勞な境遇に生れ出づるのである・尙言ひかゆれば父母の肉體に寄生するとき・餓鬼道の人間には餓鬼道の人間たるべき人の靈魂

が寄寓し・畜生道の人間には畜生道の人間たるべき人の靈魂が寄寓するのである・花には蜜蜂が寄集まり糞には糞蠅が寄集まると同じ理窟である・此の因果應報の現象は唯「今生」に於てのみ然るにあらず「隔生」に於ても亦然るのである・メンデルの遺傳論にも隔世遺傳といふことがある・曾祖父の性質容貌が曾孫に現はれ來るといふことである・斯樣な因果應報の原因が順後業（ジュンゴゴウ）といふのであり・そして昨日泥棒して今日警察署の豚箱に入れられて苦るしむ樣な因果應報の原因が順現業（ジュンゲンゴウ）といふのである・哥林多前書第十五章第五十五節に「汝の勝利はどこに在るか・地獄よ」とかいてある・他人（ヒト）のものを盗み取るのを勝利と心得て泥棒し・そして豚箱の地獄に入れられることを知らぬ人程哀れなものはなく又危險なものはないのである

Hölle, wo ist dein Sieg? (I. Kor., K. 15, V. 55)

（汝の勝利は・どこに在るか・地獄よ）

此の箴言は如何なる時でも如何なる場處でも・胸臆から離してはいけない・學生が懶惰に日を送つて落第の不面目を背負ひ込むなども蓋し此の箴言を忘れるからである・順現業の適例である・クリストフ・ヂエトリッヒ・グラッペ Christ. Dietr. Grabbe といふ人の書物の中に

Die Holle ist der beste Prediger
Der Christenheit.——man fürchtet sie!

（地獄は怖ろしいものだ・キリスト教義の最善な説教者である）

といふのが書いてあるそうだ・地獄は眞に善き説教者である・泥棒しても刑務所へ入れられる心配もなく・懶（ナマ）けても落第が無いといふならば・學生は必ず懶け・人は必ず盗むに相違ない・かくては此の世は破滅とならざるを得ぬのである・千年程以前にアルヌルフ帝と呼ばれた帝王があつた・此の帝王の言葉に

Facilis decensus Averni.
(Der Weg zur Hölle ist leicht.)
（地獄へゆく道は容易い）

といふのがある・如何にも容易（タヤス）い・惡行を實行すれば直ぐ地獄へでも餓鬼道へでも行き得るのである・坊さんは此の眞理たることを「因果歴然」と言ふて說いてゐる。近頃の人には此の因果歴然の眞理を肝に銘ずるものが甚だ少ない・田の草を丁寧に取れば米は必ず善く稔る・精神を内に守れば病氣に罹ることはない・然るに田の草を取ることを忘れて・酒色の慾に驅使せらるるから胃病にもなり淋病にもなるのである・病苦も地獄の一種である・ダンテの神的喜劇の文句に

私は苦痛と戰慄から滿された地獄へ往きます
私は變化のない惱みに往きます

私は失はれたものの堆積してゐる處へ往きます

といふのがあるそうだ・是れは喜劇の文句だが實は教訓の一つである・我輩のこの地獄と地藏樣の話も亦實は教訓の一つである。然らば地藏樣とは如何なる人のことかといふに・其れは此の詩人ダンテの如き人が其れである・所で馬や牛は草を食ふて適（タマタマ）ま交尾するのが手藝で其の外には大きな欲望はないが人間となると其の器用な所も非常に勝れ又其の欲望も箆棒に勝れてゐる・そこで其の勝れてゐる所に依つて・人間が三種に分類されてゐる

（一）食ひ氣（ケ）や色氣の非常に強きもの

（二）金錢欲や物質欲の非常に強きもの

（三）理窟や理想の非常に强度なもの

此の三つの欲望や煩惱は四苦八苦の原因であるから・人間から此の欲望と煩惱とを除却すれば・人間は大安樂となるのである・佛樣といふのは卽ち人間をして大安樂・大往生をさせて下さる人なのであるが・四苦八苦の苦境に沈淪してゐるものは大概愚物で自ら奮發して苦境から逃げ出る勇氣を持て居らぬのである・そこで其の苦境に沈んでゐるものを氣の毒に思ひ・自ら其の苦境に身を投じて其の憐れな衆生に接觸し・濟度の因緣（インネン）を作り・そして彼等の苦を救はんと發心して其の救濟事業に從事される・左樣な强い慈悲心のある人・それが地藏尊といふのである・梵語では「クシチガルブハ」Ksitig-arbha といふそうである・筆者は梵語に通じて居らぬから・其の語義は判らぬが・要するに一大願力を起して一切の衆生を濟度し其の諸々（モロモロ）の煩惱を斷絶し以て衆生を化益（ケヤク）される人のことであるが・今の生存競爭の激しい世知辛い浮世には・斯樣な慈悲心の深厚な大德は滅多に見當らぬのである・淸世の一缺點といふべきであらう・それにしても宗教家といふ人々も今少し奮發したらどうかと思ふが・どんなものであらう?? 救世軍の雜煮鍋や矯風會の年末慰問袋なんてものは本當の慈悲心から現はれた事業とは思はれない寧ろ御自分の身を救ふ一種の方便であらう・佛事に施餓鬼又は施食といふことがある餓鬼道に墮せる無緣の亡者の靈を弔ふがため讀經供養する法會であるが是れも亦一種の慰靈祭で・善事ではあるが・名聞的な仕事で何の役（ヤク）にもならんことである・衆生濟度の本願から出發するならば・先づ自分に大德を積みて然る後に救世の事業に乘り出さなくては嘘だ・寺の門前に六地藏尊を並べ立・赤い綿布製の頭巾をかぶせて然も窃かに其のおさいせんを食ふが如き行爲は・蚯蚓（ミミヅ）で鮒を釣る樣な行爲で・寧ろ自分が餓鬼道の亡者であることを證明するもので一種の僞善行爲である・近頃の坊主は宗教を自分の生活の手段に利用するのであるから施餓鬼會の時などにも・餘興と稱し三味線を持出し活動寫眞で參集の檀家の子供や娘どもの歡心を買ふ樣な施設をなすのであるから・施餓鬼會は恰も商家の開店披露か乃至賣出しの附景氣の如き有樣をなすのである・衆生濟度が地藏尊の仕事であるのに・衆生から救濟されるのが今の坊さんである噫

〔つ〕頭脳と人格の話

彼(ア)の人は頭脳が頗る明晰だ・なんて言葉があるかと思ふと彼の男の頭脳(アタマ)は頗る遅鈍だ・なんて言葉もある・人間の脳髄 Gehirn は目方こそ多少相違するが其の組織構造は人々大概同様である・犬や猫にも脳髄があつて食ひ物を捜す知慧も存してゐるが・其の知慧は人間程に相違して居らぬ・然るに人間の悧巧馬鹿は其の懸隔が天地宵壌とも言ふべきである・我輩は世間に暗い人間であるから・廣く議論することが出來ぬが・伯爵後藤新平君程・頭脳の明晰な人は世間に餘り多くはあるまいと思つた・恩師下山順一郎先生の御葬式の時・東京帝大の總長山川健次郎博士を始めとして・其の他の教授や博士が澤山に一堂に集合された・其の集合の眞中に後藤新平君が坐して聲高に談話してゐられたのである・自分は其の傍らにゐて三間ばかり離れた處から後藤新平君の談話の仕振りや態度や眼つきなどを注意して觀察したのである・其の頭脳の明晰たるや・敬服に耐えなかつたのである總長以下の諸君は殘らず烟に卷かれて殆んど一語も出せなかつたのである・頭脳の機能も「是れ程に違ふものかナ」と思つたのである・が退いて自分を第三者として見た時・自負(ウノボレ)かも知れんが・自分よりも・尙々遅鈍な頭脳の持主が世間に幾らも有るのである・世の中は實に不思議なものである・蓋し此の不思議を明確に認識したものが偉人なのであらう

猫は鼠を捕るに於て頗る怜悧であるが飼主の燒肴を取つて頭を痛く叩かれる樣な愚行を演ずるのである・是れは頭脳が一方に明晰であり・そして一方に暗愚であつた一例である・筆者の友人にKといふものがあつた・金錢を溜める道にかけては頗る怜悧であつたが其の貯金は馬鹿息子のために殘らず費消されたのみならず莫大な借金を脊負ひ込んだのである・是れ等は愚行の猫の類かも知れん・是れによつても人間の頭脳には明るい半面と暗らい半面とのあることが判るのである・佛敎中に四智といふことがある(一)大圓鏡智(二)平等性智(三)妙觀察智(四)成所作智が其れである・既に本編に於て說述したことであるが・兎に角過去現在未來に亘ての觀察力が鋭敏でなければ・筆者の友人の樣な愚行を曝露し易いのである・魚(サカナ)を捕る術に巧みであつても其の魚族の腐敗を防ぐ方法にも亦巧妙でなければ折角の骨折も無益に歸するのである・此の論は自分一代に限つたことではない・子孫にも及んだ話しである・昔しから落語などで聽く話しだが

(一)初代目は・伊勢屋の前を・初鰹尾
(二)二代目は・伊勢屋の前に・初鰹尾
(三)三代目は・伊勢屋の前で・鰹尾賣り

といふのがある・三代目の孫は・肴賣りに墮落したことを諷した話しである・伊勢屋の初代の旦那が百年の後までの事を考慮しなかつた其の結果が・こんな事になるのである・是れも頭脳卽ち判斷力や識別

力の一方に偏した一例である・要するに人間の智慧は古今東西・遠近三世に亘つて明鏡の物を照す如く明晰でなければ駄目だ・とは言ふものの・古語に

知るものは言はず・言ふものは知らず

とある・其の知らぬものの一類が我輩並に友人である・蓋し頭腦の明晰は・生れつきにも由るべく・修養や勉強にも由るであらうが頗る難問題と言ふべきである・世に

三人よれば文殊の智慧

といふ俚諺もあり又西洋には

- Two heads are better than one.

（一人よりも二人の頭腦が・より善い）

A doctor and boor know more than a doctor alone.

（醫者一人よりも醫者と農夫との方が善く判る）

といふ俚諺もある五燈會元といふ本には「三人同行・必有一智」とかいてあり論語には「三人行必有吾師焉」とかいてあるそうだ・が・兎に角文殊（梵名 Manjūsri マンヂュシュリー）と呼ばれた人は御釋迦様の御弟子の中で一番悧巧な人であられたのである・我々凡夫でも三人寄つて相談すれば文殊菩薩位な智慧も出て來るといふのが「三人よれば文殊の智慧」といふのである

所で世の中の智慧は體位同様・段々低下するらしい・昔しは庄屋さん一人で村内の仕事が美事に片附てゐたが近頃は多くの村會議員を集めて相談しなければ埒がつかなくなつたのである・人間の頭腦の低下が證明されるのである・但し西洋の俚諺に

So viel Köpfe, so viel Sinne.

（頭が多ければ・意見も亦多い）

といふのがあり・又

Viele Köpfe, vieles Sinnen,
Wer macht's recht in allen Dingen?

（人々意見が相違して・誰れが萬事に當て其れを整理するか）

といふ俚諺もある・船頭多くして・船（フネ）山に昇るの類であらう・近頃「ファッショ」とやらいふ・獨頭政治の様な政治が泰西方面に流行せんとしてゐる様だが・是れとて甘（ウマ）く行くかどうかは疑問である・兎に角・腕（ウデ）の有る人が先頭に立て仕事を爲（セ）んければ・何事でも成立するものでない・一軒の家でも九千萬人の一國でも理屈は同じことである・凡そ團栗の丈（タ）けくらべ程つまらぬものはない・物事（モノゴト）が唯遲延するばかりで進歩（ハカドラ）ぬのである・西洋の俚諺に

Wenn der Kopf ein Narr ist, so muss es der ganze Leib entgelten.

（おかしらが馬鹿なら・全身で其れを補償せねばならぬ）

といふのがある・社長や家長が愚圖なら社員や家族で其れを補助せねばならぬが・左樣な會社や家庭は決して長續きするものでない・革命なんて忌まわしき事象は・大抵こんな時に勃發するものである・政友會の頭領に伊藤博文公や原敬なんて人が居られた時は櫻花滿開の狀態であつたが鈴木喜三郎なんて人になれば忽ち政黨無用論なんて皮肉な議論も出る樣になつたではないか?? 西洋の俚諺に

Wo Glück und Segen soll gedeihen,
Muss Kopf und Herz beisammen sein.
Friedr. von Bodenstedt.

幸福と祝福とを豐かにせんとせば頭と心臟とを
一處にあらしむべし

といふのがある・聯隊長も其の兵卒も一身一體になつて活動せんければ決して赫々の偉勳を奏することは出來ぬのである・頭は頭・胴は胴・左樣に分離した動物は決して活動せぬものである・否・寧ろ死體となつて埋葬せらるるより外に活路は無いのである・西洋の俚諺に

Was man nicht im Kopfe hat, muss man in den Beinen haben.

（頭の中に持たぬものは脚（アシ）の中に持たねばならぬ）

といふのがある「社長に持て貰ふべき智慧が社長の頭にないならば手足（テアシ）となつて働く人の頭の中に存在せねばならぬ」といふことである・是れは一家にとりても一國にとりても同じことである主人が間抜けでも伜が悧巧なら其の家は潰れない主君が闇愚でも家老が悧巧なら・其の藩政は治まるのである・筆者の一族に恩田木工といふ人があつた・勤勉努力・遂に能く藩政を改善したので大正の頃・贈位の恩賞に預つたことがある・頭も利（キ）かず脚も利かずでは物（モノ）にならぬ・愚物の寄合ひでは話しにならぬといふことである

〔カラクタア〕カラクタアは Charakter とかく元來希臘の切り込む・彫り込む・刻印する・スタンプをつける・などといふ意味の言葉 χαρακτήρ（カラッセイン）から誘導された文字であるから・特徴 Merkmal と譯すのが適譯である・猫にあ猫の特徴卽ちキャラクタア（英語讀み）があり・ブルドックにあブルドックの特徴があり・そして商人にあ商人の特徴があり・官吏にあ官吏の特徴があり・醫者にあ醫者の特徴があり・聞く所に依れば掏摸（スリ）にあ掏摸の特徴があり・落語家にあ落語家の特徴があり・そして坊さんにあ坊さんの特徴があるといふことである・言ひかゆれば藝者商賣を勤めた女は・出世して公爵の奥樣と言はれる樣になつても藝者的性格は・どこかに發見され・蠣殼町あたりの相場師の店に住み込んで・僅かな給金で勞苦した者が・或る機會に巡り合ふて急に百萬長者となつても・小僧らしい性格は立派なフロック姿の中にも發見されるといふことである・西洋の書物には

動物でも植物でも乃至礦物でも土壤でも一定の特徴は必ず具へてゐる(Krug's encyklopädisch-philosophisches Lexikon. Leipzig, 1927)とかいてある

が今は人間の特徴ばかりを論議するキャラクタアが普通には人格とか品性とか譯されてゐる・所で人格は又性格とも言はれてゐる・其の人の性質の規格といふ意味である・近頃は色々な商品に規格の文字が用ゐられ此の生絲は規格に合はぬとか・此の石炭は規格に適合せぬなどと言はれる樣になつたが・人品の規格は身長や體重などで規定することが出來ないから・人格の標準を定(キ)めることは頗る困難であるが・近頃の流行語のメンタルテストを行へば・大體の性格(人格)は察知することが出來るのである

(一)目尻(外眥)のさがつた男は色慾に富んでゐる

(二)口が大きくて反齒(ソッパ)な男は强情で多辯である

(三)顏色が青白くて身長の高き男は猜疑に富んでゐる

其の他人の性格には・氣高(ケダカ)い性格もあり・下品にして野鄙な性格もあり・慳貪にして狡(コス)い性格もあり・高慢ちきな學者ぶる性格もあり・人前では謹嚴にして勿體らしく見せかける性格もあり・意氣地(イクヂ)の無い懦弱な性格もあるが要するに人間には何等かの性格の具はらぬものはないのである・西洋の書物にも

An und für sich ist daher eigentlich kein Mensch völlig charakterlos.

(此の故に人として全く性格のないといふものはない)

とかいてある・從つて

彼(ア)の男は・人格がゼロだ

なんて言葉は不完全な言葉といふべきである・若し人の人格や性格を批評する場合には「人格が高い」とか「低い」とか「野鄙」とか言ふ言葉で言ひ表はさねば說話が經まらぬのである

詩人ハイネの言葉に

Kein Talent, doch ein Character. Heine.

(才はなくとも・人格は具ふるを要す)

といふのがある・是れは詩の句だから・是れで宜しいが・高い人格は具えなければならぬと言ふべきである

「フロード」の詩句に

Courage is on all hands an essential of high Character.

(勇氣は高き人格の心髓なり)

といふのがある・人格の高い人には必ず勇氣がある・義を見て猛然として奮起する人の勇氣を想像すれ

ば・直ぐ判る詩句である・之れに反し恭をもてあそんで・病人の診察に赴かぬ様な醫者は其の人格の下劣を表示するのである・のみならず貧乏人だからとて・代診などを差遣して自分は書齋でウイスキイを飲みながら・書見してゐる様な醫者の人格も亦疑ふべきものである

所で高尚な・立派な・尊敬すべき人格といふものは・仲々得がたいもので・學問や才能は幾らあつても・其の人格は別である・フランスの人の言葉にも

精神・學問・才能は何人も之を有するを得
人格は何人もが有するにあらず（原文省略）

といふのがある・たしかに左様であらう・醫學博士でも農學博士でも・其の人格の隨分下劣なものが・世の中にゐるのである・けれども儒教に丹念な學者（昔しの中村敬宇先生の様な御仁）には人格の高い人が多かつた様に思はれる・澁澤榮一（青淵）先生は（筆者も謦咳に接したこともあるが）實に立派な人格の持主であられたのである・執事某氏の話に依れば青淵先生は・常に論語を懷中してゐられたといふことである・西洋の書物に

品位（高い人格）を得るの最簡法は謙遜にあり

といふのがある・謙遜な人はたしかに上品だが・禮過ぐれば諂諛（ヘツラヒ）に似たりと言はれてゐる如く・謙遜も度に過ぐれば・又野鄙となるのである・シャフツベリイといふ人は「少しでも惡に傾けば品性の價値が變ず」と言ふたそうだが・筆者は

金錢で働く人間に高尚な人格なし（剛堂）

と斷言してゐる・例へば印税を目的に著述する様な學者に立派な人格が具はらず・賣込みを目的に新藥を發見せんとして研究に沒頭してゐる學者に立派な人格の具はらぬが如くである・學校・特に中學校の先生などは大概月給のために時間を塞げてゐるのであるから・其の人格は商賣人の人格と似たり寄つたりである

〔て〕 電氣石と金剛石の話

頭（カシラ）に「デ」の字のつく言葉で修身資料になりそうな言葉がないので・こんな題目で話すことにしたのであるが實は無生物で是れ程不思議な・是れ程貴重なものは無いのである・抑も貴重とか下等など言ふ區別は・何が標準で計上するかといふに其れは蓋し多少に由るものである・概して多く在るものは下等で少ないものは上等である・「サツマイモ」や「ジャガタライモ」は澤山に出來るものだから下等品として高貴な人の口には這入らない・又鰯や鰯も澤山に產するものだから下等品として高貴の人の口には這入らない・昔し農民は多くて騎士は少ない・そこで騎士は貴く思はれ農民は賤しく思はれたのである・今日でも學者は少くて無學者は多い・そこで學者は貴とばれ無學者は卑賤視されてゐる・言ひ

かゆれば「ザラニアルモノ」は賤しくて「マレニアルモノ」「メヅラシイモノ」は貴重品として尊重されるのである・金貨は吾人七十八年間も生存してゐながら未だ曾て一度も手の平に載せて見たことがないのに一錢銅貨は隨分澤山財布に入れ・時に或は邪魔になつて困つたこともあつたのである・であるから金貨は貴くて銅錢は賤しいのである然らば乞食は近頃大變に少い樣だが・なぜ尊敬されないのかといふに・それは・鐚錢(ビタセン)が少くなつて・全く價値を失つたと同じ理窟なのである・であるから學生なども・人並みから拔け出て・優等生たらんことを心に掛けて勉强せねばならん・電氣石は獨逸語でSchörl と言はれ・學名はツルマリン Turmalin で寶石 Edelstein の一種で「アルミニウム」と「ナトリウム」との硼硅酸鹽が主成分で其の他に鐵・マグネシウム・リチウム・カリウムなどが僅量に含まれてゐるもので色も色々であり透明なものもあれば・不透明なものもある・普通は黝(イウ)色であるが・黃色・綠色・青色もある・然し光線射落の方向が變ずれば・其れ相應に色が變ずるのである・斯樣な性質を Pleochroismus(多色性)といふ人間も多色性の生物かも知れん・印度錫倫島には電氣石の綺麗なものが產するので・洋行かへりの人は歸朝の土產物として持かへるのである

此の電氣石は琥珀や硫黃や硝子棒やイボナイト棒の如く乾燥した絹布で摩擦すれば電氣性となつて輕いもの・例へば乾燥した火鉢の灰を吸ひ寄せること・恰も磁石が鐵粉を吸ひ寄せるが如くである・故に又吸灰石 Aschenzieher の名が與えられてゐる・獨逸では處々に產する樣だが・日本には產出せぬ樣である

此の電氣石には一種特異な性質が含まれてゐる・中學校などに電氣石挾子 Turmalinzange といふものがある・其れが其の特異性を應用した分光機具 Polarisationsinstrumenten の一種なのである・透明な電氣石を極く薄く截斷して郵便印紙程の大ささの薄片となして・空に向つて透(スカ)して見ればガラスの板を透(トホ)して見る如く透明に見ゆるのである・所でガラス板なら・二枚をどう重ねて透して見ても・いつも透明に見ゆるが・透明な電氣石截片は・重ね方により・其の透明の程度が變じ・時には完全に眞闇(マックラ)となるのである・一の字と一の字とを横に重ぬれば・矢張り一の字であるが其れを縱(タテ)横に重ぬれば十字となる・電氣石片も十字形に重ぬれば・光は完全に透過せぬから全く暗くなるのである・此の現象を說明するには「ニュートン」氏の光學說では駄目なのであり・そして「フイーゲンス」氏の振動說ならば說明することが出來るのである・そこで光を傳ふる處の依的兒分子は光の進む方向に對し直角に振動するものであるといふ說が證明されることになつたのである卽ち最初の「ツルマリン」板を通過するときには上下の振動が殘されて左右の振動は休止されるといふ說で此の現象が說明されるのである・然るにガラス板は・光の振動を制限せざるに反し「ツルマリン」板だけは光の振動を制限するといふ・其樣な性質をツルマリン板はどうして持つてゐるのか・其の說明は未だ明解されてゐぬのである

吾々は斯様な現象から考へて見て物體を構成する有様は總て不思議なものであるといふことを認識したのである・そして人間の身體の構造も百人が百人・悉く同じで無いといふことを想像するのである・卽ち同じ山水の景色を見ても・甲は其の美觀を喜ぶに反し乙は其の心に何等の美感をも持たぬことがある・同じ人間だから同じ様な場合には同じ様な感情を起すべき筈であるのに然らざるは如何に之を說明すべきか・未だ其の說明は無いのである・のみならず醫學的方面では「イヂョジンクラシイ」といふ言葉が用ゐられてゐる・譯して特感性といふてゐる・沃度加里といふ藥がある・人によりては此の藥を服用して發疹を見ることがある・醫者は其れを特異性の人だといふてゐるが・其の特異性(特感性)は說明されて居らぬ・のみならず人の心は千人が千人・萬人が萬人・殘らず不同である・如何なる心理學者も此の現象を說明して居らぬ・のみならず人の指紋も亦千人が千人・萬人が萬人・殘らず不同だといふのに其の不同の理由は說明されてゐない・此に於て吾々は一切萬物・總て不思議なものであると斷言するのである

鐵や銅(アカガネ)は熱を加へても電氣を發起しないのに反し・電氣石は熱すれば電氣を發起するは實驗の證明する所である・「電氣石は熱して電氣を起すものだ」と言ひ切れば其れまでだが・銅鐵の熱しられて電氣を起さぬ理由の說明のないのは遺憾では無いか?? 科學が進步したとも言はれてゐるが・我輩はまだまだ物(モノ)足りなく思ふてゐるのである・見玉へ不思議なものは幾らもある・砂糖が甘くて唐辛しの辛い理由の說明もないちやないか?? 唐辛しには「ビペリン」といふものが含まれてゐるから・其れで辛いのである・などと言ふてはいけない・其の「ビペリン」が何に故に辛いのか・其の說明が無いちやないか?? ・雞卵も腐れば惡臭を放つが・半可通は

其れは蛋白質が分解し・其の際硫黃と水素が化合して硫化水素が化生するからだ

と說明するが・硫化水素が何故に所謂る腐敗卵臭を放つのであるかの說明は出來ないのである・以て萬事萬般の不可思議なることを悟るが宜しい・見玉へ黃柏の煎汁も苦くて黃連の煎汁も苦い・そして熊の膽も苦くて鯉の膽(キモ)も苦い・其の苦い理由も判らなければ・苦味の感じの異なる理由も判らぬのである・以て世の中に不可思議の事物の多いことを悟るがよい佛典に俱舍論といふものがある・其の論中に

(一)人間には眼が二つで三つないのは何故か

といふ問ひに答へて

(二)二つで澤山だ・三つでは體裁が惡るい

といふたら

(三)昔しから三つ有つたら不體裁とは思はぬだらう

と反問したが・お釋迦様は傍らから

（四）つまらぬ問答は廢（ヤメ）て悟道に精進せよ

と仰せられたので問答は止（ヤ）んだそうだが・吾々も「つまらぬ問答は止め」ませう・そして親に孝行でも致そうではないか??

金剛石はダイヤモンドと呼ばれ・頗る價ひの高いもので貴顯や富豪は買ひ入れて・其の豪奢を誇るのであるが其の實質は單純な炭素（スミ）に過ぎぬのである・然るに是れを寶石として貴重視する所以は・唯結晶して光輝が強く綺麗であり・値段が高く產額が少く・從つて得がたいからである・のである・能く考へて見玉へ・產額が少くて値段が高く・容易に手に入れ得ぬものだとは言へ・其の品物（シナモノ）は火鉢の中の木炭と相違が無いぢやないか・それを王冠の上に取りつけたり・指環に嵌め込んだりして心に慢心を起すのは甚だ詰（ツマ）らぬ事であらう・總ての事物に就て斯樣な考へで此の世を送る・其れを淨行といふのである・坊さんが墨染めの衣（コロモ）に身を入れ・そして一切の肉食を禁じ・酒も飲まず・女にも觸れず・そして其の日の作すべきことを作して一生を送る・是れが淨行である・然るに今の坊主の服裝はどうか・其の飲食するものはどうか・淨行もない坊主の御說敎は世間に通用せぬのは當然だ・改心するがよい・轉向するがよい・至囑々々

〔ど〕讀書と自活の話

コリアといふ人は書籍の益を說いて・書籍は

（一）少年を誘掖し
（二）老人を樂ましめ
（三）無聊を慰め
（四）徒然を醫し
（五）人事の煩累を忘れしめ
（六）心配と情慾とを和げ・そして
（七）失望の鬱積を散ず・云々

と言ふたそうだが・如何にも其の通りであらう・然し一概に書物といふては語弊がある・世の中には濱の眞砂程・書物は存在するが其の中で讀んで益（ヤク）にならんものが又濱の眞砂程ある・言ひかゆれば「良書といふものは極く少ない」といふことになる・のである・酒の異名を集めた本もあれば女郎の異名を集めた本もある・こんな本は讀んで決して益にならんが・毛蟲や・シャクトリムシが無益なものであると同じく・自然に世に湧き出たものだから・仕方がない・そこで書物は撰擇して讀まねばならぬので

ある・所が撰擇するといふことは頗る困難(ムヅカシ)い事で石炭や金礦の撰別だけでも熟練を要するから・まして初めて見る書物の善いものか惡るいものかは・容易に知り得られぬのである・故に書物は信用ある人に問ひ尋ねて・其の良書なりと言はれたものを熟讀翫味するが宜しい・但し「人情本」といふものがある・こんなものは讀む必要が無い樣だが・心あつて讀めば・益(ヤク)になる處が決して少くはない・然し「イレン・ケイ」(女史の名)の書いたものなどは・日本の道德から見て甚しい惡書であるが・西洋の我儘娘や・おてんば娘の狀態を知るためには役(ヤク)にたつのである「惡は善の手本」とも言はれてゐるから・反省の資料にはなる・唯惚れ込まぬ樣に讀まねばならぬトルストイの本を讀んで其れに惚れ込み・クロポトキンの本を讀んで其れに惚れ込む・そこで惡思想にかぶれて檢擧せられる樣になるのである・フランスの名高い坊さんに Bernh. von Clairvaux (1091-1153) といふ人があつた・此の人の言葉に

Lesen ohne Nachdenken macht Stumpf; Nachdenken ohne Lesen geht irre.

(熟慮なき讀書は人を遲鈍ならしめ・讀書なき熟慮は人を迷惑せしむ)

といふのがある・考へなしに讀書すれば人間を馬鹿にし・無闇に考へ込むと・方向を失つて神經衰弱になるのは通例の事態である聖人孔子も

終日思ふ益なし學ぶにしかず

と申された通り・考へ込むより・良書に就て研究するのが宜しい・只なんとなく書物や雜誌を・あちらへ・ひつくりかへし・こちらへ・めくりかへして・光陰を費消する底の奥樣や娘さんや・女中さんが電車の内や汽車の内で・幾らも目につくが・つまらぬ日間(ヒマ)潰しぢやないかと・いつも心の中で嗤ふてゐるのである・こんな風の女學生などは・文豪ゲーテが

Zwar sind sie an das Beste nicht gewöhnt,/Allein sie haben schrecklich viel gelesen.

(彼等は善事に習はずして・たまげる程多讀した)

と言ふて・驚いた・其の人等の種類であらう・婦人倶樂部といふ雜誌がある・部厚な雜誌で・我々では四五日間では讀切れぬ程なものだが・或る汽車の内で

其の本は・あなた・幾日間位で讀み切れますか

と其の所有者たる女學生に問ひ尋ねたら

二時間位です

と答へられたので自分は「へーエ」と驚いたのである・蓋し此の女學生などがゲーテの所謂る「たまげる程多讀する」ものであらう・時間潰しの方から言ふても無益な仕事であり・印刷屋の方から見ても不經濟な仕事なのである・文豪ゲーテは

An Zerstreuung lässt es uns die Welt nicht fehlen; wenn ich lese, will ich mich sammeln.

（世間には散漫的のことが少くない・予は讀めば心を引きしめんことを思ふ）

といふたが・孟子は

學問の道・他なし放心を求むるのみ

と述べたのである・今の若い連中は悉く放心家である・引きしめるのが國家への奉仕であるぞ

世の中には種々様々の本を讀むを以て得意としてゐるものがある・世間では斯様な人を評判して「學者だ」といふてゐる・我輩から見れば「物知り」かも知れんが決して「學者」とは見えぬのである・それは兎も角・獨逸の學者 Georg Christoph Lichenberg (1742–1799) は物理學者で諷刺家だが・曾て

Es gibt wirklich sehr viele Menschen, die bloss lesen, damit sie nicht denken dürfen.

（唯讀むのみで其れを考慮せぬ人が實際甚だ多い）

と言ふたのである・考へなしに本を讀む人が實際に多いが・又本を讀まずに・朝から晩まで金儲けに夢中になつてゐるものも少くない・まことに・あはれな世界だ

とは言ひ・多種多様な本を無闇に讀んではいけない・文豪レッシングは

Viel muss man lesen, nicht vielerlei,.....Ich meine nicht Vieles, sondern viel: ein Weniges, aber mit Fleis. Gotthold Eplir. Lessing (1729–1781)

（書物は熟讀せねばならぬ・色々讀むな……自分は多種でなく一種を熟讀すべく・些細なもので

も・努力を拂つて讀むべく考へてゐる）

と言ふてゐた・そして「リヒテンベルグ」（諷刺家）も亦

Vieles Lesen macht stolz und pedantisch; Viel Selen macht weise, verträglich und nützlich.

（多讀は人をして高慢的に且つ衒學的ならしむ・多見は人をして悧巧に社交的に且つ有用的たらしむる）

といふた・如何にも其の言葉の通りである・所謂る學者といふものは大概「高慢知機」で且つ衒學的なものである・悧巧で狡猾（コス）くて・利に走るものが多い・我輩の面識ある博士にも・こんな學者が居つたのである

兎に角・書いたものを讀んで見る場合には・先づ讀んで已れに益する所あるや否やを考へねばならぬ・料理屋の床の間の掛軸を見ても・益にならぬ様なものは一瞥に附しておき・若し益（タメ）になる文句だと思つたら・書留めて遺忘せぬ様に心がけざるべからず・筆者は若年の頃・熊澤蕃山？の

憂きことの・なほ此の上に・つもれかし
限りある身の・心ためさん

といふ歌を・なにかの本で覺えておいたが・壯年から中老になつて言語に絶した苦勞界に沈んだのであ

る・が・孟子にある

天・この人に大任を與えんとする・先づ其の人を苦しめる

といふ文句と此の歌とを心魂に納め貯へて・自ら勵みつつ・困窮と戰つたのである・一首の和歌でも一句の箴言でも・しつかり覺え込んでゐれば・博覽强記の功に勝ることがある・のである西洋の俚諺に

Viel lesen und nicht durchschauen/Ich viel essen und übel verdauen. Spr.

(多讀して洞見せぬのは・多食して消化の惡るいと同じことだ)

といふのがある・消化せぬ食ひものは食はぬが悧巧である・然も寢ずで・下らぬものを讀む・これほどの馬鹿はあるまい・けれども善書は時折・出して讀むがよい・論語はもちろん・劍掃や菜根談の樣な本は時々讀まぬと・人間の精氣が腐敗する・西洋の或る家具に

Lies dann und wann ein gutes Buch,/Das frommet mehr als manch' Besuch.

といふ箴言が書きつけてあつた・譯せば

お寺へしばしばお參ゐりするよりも・善良な本を時折出して讀むと信仰心が篤くなる

と言ふことである・寺參ゐりや教會參ゐりをすれば・それで立派な信者と許すのは誤りである・のみならず・同じ讀書でも心を入れて讀まねば嘘だ・輕々に讀みすててはいけない・必ず有益(タメ)になることを見つけ出して・其れを肝に銘記せねばならぬ・西洋の俚諺に

Lesen ohne Verstand/Versäumt und ist eine Schand'. Spr.

(心なく讀むのは人を放逸ならしめて一つの恥辱である)

といふのがある・ダラシもなく讀むのは甚だ宜しくない・讀んだら必ず頭腦に納める樣に心がけねばならぬ・然し福澤諭吉先生も曾て

人間の記憶は一週間を出(デ)ぬ

と申された通り・吾々は昨日(キノフ)の新聞でも皆忘れて仕舞ふのである・であるから・益(ヤク)にたたぬことは捨て取らず・益(ヤク)にたつものは必ず書き取つて・時々出して見て・覺える樣に心がけるが宜しい・筆者は二十五六歳の頃から此の手段を利用してゐる・そして其の採集した知識を警視廳の「指紋カード」の如く・直ぐ搜し出せる樣に用意してゐるのである・此の手段は英人の宣教師デフォレスト氏から傳授されたものである・五十年後の今日謹んでデフォレスト氏に謝恩の誠意を捧ぐ(七十八歳の剛堂逸人)

次は自活の話しだが・此の自活が仲々困難な事で・鳶や烏の樣に到る處に食ひものが有れば・容易(タヤス)い事だが・人間の世界は仲々左樣に容易いものではない

食ふぐらいな事は・むづかしくない

などと・大きな法螺を吹く人もあるが・其れは大間違ひである・文豪ゲーテさへも

Ich hatte jung genug gar oft erfahren, dass in den hilfsbedürftigsten Momenten uns zugerufen wird : Arzt, hilf dir selber !

(救助の必要な場合に「汝自身を助けよ・是れ醫者なり」と呼びかけられたことを・屢々經驗した)

と言ふたのである「スマイルス」の自助論といふものがある・福澤諭吉先生も・それを讀まれたであらう・そして

自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源なり・獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず(格言教訓全書)

と申しておかれたのである・そして又

吾黨の男女は獨立自尊の主義を以て修身處世の要領となし之を服膺して人たるの本分を全うすべきなり

と申されたのである・更に角・自力でなければ駄目だ・古語に

(一)依賴心は人を殺す　ともあり又

(二)他人によりて立つものは倒れ易し　ともあり又

(三)汝・自ら助けよ・然るときは神・汝を助く

Hilf dir selbst, so hilft dir Gott !

ともあり・更に又ルードウイヒ・ボルネは

(四)神は懶惰者と臆病者とに其の力を假さぬ・のみならず神は彼等を見捨る・汝・自ら助くるならば天は汝を助けるであらう

Dem Trägen und Feigen aber leicht Gott nicht seine Kraft, sondern er verlässt ihn. Hilf dir selbst, dann wird dir der Himmel helfen ! Ludw. Börne.

と言ふておいた・のみならず文豪シルレルも

(五)自分自身で扶助するより外に正當の防禦はない

Ein rechter Schütze hilft sich selbst. Friedr. von Schiller, Wilh. Tell (1804)

と言ふておいた・以て自助の大切なるを知り・而して人に他依することの正しからざることを悟るが宜しい

然も世の中には・體格の一人前となつたもので尙且つ親の脛(スネ)をかじり・兄貴の脛をかじり・甚しきは姉や妹の脛をかじるものが少くない・社會制度に缺陷もあるかも知れないが小學校の教育にも缺陷があるから・こんな事態にもなつたのであらうと思はる・ボルネやシルレルや福澤先生の樣な人を呼び起して社會改良に當つて戴かなくてはなるまい

伊藤圭介と申された先生は理學博士の一番最初のお方で吾々の二十歳頃・九十歳程の高齢で活動して

ゐられたお方である・書物も澤山に著はされたお方である・此の先生の遺訓といふものがある左に掲げて獨立自活の人の心得に提供する・曰く

（一）神を敬し（二）上を尊み（三）御布告を守り（四）親に孝行（五）主人に忠義正直（六）師恩を忘れず（七）人に交るには信實溫和にして虛言を言はず（八）早く起きて職業に出精し（九）家内睦じく耐忍慈悲を旨とし（十）大酒大食を戒め（十一）儉約養生して身體を强壯ならしめ家の繁榮を樂むべし（十二）この戒を毎朝一度づつ唱ふべし・これ我家の遺訓にして生涯の祈禱なり（以上）

要するに此の訓誡を服膺して・毎日働らき稼げば貧窮にも困窮にも陷ゆることは無いと思ふ・が・然し人の運命といふものは測り難きものであるから・若しも逆境に陷つたら・其れは其の人の前世の業因の惡しかりしものと諦らめて・再起を計るべし

〔ば〕莫迦と悧巧の話

獨逸の名高い文豪ゲエテは其の著ファウストの中で

Alt wird man wohl, wer aber klug?

Joh. Wolfg. von Goethe, Faust II. (1831)

（人は年を拾ふが然し誰れが悧巧になるか）

とかいておいたそうだ・筆者は七八年前此の語を畫仙紙に横に毛筆でかき扁額に表裝させて・自分の家の應接間に掛けたのである・横文字の額は恐らく是れが嚆矢であらう・ついでだから書きつけるが・筆者は恩師長井長義先生から Arbeit ist Gebet. といふ格言を敎へて戴き此の語を同じく畫仙紙にかいて扁額に表裝し笹塚の明治藥專の一室に掛けて自分の守本尊として震災の復興事業に努力したのであつたが・此の額は今は野澤町の明治藥專の一室に掛けてある

所でゲエテが言ふた通り・年は拾つても人間は・どうも悧巧にはならぬ樣である・もちろん狡猾（コス）くもなり・横著にもなるのは確實（タシカ）だが・悧巧にはならぬらしい・否・年を拾ふ程馬鹿になる樣子が見ゆるのである・獨逸の俚諺に

Unnütze Klugheit ist doppelte Thorheit.

（無用な悧巧は二倍の馬鹿だ）

といふのがある・醫學博士で少女を强姦して・社會から沒落したり・藥學博士で請負商人の妻を姦し・其れが原因で官職を投出し・學海の陰處にかくれて此の世を去つた・などいふのを見れば二倍以上の馬鹿であらう・人間の馬鹿になるのは・欲が原因である・所で子供の時は欲がなくて無邪氣なるが故悧巧なれど・年を拾ふに從ひ・色氣も增長し利欲も增長し・名譽慾も增長するので・さては馬鹿になるのである・人間の一切の失敗は慾が原因となつてゐる・餌も餌差（エサ）のために釣上げられるのである・慾の

怖ろしいことを悟るがいい
所で此の怖ろしいことを悟らぬ馬鹿が本當の痴呆(バカ)より遙かに多いのには聊か閉口せざるを得ぬ
是れは日本ばかりではない・世界到る處然りであるらしい・諺に
　搖籃から愚人を投げ出す
　Narren wirft man aus der Wiege.
といふのがある・生れて來るものは皆馬鹿だといふ意味だらう・少し無理な言ひ方の樣だが・兎に角馬鹿は多いに相違ない・西洋にも
　(一)馬鹿がパンを食はないなら麥は大變安價(ヤス)くならう　といふのがあり
　(二)馬鹿が脚痛をやんだら・ダンスホールは空(カラ)になるだらう
といふのがある・ダンスホールに出入する奴(ヤッ)は大概馬鹿ものだといふ意味である・是れは筆者の作りごとではない・蓋し此の如く馬鹿の多いのは・人間に雷同性があつて一人の馬鹿が多くの馬鹿を作るからである・ソラ火事だといへば消防夫たるものでない人間が「ワッショ」「ワッショ」と叫びながら驅けて行く・是れを見ても馬鹿の多いのが直ぐ判知し得る・教育の事業も格外に進んだ樣だが馬鹿の減少せぬのを見て見れば・教育に缺陷のあるのが想像し得らるるのである・西洋の俚諺に
　Ein Narr macht zehn Narren, aber tausend Kluge noch keinen Kluge.
(一人の馬鹿は十人の馬鹿を作るが千人の賢者は一人の賢者を作らぬ)
といふのがある・悧巧な人間は極めて作り難く・そして馬鹿な人間は馬鹿でも容易に作り得ると言ふ意味だらう・學校の先生が殘らず悧巧でも悧巧な人間は容易に作り得られぬのに・學校の先生が皆馬鹿であるから・世間に馬鹿が多いのであらう・政治家は此の方面にも力を入れたらどうか??
白花の梅は幾年經過しても紅花をつけず紅花の梅は幾年經過しても白花の梅とはならぬ・是れを「萬物の個性」といふ・人間の馬鹿も人間の「個性」か知らん・個性らしく見える處がある・此の考へを西洋人も言ひ表はしてゐる曰く
　Ein Narr ist ein Narr und bleibt ein Narr.
　(愚物は愚物であり・そしていつまでも愚物だ)
卽ち馬鹿はいつまでも馬鹿で名醫でも聖人でも治療は出來ぬらしい・聖人孔子も晝寢してゐる宰予といふ馬鹿者には愛想を盡(ツカ)されたらしい・晝寢したり朝寢したり・して得意になつてゐる馬鹿が・大學の學生などに幾らもある・が・其の學生は自分程悧巧なものは無い樣に心得てゐる・これは日本ばかりぢやない・西洋にも有るから・彼れにも
　Mag er auch seine Thorheit unter dem ernsthaftesten Gesicht verbergen.
　(馬鹿は其の愚を又眞面目くさつた顏の下に隱くす)

といふ俚諺がある・サロモンの箴言(27. 22)に

Wenn du den Narren im Mörser zerstiessest, so liesse doch seine Narrheit nicht von ihm.

(汝は馬鹿を臼に入れて搗き潰しても其の愚を馬鹿から洗ひ去れぬ)

とかいてある「馬鹿に附ける藥もなし」で・馬鹿はどうしても・馬鹿で・腐つた壁の如きもので人間を作り直さねば・改良は出來ぬものらしい

筆者は自分ながら自分の馬鹿に愛想をつかしてゐる・上手な事を言はれると直ぐ其の話しに惚れて澤山にもない財布の金を借してやつて・其のまゝ猫ババされて仕舞つたことが一再でない・蓋し人の心の中を察知するだけの智慧がないからである・佛敎で四智といふことが言はれてゐる・其の四つの中の一つ「妙觀察智」といふものが缺如してゐるので自分は時々人に瞞着されるのである・此の自分の馬鹿は幾遍後悔しても洗ひ去ることが出來なくて・とうとう七十八歳になつたのである・或時山川といふ男が遊びに來た・いつも來て大きな法螺を吹く男だが・此の日は「親孝行」の趣意を神妙に話して聞かせたので我々老夫婦はすつかり惚れ込んで仕舞つた上に酒も出して・もてなした・所が段々相槌打つて調子を合せてゐる中に

五拾圓ばかり・ちよつと貸して下さいませんか

といふたから・信用するともなく・五拾圓貸してやつた・それが今より二十年程以前の事だが・其の後其男・一度も顏を見せない・噂さによれば支那の青島あたりで死んだらしい・が・其れは氣の毒として・ともかく我々老夫婦は馬鹿であつたから・こんな事になつたのである・智慧のある・眼光の鋭(スルド)い人なら

此の野郎・柄にもない・甘味(ウマ)いことを言(イ)つちよる・なにか魂膽があるに相違ない・油斷は出來ぬぞ

と心の中に用心もする・ことであらうに・自分等老夫婦は全く馬鹿にされたのである

親切を聽かせてくれる男に氣をゆるすな

といふ俗語がある・財產のある後家さんや年增は・大抵此の手で男に食はれるのである

Jeder Narr ist seines Vortheils gescheit.

(馬鹿はだれでも其の利益のためには悧巧である)

といふ俚諺がある・損得に掛けては馬鹿でも・仲々に悧巧なもので

斯樣な儲け口がある・どうだい

と持込まれると・大抵乘り込むものである・明治二十二三年頃かと記憶してゐる・仙臺に一人の金持があつて・其の金持が或る日・自分の下宿に尋ねて來て

青根(地名)の方に石油の出る川がありますが・あれから石油がたやすく採れるものでせうか

と問ひたづねるから

石油といふものは・原油といふ・眞黑なものを蒸餾して取るもので流れ河の水の上に・流れて來るものでない・それは多分・君をだまして金を騙取する手段に相違ない・河上に石油罐が・埋めてあるに違ひない・其の男に案内させて・其の河上を探檢して見玉へ石油罐が必ず埋めて在るだらう

と・說いて敎へてかへしたら・其後十五日程經過して・件の金持又尋ねて來て

貴官(アナタ)のお話しにより河上探檢を申し出しましたら・其の男・言(ゲン)を左右に托し・話を中止し・かへり去りまして・今以て顏を見せません・貴官の仰せの通り・今少しで騙(ダマ)される處でありました

云々と言ふて金持は喜んだのである・以て騙されるのは妙觀察智のないためだといふことを悟るがいい・西洋の俚諺に

Er ist ein Narr, wenn er gleich ein Stube voll Golds hätte.

(たとへ金の一杯な部屋を持つてゐても彼れは一個の馬鹿である)

といふのがある・仙臺の金持は確(タシカ)に一個の馬鹿であつた・所が其の金持自身では馬鹿だとは自覺せぬ・ばかりでなく・寧ろ資產を鼻に掛けて悧巧振(ブ)つてゐたのであつたが・五十年近くを經過した今日(昭和十三月四月三日)噂さを聞いて見れば・其の金持は二三十年前に潰れたといふことである

「馬鹿は三代目に無くなる」とは此のことであらう・日本外史のやうな立派な本なら・三代が八代の後までも存在權を失はぬが・其の他のものは三代も經(ヘ)れば皆無くなるものである・といふことを悟れば其の人は卽ち悧巧な人となるのである

大體から見て悧巧と言はれる人も其の實は・一分の馬鹿である・風俗文集といふ本に

智あるものは・智に倒され・藝あるものは藝に倒さる

とかいてあるそうだ・倒されるのは已に馬鹿たる證據である・西洋の俚諺に

Mancher will kein Narr sein, ob er schon Funken der Narrheit um sich wirft.

(馬鹿たる火花を其の身から已に投げ出してゐながら・馬鹿たることを欲せぬ人が多くある)

といふのがある・悧巧らしい顏して得々たるは・馬鹿の火花を放つてゐるのである・然も馬鹿野郎と呼ばるれば立腹する人が多い・是れは馬鹿の上塗りといふものである・抑も悧巧と馬鹿との區別は要するに損得と利害とを認識すると・せぬとに有つて存するらしい・と我輩は思ふてゐる・卽ち

(一)酒・呑んで金遣ひするのは無益なことで損たることを知れば其の人は悧巧な人なのである

(二)入費を掛けて村會議員や町會議員に出かけるのは・光陰を無益に送ることで・人生の目的達成に少しも利するなきことを知れば其の人は悧巧な人なのである

(三)代議士選擧に競爭するは所謂る爭ひを好むもので聖人の忌む所であることを知り且つ名譽慾の奴隷と言はれんことを怖れて・左樣なつまらぬ邪念を去る人は悧巧な人である

(四)其の他色慾や金錢慾などのつまらぬ慾たることを知つて自戒する人は悧巧な人なのである

所で世の中は馬鹿が多くて悧巧が少ない・此の故に馬鹿を嫌へば此の婆婆には居られない・西洋の人も

Wer nicht will ein Narr mit sein, der bleibe allein

(馬鹿と一緒に居るを欲せぬ人は結局孤獨たらん)

と言ふて嘆息したのであるが・そこが佛敎の所謂る

和光同塵

の要旨をよく理解し・慈悲の心で此の婆婆を送らねばならぬ・前章の「地藏樣の話」を繰りかへして讀むべきである・然し衆生濟度が成佛の正因だといふても衆生は無量無數であり從つて馬鹿も無量無數であつて到底濟度し盡くせるものでない・のみならず・我が子の馬鹿でさい・濟度は致しかねるものである・西洋の俚諺にも

Bei einem Narren richtet man nichts aus, weder mit Bitten, noch mit Dräuen.

(馬鹿程・手においぬものはない・賴んでも聽き入れず・脅迫しても聽き入れない)

といふのがある・或人の子供で學業に怠り落第したものがある・其の父親が憤慨して其の子供を切諫し遂には折檻も仕たのであるが・是れは父親に勸辨が無いといふもので・子供と共に一種の馬鹿たるに相違ない・世に「不肖の子」といふ言葉がある・不肖の義に就ては「悧巧な親の馬鹿息子を不肖の子」といふ說もあり又「人は天の生ずる所なり・其の天に似ないのが不肖の子だ」といふ說もあるが兎に角・落第する子も「不才の人」であり切諫する親も「不才の人」で共に不肖な人なのである・蓋し落第せる子供は確かに不才の子で馬ならば所謂る駑馬なのである・駑馬は幾ら鞭を當ても・駿馬を逐ひ越すことは出來ない・切諫や折檻で其の本性は改良されるものでない・然らば如何にすべきやといふに其れは親子（ヲヤコ）の因緣(インネン)が惡るかつたものとして・諦(アキラ)めて自然に死ぬまで愛情を盡して養ふより外に善い方便はない・父たり母たるものが其の馬鹿な子を特に目をかけて愛育する・其れが本當の親の慈悲といふものである・此の慈悲心のない親は我慾の奴隷で其の子と同樣・一種の馬鹿である・獨逸國では斯樣な馬鹿を大馬鹿 Grosser Narr といひ日本では大馬鹿三太郎ともいひ又略して單に馬鹿太郎ともいふ・此の馬鹿があるので悧巧も目につくのである・英語に

Were there no fools there would be no wise men.

といふのがある・是れは獨逸語の

Gäb es keine Narren, so gäbe es keine Weisen.

を譯したものである・馬鹿がゐなければ悧巧もゐないといふことである・何事も世の中は相對的のもの

である・但し悧巧ばかり世の中にゐたら・鳶や烏の世界と同じく・進化もなければ文化もなく・金持もなければ貧乏人もなく・張り合ひのない世界となるであらう・悧巧と馬鹿があるので・此の世界は面白いのである

〔び〕貧乏と健康の話

獨逸の七百年程以前の書物に

　總ての人の心が同じであつたら貧乏も金持もあるまい

　Waer aller liute sin gleich,/So waere nieman arm noch rich.

とかいてあるそうだ・横文字は其の頃の書きかたである・今の獨逸文から見たら「古文」とでも言ふものであらう・これを今の獨逸文でかけば

　Wenn aller Leute Sinn wär' gleich,/So wäre niemand arm noch reich.

となるそうだ・兎に角人間の心が雀や烏の様に皆同じであつたら貧乏人も金持も無いに相違ないが幸に人間には殘らず・違つた心があるので大同團結は出來るが・完全に一身同體となることは出來ない・從つて貧富の差別のあるのは當然であり・從つて又共產 Gütergemeinschaft といふ意味の主義なぞも成立するものでないことも明瞭するのである・が・然し貧乏ほどつらいものは無い・筆者は幸に病氣を持たぬので・病苦といふものを・明瞭に認知せぬが・貧苦だけは恐らく人一倍に認知してゐるだらうと思ふ・謠曲「千引」に

　げにや世の中に・貧ほど悲しきことはなし云々

とかいてあるそうだが・確かに・それに相違ない・然し古語に「貧乏は達者の基」とある・筆者は此の古語を確實に經驗してゐる「韓詩外傳」といふ本には

　貧賤・以て人に驕るべし・志・得ざれば則ち履を投じて而して適(ユ)く秦(の邦)楚(の邦)安(イヅク)に往つて而して貧賤を得ざらんや

とかいてある・金持になるのは難(ムツカ)しいが貧賤たることは極めて容易(タヤ)すい事である・金持になるには・朝起きもせねばならず・田の草も取らねばならず・そしてお世辭を言ひつゝ貧乏人を使役せねばならぬ言はゞ頗る氣苦勞なものである・之に反し貧乏人は「貧者の夕張」と言はれてゐる通り・晏眠することも出來・呑氣に青空・眺めつゝ烟草を吹かしてゐることも出來・そして世間の人に遠慮する必要もなく・みえを飾つてひかへめにする樣な僞善をする必要もない・言はゞ貧乏人程・氣樂なものは他に決してない・のである

潛夫論には「禮儀は富足に生じ・盜竊は貧窮に起る」とかいてあるそうだ・如何にも左樣であらう然し禮儀なんてものは一種の裝飾に過ぎぬもので天眞爛漫な行爲ではない・のみならず明心寶鑑には「飽煖・

淫慾を思ふ」とかいてあるそうだ・實際の世相を見れば世間の惡事・然も重大な惡事は大概富裕な人間の仕事であり・貧乏人の爲す惡事は蓋し泥棒ぐらゐなものである他(ヒト)の國を盜む樣な大盜は・貧窮からは決して現はれぬ・之れに反し「貧は菩提の種」とも言はれ又「貧は世界の福の神」とも言はれてゐる・偉人傑士は概して貧家より出てゐるではないか?? 集義和書に「貧は人に奮發心を起さしむ」とかいてある・卽ち奮發心を起して學問や藝術を研究する・其處に偉大な發明も現はれて來るのである・貧は世界の福の神に相違ない・筆者はいつも「貧なるかな・貧なるかな」を口誦(クチズサン)でゐる・金持は惡人の親方で人生の眞意義から見れば「人道の賊」とも言ふべきものである「一言芳談」といふ本にも

富は輪廻の絆(キヅナ)夜々に惡業を益す

とかいてあるそうだ・待合などに這入り込むものは貧乏人ではなくて金持に限り・九龍蟲などを飼育して淫慾を擅に激發した張作霖の振舞などを想像すれば蓋し思ひ半に過ぐるであらう・但し貧乏人にも亦一面の惱みがある・犬や猫にも嫌はれ・そして知己朋友にも乏しく・快談浩唱の樂みもないのである・五燈會元といふ本には

人・貧すれば志・短く馬・瘦せれば毛・長し

とかいてあり・そして西洋の俚諺にも

Where honour ceaseth, there knowledge decreaseth

(光榮が終るとき・名譽もなくなり知慧もへる)

といふのがある・「貧すりや鈍する」とは此の事である・貧乏すれば人間は大概馬鹿になり・愚物化する樣である巨樽を横にして其の內に住んでゐたギリシャのヂオゲネスの樣な貧傑士は蓋し少ないであらう・Barth. Heinr. Brockes といふ人の言葉に

Der Narr lebt arm, um reich zu sterben.

(愚者は富んで死ぬために貧しく暮らす)

といふのがある・愚者の心持は・こんなものであらう・金を溜めて死んで見たい・位が愚者の希望であらう・こんなつまらぬ希望で暮らす愚者は氣の毒だ然し富者の如く惡事を爲さぬ故・菩提の種を蒔いて極樂淨土へは往くことが出來るのである　見玉へ貧乏人の子供には立派な人があるに反し祐福な人の子供には破產宣告を受ける樣な馬鹿も現はれて來るではないか・文豪ゲーテは

Arm am Beutel, krank am Herzen.

(財布が貧しくなれば心が病む)

といふたが・是れは事實である・財布を膨脹(フクラ)ませて觀光に出かけるときは・勇ましく愉快も覺え元氣も盛んだが段々旅行を續けて財布が瘦せて來(ク)ると心持も段々腐つて憂鬱となるではないか?? 浮世の旅(タビ)も同じことである・が・然し眞理から言へば金錢の多少で貧富の區別は論じられ

ぬ・聖書にも「心の貧しきものは福(サイハヒ)なり」とからてある C. E. K. G. von Bentzel-Sternau の言葉に

Nur der ist wahrhaft arm, der weder Geist und noch Kraft hat.

(精神も持たず又力をも持たぬ人が本當の貧乏人である)

といふのがある・人は達者で精神と氣力とを持つて居れば・金錢など一錢一厘だも必要はない或人は筆者に

本當の傑人は他人の金を遣ふものだ

と言ふて聽かせたが・是れは確かに眞理である・株式會社を設立する樣な男は大概・人一倍に勝れてゐる・自分に金を持つてゐる樣な男は・決して大きな事を爲し得ぬものである・他人の金を借りて・其れを運轉して利益を收め・其の利益の中から・配當を受け取り・其れで妻子を養ふ是れが卽ち「人一倍勝れた人」と言ふのであり・金を其の人に預けて・安い利子を貰つて生活する樣な男は二流三流の人である

最近筆者の門人で素寒貧の一人が

低溫低壓でコオルタアからガソリンを造る法

を發明し特許を得て其の法を金持に七萬圓で賣り其の內・五萬を出資し・其の金持に拾萬圓出させ・株式會社を組織し・自分は其の會社の技師長となつて事業を始めたのである・是れが他人(ヒト)の金を利用した一例である

又一人の素寒貧は金持に「北支の利源」多きを說明し其の金持に五萬圓出して貰ひ・其れを持つて北支から山西方面に出かけ利源の研究に着手したのであるが・まだ其の結果は見えて來(コ)ない蓋し金持が素寒貧に金を出して遣(ヤ)る・其の關係は甚だ面白いのである卽ち金持は金は有が利源を搜す智慧がない之に反し素寒貧は智慧はあるが・金はない・そこで金持は素寒貧の智慧を信じて金を出したのである・素寒貧の金持より勝れてゐることが判る世に財閥といふものがある・金を山程所持してゐるものなのである・此の財閥の金を引出して・大きな仕事を爲(ス)る男が世の所謂る大政治家である・政友會全盛時代に横田千之助といふた人がゐた・此の智慧者などは金持を利用した好適例である

金がなくて苦るしむ樣なものは・智慧のない愚物で論外であるが・金を澤山貯蓄して・其れを死守するものも亦愚物で論外である・要は智慧を貯えて・其の智慧で愚物の搔き集めた金を利用する・其れが巧妙な手段で貧とか富とかは問題でない・が・人生に於て何によりも大切な資本(タカラ)は健康である

Joh. Heinr. Voss の全集中にも

Gesund an Leib und Seele sein,
Das ist der Quell des Lebens.

(身心の健全は人生の源泉なり)

とかいてあるそうだ・言ひかゆれば「病氣のないことが人生のあらゆる幸福の源泉だ」といふことになり・更に言ひかゆれば「病氣するほど・詰(ッマ)らぬことはない」といふことになる・從つて「病者ほど氣の毒なものはない」とも言ひ得るのである・所で「病氣は慾のかたまり」であるから・社會を指導する人は

虛無恬澹・精神內守・百病不生

の理を徹底的に認識して・これを宣傳し・由て以て社會から疾病を驅逐せねばならぬ

ヨハン・グローヴは

Gesund an leib und wol zu muht,
Ist doch der beste schaz. Joh. Grob.

(肉身の健康と神氣の安寧なるとは洵に最良の資產である)

といふてゐた・そして・ヨハン・ヘルマンといふ人は毎日・神に

私に健全な肉體を與へ給へ・そして斯樣な肉體中に無疵な精神と純眞な良心とを存在せしめ給へ

Gesunden Leib gieb mir, und dass in solchem Leib,/ein unverletzte Seel und rein Gewissen bleib ! Joh. Herrmann.

といふ祈禱を捧げたといふことである・我輩は修驗者などの御祈禱はどんなことを唱へるのか知つて居らんが・此のヘルマンの祈禱文などは確かに善い文句である・お互に每朝三遍づゝ唱ひ玉へ・唱へる文句が御利益の原因ではなく・自分の心が御祈禱により・自然に集中し・そして自然に慾念が薄くなり・病氣が消滅して肉身が健全となり・精神までが健全となるのである蓋し神信心やお寺參ゐりの人々の達者になるのは此の理である・昔し英國に・名は忘れたが・門前に市をなした一人の醫者があつた・此の醫者は・其の來訪する病者にお寺參ゐりを勸めて大へんに病人を健康ならしめたので有名な醫者となつたのである・身延の七面山へ參詣するとか・紀州の高野山へ參詣する・なんてことは・七面山や高野山の神佛が御利益の原因ではなくて・運動しつゝ新鮮な「オゾン」の多い空氣を吸ふので肉身が丈夫になるのである・所で昨今は高尾山や愛宕山までにケーブルが設置されたので・料金さへ出せば汗も出さずに登ることが出來るので登山しても御參りしても・健康上には何等益するところがない・是れが卽ち文明が人間を弱くする一例である・明治維新前は信州邊で「伊勢の大神宮へお參りすれば身體が大へんに丈夫になる」と言ひ傳へられてゐたので・少し路銀の都合つくものは・仲間を誘引(サソ)い合せて伊勢參りしたのである・六七十日間・山を登り谷を降り・船に乘り馬に騎り浮世の辛苦を忘れて旅行するので肉身が丈夫になるのである・今はどこへ行くにも汽車や自動車で行くから肉身は弱くなるばかりでなく・却つて病氣などを背負てかへるのである「體位低下」の原因も蓋し此の邊に存在するであらう

健全な精神は健全な身體に舍(ヤド)る・といふ格言は有名なもので今日では・普通の雜談にまで・混(マ)ぜて用ゐらるゝ程のものだが・其の由來を知つてゐる人は甚だ少ない樣だ・蓋し此の格言は西洋紀元後百十七年頃に死んだ人で D. J. Juvrenalis と呼ばれた人が言ふたもので羅甸語では

Mens sana in corpore sano.

とかき・獨逸のウエベルといふ人が之を

Gesunde Seele in gesundem Körper.

と譯したのである・日本の書物に此の格言の見えたのは明治九年頃かと思ふ・所で健全な身體といふものは・文豪ゲエテの言ふた通り病氣のない人のことであるが・其の病氣のない人といふものは世界十七億の人間中・恐らくは百人とあるまい・從つて世界の人類は殘らず不健全な精神の持主といふべきであらう・世間が段々惡化するのも無理ではなからう・希臘の文豪プルタルク Plutarch (um 50-120) も亦

健康は何物よりもすぐれた・そして最も愉快な藥味である

Die allervortrefflichste und angehmste Würze ist die Gesundheit. Übers. v. Eyth.

(Diätetik, K. 8)

と述べたのである・どんな美味(ウマイ)ものでも・不健康な人の喉には下らない・之れに反し・薩摩芋や馬鈴薯乃至鰯や鰌の如き粗末な食物でも健全な人に取りては非常に美味に感じられて格別な滋養料たるの價値を持てゐるのである・從つて斯樣な人には醫者の必要がない・新約聖書路加傳第五章三十一節に

康强(スコヤカ)なる者は醫者の助を需めず

とかいてある全く其の通り醫者は不必要(イラナ)い・斯樣な生活程・愉快な生活はない・西洋の俚諺に

(一)健康な身體に比すべき富は一つもない

Es ist kein Reichtum zu vergleichen einem gesunden Leibe.

といふのがあり又

(二)健康と清朗とは黃金より善きことである

Gesund und frisch sein ist besser denn Gold.

といふのがあり・そして

(三)人は病氣になつたとき始めて健康の價値を知る

Gesundheit schätzt man erst, wenn man krank wird.

とも言はれてある・宋代の大儒蘇東坡先生は

病は少愈に怠る

と申しておかれたから・病氣に罹つたときは一刻も早く治療を加へそして輕快したからとて油斷せずに治療を加へ・以て完全な健康を期待せねばならぬ・辛抱の大切はベットの上にあることを能く能く記銘すべし

〔ぶ〕 文明開化と野蠻の話

筆者の十二三歳頃・北信の松代・須坂・善光寺邊に

（一）ちよん髷・頭を叩いて見れば因循姑息の音（ヲト）がする

（二）散切（ザンギリ）頭を叩いて見れば文明開化の音がする

といふ俚謠（ハヤリウタ）が盛んに歌はれたのである・此の俚謠のため筆者の母も世間並に筆者のちよん髷を或日の朝・屋敷内の鎮守様へ水杯を供へて・其の神様の前で鋏でザクザクと切り取つて白紙に載せ神前に供へ同時に大小（刀と脇差）を鄭寧に黄木綿の袱紗に包み打紐にて締め土藏の佛壇の下に納めたのである・是れが明治五六年の頃と思ふ・かくて吾輩は士族の格を失ひ丸腰となり・散切り頭で歸農し桑園麥作などの仕事に從事せねばならぬことになつたのである・筆者の親父は戊辰の役に官軍として從軍もし賞典も頂戴した騎士（リッテル）であつたのに・今は廢刀令が出て丸腰になつたのを殘念がり

世がかはり・弓箭とる手に・鎌を持ち・
歸農せんとは・思はざりけり

といふ和歌をよみ・そして我々にも讀きかせてくれたので・母や姉は涙さへ出して浮世の變遷の劇しきをかこつたのである・所が此の劇變が文明開化の轉機で・王政復古・維新皇謨が隆々として進み日清日露の戰役を完了し遂に今や世界の檜舞臺に活躍する・有がたい發展振りの日本となつたのである・が・然し眞正な文明開化といはるべき位置まで進んで來たかどうか自治制が布かれて滿五十年の記念式も昨十七日（昭和十三年四月）宮城前の廣場で擧行せられ　天皇陛下の御親臨もあり優渥なる勅語まで降し賜はつた樣な目出たい事も拜觀する樣な御治世となつたには相違ないが是れが眞正な文明開化といはるべきものであらうか・どうか・疑ひなきを得ぬのである

抑も文明開化なる言葉は西洋の Zivilisation（シビリゼーション）を譯したもので福澤先生の「文明論之概略」などによつて宣傳せられたものであるが蓋し此のシビリゼーションなる言葉は羅甸語の「城廓內の住民」といふ意味の文字 civis から由來したもので城廓外の農民樵夫などの生活狀態に對し城廓內の住民の生活狀態が遙かに閑雅優美である所を指して言ふた言葉であるから・たいして稱揚すべきものではない・否・寧ろ文明開化は輕佻浮薄の四文字に代へて考察すべきものであらう・西洋には此のシビリゼションに並行して Cultivation（カルチベーション）といふ文字が用ゐられてゐるが獨逸では

シビリゼーションを die Verfeinerung（優美化）と譯し・カルチベーションを die Verbesserung（善良化）と譯してゐるから・文明開化といふことは優美善良の四文字に代へて然るべきであらう・所で實際は文化するに從ひ人間が益々輕佻となり浮薄となり横着となり狡猾となり・惰弱となり無氣力となる樣な傾向を持てゐるから巴里や龍敦の如き文明開化は決して望むべきものでないバルバレイ Barbarei の暴虐やウイルドハイト Wildheit の野獸性は固より避くべきであるが・ネヲンサインで不夜城化した都制市や商業府も亦宜しく避くべきである・昨今我が爆彈の見舞を受けてゐる陝西省の主都西安（シーアン）は唐の玄宗皇帝の居城であつたことは中學校の生徒でも能く承知してゐる處だが二三年前我輩の實見した西安は長安時代の城壁が悉く荒れて・城内には牧牛場もあれば桑田も麥隴も澤山ある・のみならず・一流の旅館「花園飯館」なんてものも其の規模結構は北海道の片隅で見る旅館に彷彿したものであつた「長安の大道・直くして砥の如し」と歌はれた帝都の一千年後の今日の姿を見て見るとき・ネヲンサインの不夜城の一千年後の姿が惜まれざるを得ないのである・大臣を勤めて昭和十三年の二月物故された山本悌二郎（二峯）先生が曾て或人に與へられた扁額の語に「居盈思缺」といふものがあつた・千年前の長安は文明開化の滿盈時代であり千年後の西安の今日の文化は正に虧缺時代に這入つてゐるのである・凡そ學問するものは「長安から西安への歴史」などをば最も能く研究せんければならぬ・大西郷は曾て「大人は達觀す」と言ふて遺しておいたが現代に此の如き大人・いづれにか在るや噫・

瑞西ゲンフ大學の教授で文士たる「アミイル」Henri Frédéric Amiel（1821–1881）は曾て

（一）文明は大都市が其空氣を腐敗させる如（ヤウ）に人間を腐敗させる

Civilisation tends to corrupt men, as large towns vitiate the air.

といひ又

（二）一方に社會の進歩あると共に精神の墮落あり

A progres of society on the one hand a decline of souls on the other.

といふたそうだ・是れによりても「文化のため人間が輕佻浮薄に流れる」と斷言した我輩の言葉の正しきを知るがいい

亞米利加著名の說教家ヘンリイ・ワアド・ビイチャア Henry Ward Beecher（1813–1887）は曾て

文明は感情生活や物質生活の退歩と同時に社會的並に道德的生活の進化を意味する

Civilisation means the recession of passional and material life, and the development of social and moral life.

といふたそうだ・成る程・餘り感情に走つたり物質欲に捕はれるのは善くないことであり・そして社會的義務の確信や人倫五常の道に立脚して人生を送るが如き確信の增上は・洵に善いことでありそして感情や物質欲を退けて共存共榮の義務や道德的意識を增强することは・文明開化の基礎であるに相違

ない論語に「文質彬彬然る後・君子」とかいてある斯樣な君子ばかりから社會が組成されたらば・其の社會は「どんなに立派であらうぞ」と言はるるであらう

英國の詩人で批評家たるアアノルド Matthew Arnold (1821-1881) は

文化は爽快と光明とに對する熱情であり同時に此の二者を押し廣めんとする熱情とである

Culture is the passion for sweetness and light, and the passion for making them prevail.

と言ふたのである・爽快と光明とは蓋し文明開化の特徴であるには相違ないが然しネヲンサインの如き外面的の光明は眞の文明ではなく又飛行機で箱根の山を越へ夏の暑い頃・射駒山の隧道を電車で走るが如きことは爽快には相違ないが・是れだけを以て文明といひ開化とは稱すべきでない・亞米利加の哲學者兼詩人で名高い Emerson (1803-1882) は

文明は道德に依つて立つ

Civilisation depends on morality.

といふたそうだ・至言と言ふべきだ・が・然し今日の歐米の文明は果して道德に立脚してゐるかどうか?? 白晝夜陰樹下の芝草の上に男女の二體の重なつてゐるが如き淫穢俗惡の醜態を各處の公園の處々に發見するが如き風俗は正に是れ野蠻行爲ではないか・道德なんてもの・どこにあるか・聞くところに依れば米國の大都市シカゴでは毎日三十人宛殺人事件が現はれてゐるといふ人口が世界の大都市を凌駕してゐるにもせよ・一箇年約一萬の殺人事件があるとせば・決して文明開化の都市とは言はれない・亞米利加には立派な大學も澤山にあり・立派な孤兒院や養老院も澤山にあり・そしてキリスト敎の普及も頗る行渡つてゐると言はれてゐるのに尙且つ此の如き蠻的行爲の現はるゝのは何故であるか?? 知識に道德が缺けてゐるからである・文豪ゲエテは曾て

全世界を舐めた所の開化が又惡魔に波及した

Auch die Kultur, die alle Welt beleckt,

Hat auf den Teufel sich erstreckt.

といふた文意の眞髓は判讀しがたいが・巴里や倫敦に散在的賣淫婦の多きことや・亭主持の婦人の貞操の極めて輕薄なることや其の他・珈琲飯店などの給仕女の墮落事件などは所謂「文明の裏面」で開化が惡魔に波及したものであらう・思ふに此の如き惡風も今や我國の都市にも及ばんとしてゐる模樣である識者の一考再考を要すべし

凡そ世界の如何なる場面でも「カンプ」Kampf (鬪爭)といふことの絕えざることは事實の證明する處であつて・フランスの大政治家ギゾオ氏の文明論 Kulturgeschichte von Guizot (1787-1874)を讀まなくても理解の出來ることであらう・去ればにや・現世紀は東西文化の鬪爭時代となつてゐるのである・露西亞が共產主義を押し立て世界に臨んでゐるのも文化鬪爭 Kulturkampf の一鋭鋒であり・英米が大

艦巨砲主義で東洋に臨んでゐるのも文化闘爭の一鋭鋒であるのである・が・國勢といふものは

（一）勝つたものは一時・榮えて又衰い

（二）負けたものは一時・衰えて又奮起す

此の二つの原則に支配されてゐるものなるが故・國を治むる人は「不脅威・不侵略」の公道に從つて・衆庶を誘導するを必要とす・ナポレオン一世が歐洲を席捲せしが如き偉業は功業赫赫・讃歎すべき價値も有る樣に見ゆるが・實は衆庶の損害・測るべからざるものを伴ふのであるから・兵は凶器の古語に依り・防禦だけに使用し侵略のためには決して用ゐてはならぬのである・蓋し是れが日本の眞精神であるであらうと思ふ

左に文明的事項と野蠻的事項を對記して參考に供せん

文明的徴候	野蠻的徴候
人烟稠密	人烟稀少
中央	市外
耕地	野地
整理耕地	不整理耕地
市人	野人
美（人）	醜（婦）
善	惡
眞	僞
器用	不器用
上手	下手
悧巧	馬鹿
自由	束縛
白人	黑奴
鋪裝路	泥濘路
刀劍	鉈鎌
奉書紙	漉きかへし紙
清潔	不潔
精神勞働	筋肉勞働
鶯の聲	烏の聲
御殿の庭	農家の庭

圍のある屋敷
掃除の行屆いた庭
洗濯した奇麗な衣服
新らしい帽子
日本の小學校の校庭に遊ぶ子供
お姫様の御行列
お姫様の御手足
梳を入れた頭髪
あかるい部屋
通氣の良い家
人工を加へた器物
優美の姿
着衣の姿
日本人の用ゆる箸子
寢室の睡眠

圍のない屋敷
掃除の行屆かぬ庭
垢脂の染みた着物
古く破れた帽子
北京の羅馬寺の庭に群がる子供
廣告屋の行列
おさんどんの手と足
振り亂した上の毛
暗い部屋
通氣の惡るい家
素朴な器物
武骨な姿
裸體の姿
支那人の用ゆる快子
路傍・簷下の睡眠

清川を涉る鷺
鯛
鮎
馬の尻尾
晴
晝
春
生
生氣撥剌
喜
清
光明
新
慈悲
梅の花の匂

泥水に沈む水牛
おこせ
鮒
牛の尻尾
雨
夜
冬
死
氣息奄々
悲
濁
暗黑
古
殘忍
木犀の花の匂

井　水　　蒸　溜　水
芳　香　　悪　臭
纎細な綾錦　　粗笨過重な綿布
纎細な指　　粗大な指
淡　紅　　濃　紅
血色の鮮かな若い新妻　　血色の衰ひた皺多き老婆
釣合の良きもの　　釣合の不良なもの
（釣合の良い夫婦）　　（釣合のわるい夫婦）
（釣合の良い配置）　　（釣合のわるい配置）
新鮮な物　　陳舊な物
新築工場　　火事の燒跡
整頓　　不整頓
正色（青黄赤）　　補色（樺・綠・紺・紫）
電氣の陽極　　電氣の陰極
天　　地

乾　　坤
東　　西
南　　北
悧巧な主人　　馬鹿な主人

〔べ〕便毒と淋病の話

倫理學の中にソクラテース Socrates（469-399）の知德合一說といふものがある其の說に曰く

德を修めんとする者は先づ德の何たるかを認識せねばならぬ・眞知の存する所に德がないといふことはない・不德は無知から來る・人は元來よき事を欲する・よからぬ事と知つて・それを欲する者はない・故に德は知と同じである云々

これが知德合一說である・蓋し人の惡事を爲すのは・概して其惡行爲を眞に惡行爲なりと確實に認識せざるに因るものなりとす・筆者は酒の害を認識せざるが故に七十八歲の今日まで酒を禁するの意志を起したことがないが・三鞭酒 Champagne は或る機會に之を飲んで其の腰髓を强激に侵害することを確認して以來完全に三鞭酒の飲用を禁止してゐる・そしてソクラテースの倫理說の眞正なるを信じてゐるのである

凡そ病苦なるものは大小に拘はらず・總て苦痛なものであるが・便毒や痲病は精神と體力との强勢なるため苦痛の感覺は他の疾病よりも一層甚しいといふことである・が・然し便毒や痲病患者の多いのは蓋し其の病苦を確認せぬが故であらう・のみならず・便毒や痲病は花柳病とも言はれて一種の不品行病に屬するものであるのに・其の病氣の頻般に現出するのは・便毒や痲病の其の本當の害毒を認識せぬからで有るに相違ないと思ひ・さては茲に此の惡性有害の疾病を話すことにしたのである

聖人も「飲食男女は人の大慾なり」と仰せられた通り・飲み食ひすること丶男女の交りは其の欲求するや强勢にして殆んど防止し難きものなるが故・往々此の二つの欲求のため身を亡すに至ることあるは歎息に耐えぬ事である殊に

血氣・未だ定らず・之を戒むる・色に在り

と論語にも書いてある通り・二十歳頃より三十歳頃までは血氣が十分に安定せざるが故・酒色の二つには餘程注意して用心せんければならぬ・然も情慾の旺盛にまかせて勝手な行爲をなすときは痲毒や黴毒を受け入れて・爲めに不具の身となり・あたら生涯を無用の廢人で送らねばならぬことになるから・愼重の注意を酒色に拂はねばならぬ・アイヒホルス氏の內科全書にも

本病の患者は大抵未婚の男子殊に二十歳乃至三十歳に於て之を見・又旅人及び武人が本病に罹ること多きを見る云々

とかいてある・此の故に便毒と瘡病とは高等學校級の生徒や大學級の學生などに多く發見せらるゝものと言ふてよからう・所で此の惡疾は直接傳染性のものであるから・苟も痲病の氣味ありとすれば其の患者は如何に辯解するとも屹度花柳の巷(チマタ)に臥したか・乃至賣淫窟に臥したと斷定されても仕方がないのである・そして其れが學校當局者に知られ

品行不正

の廉を以て退學を命じられても致し方なき次第といふべきである・のみならず痲毒が身體各部の淋巴腺中に浸潤するときは・身體は忽ち血色を失ひ・倦怠を覺ゆる樣になり從つて記憶力が減弱し・學業成績の不良を將來して希望が中絕する樣になるのである・神經衰弱と稱する疾病は一名亞米利加病と稱し・生存競爭の激烈なのが其の原因だと言はれてゐるが・筆者の第六官に感ずる處では・此の神經衰弱も亦不品行の結果・痲毒の中毒であると言ひ得るのである

ゴノコッケンを含める痲病膿液をメチール青を以て染色せる乾燥標本・四百五十倍の一部(愛氏內科全書)

所で此の痲毒なるものは所謂る痲菌(ゴノコッケン) Gonococcen の製產物で水穀の氣に伴はれ全身の隅々まで行き渡るものであるから・或は神經痛の因となり或は「リョウマチ」の因ともなり・甚しきは腦病となりて十年も二十年も・永く病牀に臥す樣な悲慘狀態となることもあるのである・或る醫學博士の直話に依れば胃腸の疾患を除いて其の他のあらゆる疾病は概して淋毒の慢性全身中毒であるといふこ

とである

「ゴノコッケン」なるものは痳病卽ち膿漏性尿道炎 Urethritis blenorrhoica の患部膿液中に檢出せらるゝもので今より約六十年程以前(西紀一八七九年)に「ナイセル」といひる學者の發見したる分裂菌で培養して增殖させることの出來るものである・此の菌を含む膿液が手拭やハンケチに附着して居るのを知らず・其の手拭やハンケチで眼をこすれば忽ち痳毒性眼病となり・大概は盲目の結果に到るのであるから怖れて且つ恐れねばならぬものである

此の痳毒に罹つて所謂る痳病(俗に淋病とかく)となれば種々の合併症が起つて來るもので

(一)陰莖の勃起を誘發し易し

(二)陰莖の勃起に伴ふて劇痛を將來し

(三)情慾の亢進に責められて學業を怠り易し

(四)晝夜を限らず戀情の妄想に駈られて遺精し易し(是れ痳病にゴノロエの名ある所以なり・ゴノスはギリシヤ語で精液の義であり・ロエは流出の義である卽ち本當の名は精液漏流症 Samenfluss である)

(五)尿意の窘迫を來し尿液・絕へず滴瀝して不快に耐えず遂に醫療を求むるに至らしむ(是れ此の症を淋病と稱する所以である・淋は鮮血淋漓の淋である・ダラダラ・ダラダラと流れ出づるから獨逸語では是れをトリッペル Tripper (流れ出る症)と稱してゐる・甚だ不潔な疾病である・上古では此の病氣を天刑病と稱した・不品行に由つて受けた天罰であるといふ意味である

(六)尿道の周圍に炎症を起し遂には尿道瘻を遺すに至ることあり

(七)龜頭包皮炎を起すことあり

かくて陰莖の背側に在る所の淋巴管にも炎症を起し・其の炎症が恥骨の縫際に沿ふて進行し且つ鼠蹊線に疼痛性の急性腫脹を發するに至る・是れ卽ち便毒であり横痃と言はれ「ヨコネ」と言はるゝもので・外科的手術を受けねばならぬものである・斯樣に病勢が進んでは頗る重大な病症で・難儀はもちろん・苦痛も亦言語に絕つしたもので天刑の天刑たる所以を悟り病牀に呻吟せざるを得ぬのである・恐るべきは淋毒である・戒めざるべけんやぢやないか

此の痳病なるものは・愛氏の內科全書の記載に依れば・餘程古い昔しから有つた病氣で「モーセ」の書にも記載されてゐるといふから・不品行は人類の始めから有つたものと思はる・淫行は人類の特性とも言ふべきか嗟

〔ほ〕 煩惱卽菩提の話

涅槃經(四十卷又は三十六卷)といふお經がある・阿彌陀經や觀音經の樣に有がたい樣な意味のお經ぢ

やないが佛教哲理の眞髄を說いたものだから一讀する必要がある筆者は二十五六歲の頃一讀したが・大部分記憶に殘つてゐない・が唯一つ

煩惱卽菩提
生死卽涅槃

の二句だけは七十八歲の今日に至るまで一刻も忘れたことがない・以て如何に名句であるかを察し玉へ

所で此の涅槃といふ言葉が頗る難解のものであるため・普通一般の坊さんの說話では決して理解し得られるものでない・獨逸語の哲學字書には

Nirwâna, f. ind. im Buddhismus: die Abgezogenheit des Gemüts von allem Irdischen, seliges Selbstvergessen durch Versenkung in das Nichts

「無」の中へ沈入するに因りての幸福なる自己遺忘と・浮世の總てのものから心識の退嬰すること・とが涅槃である

と說明されてあり又日本の哲學字典には

涅槃は梵語 Nirvana の譯語で寂滅・圓寂・滅度・無爲などゝ譯する場合もある・小乘では三界の煩惱を斷ち切つて放心無爲に歸することをいひ・大乘では不生不滅の眞理で所謂善常の妙德を具へたる絕對的の理想のいひであり要するに生死の因果を離れて諸々の煩惱を滅すること卽ち解脫すること・圓滿寂滅の絕對境とを指して涅槃といふのである云々

と說明されてある・但し是れだけでは・說明が物足りなくて・吾々凡夫の心には呑込めないから・筆者獨特の說明を揭げて參考に供しよう曰く

人間の知識に上るものは大なり小なり必ず名稱が附けられてゐる・そして名の有るものは必ず相對的なものである・例へば親といへば子に對し・臣といへば君に對し・南といへば北に對し・右といへば左に對し・山といへば谷に對し・高いといへば低いに對し・大きいといへば・小さいに對し・美といへば醜に對し・善といへば惡に對するが如くである

從つて惡がなければ善もないことになり・醜がなければ美もないことになり・小がなければ大もないことになり・低いものがなければ高いものもないことになり・谷がなければ山もないことになり・左がなければ右もないことになり・北がなければ南もないことになり・君がなければ臣もないことになり・子がなければ親もないことにならざるを得ぬのである

所で名のあるものは・必ず一定のヂメンションを占有して一定區域內に限られたものである・水素は無色透明無味無臭だといはれても・護謨球か硝子製のチリンドルに納れなければ・其の存在を知ることが出來ぬ・存在の知れぬものは・有(ウ)とも言はれず無(ム)とも言はれぬものである・斯樣なものを佛教

家は「言語同斷」のものと稱してゐる

今水素瓦斯と鹽素瓦斯とを取り來りて・其の性狀を驗して見よ

(一)水素は無色透明無味無臭なれど・火を近くれば・無焰の光を以て燃燒する

(二)鹽素は黃綠色で刺戟性の臭があり火を近づけても燃えない

(三)所で此の二つの瓦斯を硝子管中に一處に入れて放置すれば二つの瓦斯は數時間の後・化合して鹽酸瓦斯と稱せらるゝ別種な瓦斯體に變ず此の鹽酸瓦斯には水素の燃ゆる性質もなく又鹽素の黃綠の色も存してゐない

(四)所で此の鹽酸の水に溶けたものに平流電氣を流せば一方の電極に鹽素瓦斯が現はれ他方の電極に水素瓦斯が出て來(ク)るのである

此の化學的實驗に就て鹽酸中に

(イ)水素ありといふか

(ロ)鹽素無しといふか

此の有りとも言はれず・無いとも言はれぬものが・卽ち言語同斷の涅槃(ニルバナ)靈氣なのである天地間はもちろん・宇宙全體の中に言語同斷の靈氣は充滿してゐる

といふのが我輩の宇宙觀である・言ひかゆれば吾々の靈魂なるものは・言語同斷の靈氣の一分子で・其の分子が物質を吸ひ寄せて一定の體相を現出したとき・其れが吾々の生であり・物質が崩れて體相を失つたとき・其れが吾々の死である卽ち生死卽涅槃であるのである・然らば煩惱卽菩提の說は如何にか說くぞ・曰く

煩惱とは吾々の身心を惱(ナヤマ)し亂(ミダ)す所の精神作用の異名で大體は此の作用を根本惑と隨惑との二つに分けるが細(コマカ)に別れば百八となり更に細に別ければ八萬四千の多きものともなるそうだが略說すれば

(一)色聲香味觸(眼耳鼻舌身)の五境に由て引起された所の慾とか人情とかいふものが煩惱の始起であり・それから

(二)飲食の慾・男女の慾・財產の慾・名譽の慾なんてものが・加はりて强烈な煩惱となり

其れがため衆生は老若男女の別なく苦しめらるゝのである・大智度論といふ書物は天竺の龍樹菩薩の著作で鳩摩羅什(クマラジウ)(後秦の高僧・天竺の人)の譯に成れるもので百卷もある浩瀚なものである

此の智度論中にも

哀れなるかな・衆生や・常に五慾のために惱まされ且つ之れを欲求して已(ヤマ)ず

とかいてある・吾々は全く此の智度論の如く・明けても暮れても慾のために惱んでゐるのである・たま

たゞ欲求したものが手に入りて一時喜んでも又々其れを失はんことを恐れて惱むのである・善くても惱み惡るくても惱み・生涯惱まぬ時はないのである・婆婆を苦の世界といふたのは至言といふべきである佛教といふものはお釈迦様が吾々衆生の此の苦惱を見るに忍びず思召され・御研究の上・發明せられた拔苦與樂の法を御示し下されたものなのである・が・其の方法・手段・方便は煩惱の數程に別れてゐるから簡單には説明が出來ないが大體は善因善果・惡因惡果の理法に依つて救濟するのである・人間の煩惱には色々あつて

(一)言ふて聽かせても・其れを信受せぬ性分もあり

(二)或は其れを能く信受して勤行するものもあり

(三)或は牛馬の如き下劣な生活をなして心に慚愧せぬものもあり

(四)或は己の心情に逆ふものに對して瞋(イカ)り怒るものもあり

(五)或は愚癡暗蔽で教へを理解し得ぬものもあり

(六)或は自分程勝れたものは無いと思ひ込み・教へを斥くる慢心なものもあり

(七)或は己の心情に順適なものを强爲的に取入れるものもあり

て其れがため・長く苦海に沈める・氣の毒なものもあるが又

(八)能く教を守り勤行して・苦海を離れんとするものもあり

(九)或は下劣な生活を慚て教を守り・苦海からの出離を勵むものもあり

て・それ〴〵其の分に應じ利益(リヤク)を蒙りて安樂する・其の安樂の心理狀態が卽ち悟(サト)りを得たといふのである・蓋し此の如き苦海出離の欲望あつて・悟道に入り得るのであるから

煩惱卽菩提

と稱せられたのである・菩提は覺悟の當體で卽ち再び輪廻轉生の苦から離れたものなのである

(昭和十三年四月二十日記了)

續伊呂波四十八訓　不許複製　正價金1.50

昭和13年6月20日　第1版印刷
昭和13年6月25日　第1版發行
昭和14年5月5日　第2版印刷
昭和14年5月10日　第2版發行

著者　思田重信
東京市麹町區麹町4丁目3番地

發行者　鈴木正二
東京市本郷區龍岡町31番地

印刷者　大門茜吉
東京市神田區三崎町2丁目22番地

印刷者　參成堂印刷所
同上

發行所　科學書院
東京市本郷區龍岡町36番地

發賣所　南山堂書店
東京市本郷區龍岡町31番地

電話小石川423.4757.4771番　振替口座東京6338番

392
496

終